0023244000

0023244-000

637-20

世界経済の基礎概念

生島広治郎・著

宝文館

昭和7

ADD

世界經濟の基礎概念

生島廣治郎著

東京
大阪
寶文館

昭和七年一月

離上
震下

日中爲市致天下之民聚天下之貨
交易而退各得其所蓋取諸噬嗑

637-20

序文

今より約十年前から世界經濟の研究に志し、世界經濟の理論的及び實際的研究に少からぬ興味を有してゐたが、當時世界の學界は世界經濟を學問上如何に取扱ふかに就いて未だ確乎たる方針を示してゐなかつた爲に、斯道の研究は極めて至難であつたことは言を俟たぬことである。

戰前及び開戰の當初に、獨墺の學界に於ては既にワルテルスハウゼン、シルダー、ハルムス等が世界經濟の學問的取扱方法を示し、就中一九一二年ハルムスが世界經濟學の基礎付として發表した「國民經濟及び世界經濟」は當時學界に多大のセンセーションを喚起し、彼の高調せる世界經濟の概念、世界經濟の存在、さては世界經濟學に對し贊否交々に岐れ、或は世界經濟の存在を否定し、或は彼の世界經濟概念を難じ、或は世界經濟學の存在理由を否認し、特に彼の世界經濟學の內容が廣汎に過ぎ、經濟學、政治學、法學、地理學、人類學等の多岐多端

に亘るものとして一人の學者の研究し能はざるものであるとの非難が有力であつた。加之世界戰爭の勃發以來、獨墺に於ては戰事に忙殺されて世界經濟の問題は殆んど顧みられず、世界經濟の研究は全然停頓の狀態となつてしまつた。

然るに世界大戰の終了後世界經濟の復興と與に賠償問題、戰債問題を始め世界各國の經濟的構造の大變動、換言すれば世界經濟の構造變動に對し、世界の諸國は如何に順應すべきかの大問題に逢着し、所謂世界經濟恐慌の深刻なる問題に直面するに至つた。是に於て各國間の經濟關係、卽ち世界經濟關係に對する認識が各國の經濟生活上第一義的重要性のあることを覺り、殊に一九二七年の世界經濟會議の成功以來、世界經濟的連帶性の問題が實際問題として眞面目に各國に考究されるようになり、現今に於ては世界の主要國に於て世界經濟研究の如何が國運の興隆に至大の關係のあることを痛感するに至つた。故に獨逸に於ける世界經濟研究の復興は勿論、ソヴィエット・ロシアの如く現在世界經濟に對し事實上左程の重要性を持たざる國に於ても近時世界經濟を世界經濟學より研究すべきことを高調し、又天然資源の豐富なこと世界に冠絶せる米國に於ても最近世界經濟學の研究を力說するようになつた。故に實際問題として戰後至大の重要性を有する世界經濟を學問上如何に取扱ふべきかといふことが現在再び學問上の重要問題となつて來た。

惟ふに此の問題は古くして新しき問題であり、之に對する方針及び解答は一にして止らない。抑も世界經濟の學問的取扱方法は之を二つに大別することが出來る。一は世界經濟を國民經濟學上より考察すべしとの說であり、他は世界經濟の考察には世界經濟學を必要とし、之より世界經濟を考察すべしとする說である。

先づ前者の說は世界經濟學を否定し、世界經濟は國民經濟學上より考察すべしとなすものであるが、所謂國民經濟學とは何ぞやの問題を殘してをる。國民經濟學は獨逸の學問であつて英國の Wealth of Nations 又は Principles of Poli-

tical Economy に對して特に Nationalökonomie (Nationalökonomik) 又は Volkswirtschafts-lehre と稱せられ、一八〇五年 Julius Gr. v. Soden が Nationalökonomie Bd. I に於て又之と時を同じうしてハレの Prof. Jacob が始めて唱道し、爾來漸次建設の歩を進めて現在に至つたものである。然し現代獨塊に所謂國民經濟の概念、その理論體系、隨つて國民經濟學の內容は區々に分れて未だ統一の域に達してゐないから、この內何れの國民經濟學が世界經濟の研究に最適であるかの問題が常に殘されてをる。故にかかる內容不定の國民經濟學に賴らずして國民經濟學と離れて別に世界經濟學を考案し之より世界經濟を考究すべしといふことは蓋し理由のある所である。

然らば所謂世界經濟學 Weltwirtschaftslehre とは何であるか。之に就いては勿論學說が區々に岐れてをるが、世界經濟學を社會經濟學の分科となす說と世界經濟學を經濟學、政治學、法學、社會學、心理學等の複合科學となす說とに大別することが出來る。前者の說は社會經濟學 Sozialökonomik を國民經濟學よりも包括する範圍の大なるものとなして世界經濟學をこの分科となしてをる。この種の學說は更に數種に分れるが、ハルムス、ベーラー、ナヒムソンの說が差當り問題となる。

ハルムスは往年社會經濟學を私經濟學、國民經濟學及び世界經濟學に分類したことは周知のことであつて、此の分類法に對しゾンバルト、ボン、ディールの等の非難のあつたことも事實である。當時ハルムスが世界經濟學と稱した內容は勿論多岐多端に亘つてゐたが、その固有の認識方法、理論體系なるものに就いては一向に示されてゐなかつた。特に古典學派に於て國際商業理論として多年發展したものがハルムスの世界經濟學に於て殆んど顧みられてゐなかつた。故にスキスのベーラー教授はこの點を指摘して古典學派には既に現代的世界經濟の概念が認識され、國內經濟理論に對し世界經濟理論が展開され世界經濟學が建設されてゐたと主張するに至つた。之に對しコチュニッヒ及びワイグマンの反駁があつたが、兎も角ベーラーに於ては世界經

濟學は古典學派の國際商業理論であつたことは明かである。尤も古典學派では其の學問を國民經濟學と稱しないから、今便宜上彼の說を社會經濟學の分科としての世界經濟學の部類に入れて置く。

右の意味に於ける古典學派の世界經濟學及びハルムスの世界經濟學と對立せるものはマルクス學派の世界經濟學である。マルクス學派の世界經濟學は全然新しきマルキシズムの傾向の一であつて、就中世界經濟學を高調するものはモスコーのナヒムソン教授である。彼はハルムス及びワルテルスハウゼンの世界經濟概念を法的地理的概念であると排して一九二八年世界經濟學の基礎付として世界經濟序論(露文)を發表し世界經濟學を社會經濟學の分科であると主張してをる。ナヒムソンの世界經濟學に對し他のモスコーのマルキスト間に非難もあるが兎も角彼は現在ロシアの代表的世界經濟學者である。

以上は社會經濟學の分科となす世界經濟學であるが、次に世界經濟學を複合科學となす說はケルン大學のレオポルト・フォン・ウキーゼの說である。彼によれば世界經濟學は認識論、經濟學、法學、政治學、心理學及び社會學の諸部分より構成せるものであつて、換言すれば現代の世界經濟の說明には古典學派の世界經濟理論は不十分であるから、之を認識論、法學、政治學、心理學及び社會學から補充すべきものであり、之等相互に補充し說明することが世界經濟學の任務であるといふ。そして之によつて世界經濟學を漠然たる應用經濟學に陷れず且つ思惟の經濟を齎す利益があるといはれてをる。故にウキーゼの世界經濟學は社會經濟學の分科ではなく若干の學問の複合であり隨つて何等統一的理論體系を備へてゐないものである。

果して然らば以上の世界經濟研究方法に關する學說の對立は如何に解決さるべきものであるか。先づウキーゼの唱へる世界經濟學はその範圍が往年のハルムスの世界經濟學以上に廣汎に過ぎ恰も病めるマンモスの巨象を描くに等しい結果に陷ることは明白であり、是こそ一人の學者の爲し得べき

限ではない。次に世界經濟學を社會經濟學の分科となす說に於ても所謂社會經濟學の內容が不定であり、時には社會經濟學も國民經濟學も同樣の內容を有することもあり、例へばカッセルの社會經濟學とアドルフ・ウェーバーの國民經濟學とは大同小異である。故に世界經濟を國民經濟學上より考察すべしといふ說も、社會經濟學の分科である世界經濟學上より考察すべしといふ說も實質上何等相違のなき場合も考へられる。故に私は國民經濟學や社會經濟學の名稱に捉はれずして、特定の經濟學(之を社會經濟學と稱し)の立場より經濟概念、國民經濟概念、世界經濟概念を考究しその理論的體系を明かにすることが當面の問題であり、そして世界經濟概念が明白となりその理論體系が明かになれば、之が國民經濟學、經營經濟學に對立すると否とを問はず之を世界經濟學と稱して可なりと思ふ。現に世界經濟學の基礎付を企圖された作田莊一博士の學位論文である「自然經濟と意思經濟」はこの傾向を辿つてをるものと考へられる。但し博士は國民經濟學は意思經濟の理論を中心とし、世界經濟學は自然經濟の理論を中心とするものとして兩者の對立を認められてゐるようである。而して右の意味に於ける世界經濟學は飽くまでも經濟學の分野に屬するから、之をウェーゼのいふ如き複合科學としての世界經濟學と識別するために特に之を社會經濟學の分科であると稱する必要がある。

茲に上梓せんとする著書は世界經濟を經濟學上如何に取扱ふべきかに對する私の考案であつて、第一篇に於て經濟概念を決定し、第二篇に於て世界經濟概念に關する現代の代表的な諸說を考察し、夫〻その學說の立脚する經濟理論を大別して市場經濟理論と統體經濟理論となし夫〻の理論の認識能力を考察した結果、夫〻固有の存在の理由のあることを認め、之等の理論に立脚する世界經濟認識をその認識能力によつて分類し體系付けて世界經濟の範疇による思惟の方法を考案したものである。故に本書を世界經濟の基礎概念と題したのである。この書は別に發表する「世界經濟學論」「世界經濟の生成」「世

界經濟構造變動」「世界經濟機能論」と與に私の世界經濟學の骨子となるべきものである。

固よりこの問題の研究は現代の理論經濟學自體の研究と世界經濟自體の研究との二箇の最大難問題を取扱ふことであるから、私としては常に世界經濟自體の研究を主として理論經濟學の研究を從とせねばならなかつた。加之本書に於ては叙述上私の專門外の社會學の問題まで言及しなければならなかつた。隨つて之等の諸點に就いては勿論夫〻の專門家から敎を乞はねばならぬ次第である。而して淺學菲才の私が最近敢て斯の如き考案を發表するに至つた動機は種々あるが、特に最近東大法學部敎授田中耕太郎博士が學位論文として發表された「世界法の理論」を擧げなければならぬ。博士によれば法學上世界法が我が國に於て何等研究されてゐないことを遺憾として同書を上梓されたのであつて、之が我が法學界に貢献する所大なりしことはいふを俟たぬ所である。之と同時に博士は世界經濟に關する文献が我が學界に於ては世界法に比べると多少ないではないが甚だ寥々たること、隨つて博士が世界法の研究上多大の困難を感せられたことを述べられ、而も博士が世界法論に於て世界經濟に關し論せられた所は我が經濟學界に於て經濟學者が未だ紹介及び論及せざりし部分までにも言及され、實に世界經濟の研究者にとつて恐入らざるを得ない箇所もないではない。是私をして特に最近本書の脱稿を促進せしめた重大な動機であり、同時に田中耕太郎博士に深く感謝しなければならぬ。

本書を書くに就いて數多の先進から少からぬ御世話になつたことに深く感謝しなければならぬ。神戸商大學長、田崎愼治先生及び同敎授瀧谷善一先生の私に對する不斷の力强き御鞭達と御指導を忝うしたこと、又一九二八年及び二九年に亘つて約一箇年半北獨逸のキール大學附屬世界經濟研究所の研究員たりし時代、同所長 Prof. Dr. Geheimrat Bernhard Harms 並に同大學の Prof. Dr. Adolf Löwe, Prof. Dr. Gerhard Colm, Prof. Dr. Friedrich Hoffmann, Prof. Dr. Andreas Predöhl

並に現東大經濟學部講師 Prof. Dr. Kurt Singer の諸氏より多大の御指導と助言を賜つたこと、更に私のキール時代に私を來訪され約一箇月間滯在された内池廉吉先生が當時私の研究を毎日御聽取下さつて私の研究を格別督勵して下さつたこと、又東京商大の上田貞次郎先生及び京都帝大の作田莊一博士が時々私の發表せる論文に對し態〻芳墨を以て御親切な御批評と御高說を賜つたこと、又慶大の小泉信三教授が嘗て國民經濟雜誌に發表せる拙稿「世界經濟の基礎概念」を昨年中央公論秋季特別號に御紹介賜つたこと等に對し、茲に衷心より感謝の意を表さなければならぬ。終に神戸商大學生、長谷場成二君が本稿の淸書の大部分を手傳はれたことにも厚く御禮をいはねばならぬ。

昭和七年明治節

神戸諏訪山麓にて

生島廣治郎

目次

第一編　序論　人間協同生活の原理

第一章　人間の本質……一

(一)　總說……一

(二)　人間の本質……四

(三)　人間生活の制約……六

第二章　人間協同生活の形成確保……九

(一)　人間協同生活の根本關係……九

(二)　人間協同生活の形成確保……一四

(三)　和合社會と權力社會と經濟社會との優位論……一七

(四) 右の諸說に對する批評……二〇
(五) 和合社會と權力社會と經濟社會との三位一體的形成……二三

第二編 世界經濟概念論

第一章 世界經濟に所謂世界の概念……二七
(一) 世界の字義……二七
(二) 世界の概念……二七
(三) 世界經濟に所謂世界の概念……三〇
(四) 世界法に所謂世界の概念……三三
(五) 世界國家に所謂世界の概念……三五
第二章 世界經濟の概念に關する學說の分類……三九
(一) 總說……四一

(二) 廣義の世界經濟概念……四一
(三) クスケの說に對する批評……四六
(四) 狹義の世界經濟概念……四八
第三章 市場經濟論……五一
(一) 市場經濟の概念……五一
(二) 市場經濟と資本主義との關係……五五
(三) 自由市場經濟と統制的市場經濟……五七
第四章 世界經濟の市場經濟概念……六四
(一) 總說……六四
(二) 世界經濟の自由市場經濟概念……六五
(三) 古典學派の世界經濟概念……七一
(四) ウニフェルザール・イコノミー及び萬民經濟の概念……七六

第五章　自由市場經濟及び統制的市場經濟の世界經濟の限界……八二
(一)　自由市場經濟の世界經濟の限界……八二
(二)　世界市場交通は統制的なりや……八六
第六章　世界經濟の市場經濟說に對する批判……九一
(一)　市場經濟理論に對する批判……九一
(二)　世界經濟の市場經濟說に對する批判……九四
(三)　市場經濟理論の職能……九六
第七章　社會統體の概念……一〇四
(一)　總說……一〇四
(二)　メンガー及びグンプロウヰッツの說……一〇七
(三)　ラツェンホーファー及びマイヤーの說……一一〇
(四)　テニエス、アイスラー、ジンメル、ウェーバー及びケルゼルの諸說……一一三
(五)　ウヰーゼの說……一一九
第八章　シュパンの社會統體概念……一二七
(一)　總說……一二七
(二)　經濟の概念……一三八
(三)　統體の概念及び分類……一三四
(四)　社會經濟の統一的契機……一四二
第九章　ゴットル及びハルムスの社會統體概念……一五一
(一)　ゴットルの統體概念……一五一
(二)　社會統體と經濟統體……一五三
(三)　經濟統體の周圍世界(生活範圍と生活地)……一五七
(四)　經濟統體の過去(生活根源と生活遺產)……一六〇

(五) 經濟統體の基礎と營利統體の基礎……一六三
(六) ハルムスの社會經濟統體概念……一六六
(七) 世界經濟の社會統體說の分類……一七〇
第十章　シルダーの世界經濟概念……一七一
(一) 總　說……一七一
(二) 世界經濟に對する計畫的影響……一七五
(三) 世界經濟の Einheit の概念……一八一
(四) シルダーの說に對する批評……一八三
第十一章　ワルテルスハウゼンの世界經濟概念……一八五
(一) 總　說……一八五
(二) 世界經濟の考察方法……一八八
(三) 社會的全體としての世界經濟……一九〇

(四) 世界經濟の法的基礎……一九五
(五) 國民經濟と世界經濟との區別……二〇五
(六) 世界經濟の構造……二一〇
(七) ワルテルス・ハウゼンの說に對する批評……二一九
第十二章　ハルムスの世界經濟概念……二三二
(一) 總　說……二三二
(二) 「國民經濟及び世界經濟」に於ける世界經濟概念……二三五
(三) 「國際法及び外交辭典」に於ける世界經濟概念……二三〇
(四) 關係統體としての世界經濟概念……二三四
(五) 世界經濟法と世界經濟との關係……二三九
(六) 右のハルムスの說に對する批評……二四五
(七) 社會經濟統體の概念……二五一

(八) 社會經濟統體としての世界經濟概念……二五七
(九) 右の要旨とその批評……二六五

第十三章　シュパン及びゴットルの世界經濟概念……二六八
(一) 總　說……二六八
(二) シュパンの國民經濟概念……二七一
(三) 世界經濟の概念(上)……二七四
(四) 世界經濟の概念(下)……二八〇
(五) 世界經濟と國民經濟との區別及び關係……二八三
(六) シュパンの說に對する批評……二八八
(七) ゴットルの國民經濟概念……二九一
(八) 國民經濟とその生活範圍との關係……二九七

第十四章　ウヰーゼ及びアウストの世界經濟概念……三〇三
(一) 總　說……三〇三
(二) ウヰーゼの經濟學及び社會學論……三〇五
(三) ウヰーゼの世界經濟學論……三〇七
(四) 世界經濟社會學より見たる世界經濟概念……三一一
(五) 世界經濟に於ける社會過程……三一三
(六) 世界經濟に於ける分化及び結集過程……三一七
(七) アウストの世界經濟概念及び世界經濟社會學(上)……三二一
(八) アウストの世界經濟概念及び世界經濟社會學(下)……三二五
(九) ゲオ・ポリチークの世界經濟の集中化と分散化論……三二八
(十) ウヰーゼの說に對する批評……三三三

第十五章　世界經濟の社會統體論……三三六
(一) 世界經濟の社會統體說概觀……三三六

(二) 世界經濟統體の概念……三四〇
(三) 周統體としての世界經濟……三四九
結論 世界經濟の範疇による思考……三五三
附錄
獨逸賠償金支拂理論の考察……三六八
歐洲貿易の三重障壁地圖……四一一
參考文獻……四一五
人名索引……四二一

目次終

第一篇 序論

人間協同生活の原理

第一章　人間の本質

（一）　總　說

ドイツに於ける世界經濟學の提案者であるキール大學のベルンハルド・ハルムス教授①は曰く、

「世界經濟概念の最終的規定は世界經濟學の結論であるが、世界經濟理論を建設する前に豫めその對象に對する一定の概念を決定しなければならぬ。そしてこの條件を充す爲に從來學界に於て不斷の努力のあつたことは明かである。抑も世界經濟の理論は國民經濟の理論に立脚してのみ建設し得るものである。併し經濟學は未だ何人にも承認され得る國民經濟の普遍的概念の決定に至らず、從つて國民經濟の統一的な理論にも到達しなかつた。同

① Bernhard Harms, Der Begriff der Weltwirtschaft. Weltwirtschaftliches Archiv, 23. Bd. Heft 2, April 1926. S. 131.

様に世界經濟の概念規定も從來屢〻企てられたが成功せず、現に私が一九一二年「國民經濟及び世界經濟」[1]なる著書に於て網羅した重要な諸定義を比較しても、一として同じものはなく、その後更に諸種の概念規定が之に加へられて來た。併しドイツに所謂 Weltwirtschaft 英、佛、伊に所謂 Worldwide Economy, Economie mondiale, Economia mundial の最も滿足する概念の構成は、その認識の對象が本質上一個の Einheit として十分認識されない爲に困難であるのではない。現代は二十年前に比すればそれだけの進歩があり、從つて概念規定も新たに始めることは理由のある所である。」

如何にもハルムスのいへる如く世界經濟概念は世界經濟學[2]の出發點であり歸結點であり、有らゆる世界經濟問題研究の根本問題であらねばならぬ。蓋し世界經濟の概念を究明して始めて世界經濟の範疇に於て考へること、即ち世界經濟的考へ方を把捉すべき基礎が出來るからである。而して世界經濟の理論は社會經濟學の理論に基いて建設し得るものであるが、經濟の概念

① B. Harms, Volkswirtschaft und Weltwirtschaft, Versuch der Begründung einer Weltwirtschaftslehre 1912. (3. unveränderter Neudruck, 1925)　② Weltwirtschaftslehre.
③ Hermann Levy, Die Grundlagen der Weltwirtschaft, 1931. Bibliographischer Anhang 同書に於ける上の說は實は最後の附錄

從つて國民經濟の概念自體に就いて依然として諸說紛糾してゐる事は蔽ふべからざる事實である。故にヘルマン・レヴィー教授が「統一的世界經濟理論は存しない。從つて國際經濟問題が國民經濟の概念より理論的及び方法論的說明を取らねばならぬことは何等怪しむに足らぬ。」[3]と斷定しても世界經濟問題說明の根底たる國民經濟概念に何等統一のなき以上、レヴィーの「世界經濟の基礎」は頗る根底の薄弱なものといはねばならぬ。我が國に於てもレヴィーと同樣の議論が屢〻聞かされるが、[4]何れも一見、尤の樣で而も反省すれば根底のなきことが直ちに諒解される。

されば世界經濟の概念を明かにするには、先づ經濟の概念から探求しなければならぬ。併し經濟は人間協同生活を離れて存するものでないから、經濟概念の探求には人間協同生活を究明しなければならぬ。而して人間協同生活の究明は少くとも人間の本質に尋淵しなければならぬ。是に於て第一に逢着する問題は人間とは何ぞやである。尤も茲では人間の本質論に深く立

の文献の處に記してある爲、往々にして看過され易いが、かゝる重要な論旨は寧ろ同書の冒頭に於て堂々と記述さるべきものである。
④ 深見義一氏は世界經濟總論に於て「世界經濟學の方法は國民經濟學に用ひられるものと同じきものであらう」(156頁)と述べられてゐるが、何れの國民經濟學と同一の方法であるかに就いては言及されてゐない。

入つて考究することが目的でなく、經濟概念の出發點として人間の本質を明かにすることを眼目とする。

(二)　人間の本質

想ふに人間[1]とは何ぞやの問題に對し古來三種の解答が與へられてをる。(一)ユダヤ・クリスト教の傳說であつて、人間はアダム・エバの子孫であるといふ思想である。(二)ギリシア古代の思想であつて、人間の自己意識を以て人間の本質となし、ロゴス、理性を有することを人間の本質とする。(三)近世自然科學及び發生心理學的思想[2]であつて、人間は地球なる遊星發達の最終的所產でエネルギー及び諸能力混合の複雜の程度によつて、人間は人間以下の動物界に於ける以前のものと異つてをり、これが人間の本質であるといふ。

以上三種の人間本質論は何れもその立場を異にし、卽ち(一)神學的(二)哲學的(三)自然科學的立場よりの解答であり、何れも互に相容れざる見解である。故に人間に對する統一的な解答は未だ與へられてゐないものといはねばならぬ。更にダーウヰンの進化論によつて人間の意義は一層混雜を來し、マックス・シェラー[3]のいへるが如く、現代の樣に人間の歷史が疑問となりし時代は未だ嘗てなかつたものである。

人間の本質の考察は先づ人間と動植物との關係、次に人間の形而上學的獨自の存在に就いて向けられる。卽ち人間なる言葉には一方に於て、人間が形態上、背椎動物及び哺乳動物の類概念に屬し、而も單に動物なる種類に屬するに止らずして動物界に於て極めて小さな一角をなしてをる。他方に於て、人間は形態上、生理上、心理上たとひオランウータンとは極めて類似してゐても如何なる動物に對しても嚴然と對立せる概念を有してをる。茲に人間獨自の存在が認められる。[4]故に人間は一面に於て自然界に屬し、他面に於て精神界に屬し、高等動物であると同時に自由の所持者であるといはねばならぬ。此の場合に人間に於て自然が根本であるか、精神が根本であるかによつて哲

① Der Mensch.
② Die genetische Psychologie.
③ Max Scheler, Die Stellung des Menschen im Kosmos, 1930. S. 13—16.
④ Max Scheler, a. a. O. S. 14-15.

學上、唯物論、唯心論に分れるが、茲ではかゝる哲學上の問題に立入ることなく、單に自然と精神との中間に位するものであるとの何人にも承認され得る命題を以て一應滿足することとする。

(三)　人間生活の制約

されば人間の生活は一方、自然に制約されてゐると同時に他方、精神に制約されてをる。先づ人間の自然的制約には人間自然と環境自然[1]とがあり、兩者は幾千年來本質的變化がなかつたといはれてをる。人類學[2]は人間自然を對象とし、人文地理學[3]は環境自然を對象とする。人文地理學は經濟學と隣接せる科學であつて、經濟學に對し經濟學上より解決すべき幾多の問題を殘してをる。所謂經濟地理學[4]は人文地理學に屬することは勿論である。

次に精神的制約は人類學、社會心理學、哲學の對象である。人間の精神が幾千年來變化せしや否やに就いては學問上論爭せる所であるが、通常全然不變

① Natural Enviroment.　② Physische Anthropologie.
③ Anthropogeographie.
④ Wirtschaftsgeographie (Wilhelm Götz. Kurt Hassert, Ch. Gruber)　經濟地理學と地理的經濟學とは學問的に異り、後者は之をGeographische Wirtschaftslehre と稱すべきである。(A. S. von Waltershausen)

的と考へられる精神的制約は、歷史社會學[5]に依れば長き星霜に亘る歷史的經過に於て大なる變動のありしことが說かれてをる。

何れにしても人間の生活は自然的及び精神的制約を受け如何なる人間と雖ども此の制約より免れることは不可能である。而して人間自然の制約として重要なものに(一)生命の有限であること(二)慾望を有すること(三)社會的動物であることを擧げなければならぬ。人間自然が社會的動物である以上、人間の孤立生活は自然的制約に反して不可能であり、從つて人間の生活は先天的に人間協同生活であらねばならぬ。[8]而して之は人間協同生活の由來に對し何人にも承認され得る解答である。之と同時に人間の重要な精神的制約としてカント[7]は無上命法を敎へてをる。故に人間協同生活は自由に思惟する人間協同生活であらねばならぬ。人間協同生活から自由を除き去つたものは、人間の以前の形態にありし動物的人群と何等異る所がない。故に人間は生活機能を維持し自由に思惟する社會的動物[6]であり、主觀と客觀と

⑤ Geschichtliche Soziologie.
⑥ 故にアリストテレスは人間は政治的動物 Zoon politikon (ein auf Staatenbildung angelegtes Lebeswesen) であるといふ。
⑦ Kant (Kategorischer Imperativ)
⑧ 北村五良教授「統制經濟の基礎理論」國民經濟雜誌53卷3號、和辻哲郎博士著「倫理學」紀平正美博士著「哲學概論」第三篇行爲論參照。

合一せるものであり、そしてその合一が體驗によつてなされてゐるものであるといはねばならぬ。

第二章　人間協同生活の形成確保

（一）人間協同生活の根本關係

然らば人間協同生活[1]は如何にして形成確保されるものであるか。換言すれば人間協同生活は如何なる根本關係より形成確保されるものであるか。此の問題に對しても自然的制約と精神的制約との兩面より夫々考察することが出來る。前者より考察した現代の經濟學者はアドルフ・レーベ教授[2]であり後者より考察した經濟學者はゴットル教授である。茲ではゴットルの說[3]を出發點とする。

ゴットルに依れば人間協同生活には三つの根本關係がある。即ち（一）人人の生活上の和合（二）人々の生活上の不和（三）人々の生活難である。

① Das menschliche Zusammenleben.
② Adolf Löwe.
③ Fr. von Gottl-ottlienfeld, Wirtschaft und Wissenschaft, 2. Band, 1931, § 410 f.

Gemeinschaft

第一に人々の生活上の和合、ゴットルの所謂レーベンス・アインツラフト[1]とは人間協同生活上意慾[2]の一致せる關係である。此の關係から人間協同生活が形成確保されることは明白である。一般に人間協同生活が人々の内心の和合の精神[3]を以て不斷に形成確保される方面をゴットルは和合社會(ゲマインシャフト)[4]といふ。家族、部族、血族、民族、國民はこの代表的なものである。

家族は人間自然の制約より考察すれば、生命の有限性に對して何人も組織すべき血緣社會であつて之によつて子孫を殘し人間生存の超時間的存續を保證することが出來る。この點に於て家族は生物的秩序(血統的秩序)である。之と同時に家族は家族形成の精神より省察すれば、父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和せる慈愛社會であつて和合社會の典型である。

故藤井健治郎博士は家族を族制と考察され、之を大別して(一)家制(二)夫婦制の二種となし、前者は家といふ實體があつて現在の家族の各員以上に超越してゐて相續不斷をなすものである。故に現在の家族は其家を過去のそれに受けて未來のそれへ傳へて行く、長き連鎖の中の一環である。然るに後者

① Lebenseintracht.　② Wollen.
③ Im Geiste inneren Einverständnisses.　④ Gemeinschaft.
⑤ 故藤井健治郎博士著「國民道德論」181—182頁
⑥ 民族の概念に就いては神川彦松博士論文「民族の本質に就いての考察」國家學會雜誌40卷12號「文化共同體としての民族」同誌45卷7號、田中耕太郎博士著「世界法の理論」第三章162頁以下參照
⑦ 藤井博士同著327—328頁、田中博士同著第四章「世界法の世界社會的基礎」圓谷弘氏「世界社會の研究」社會學雜誌22號
⑧ Lebenszwietracht.

は夫婦を以て本體とし、夫婦のある限り家も亦存し、夫婦を離れて別に家なるものが存在しないとする。故に夫婦制には遺産の相續があるのみ。家制は主として東洋諸國に、夫婦制は主として西洋諸國に行はれてゐる。我が國は大體家制である。[5]

民族及び國民は家族に比すれば之程和合の精神の強きものではない。國民は必ずしも同一の民族[6]である譯ではなく、又同一の民族が常に同一の國民を成す譯でもないが、一般に國民は共通のイデーによる和合の精神によつて形成確保されてをる。我が日本國民は皇道によつて和合の精神が實現され億兆心を一にして世々其厥を濟す和合社會である。和合の精神は更に人類社會を形成せんとして現今文明諸國民を通じ、正義人道による人類の和合社會[7]が形成されてゐるが、和合は極めて限られた分野に限定され、例へば國際的宗教、學藝、社交團體の形成が是である。

第二に人々の生活上の不和、ゴットルの所謂レーベンス・ツウヰートラフト[8]は人間協同生活上意慾と意慾との相反する鬪爭關係である。之を抽象的に

いへばホッブス[1]の所謂萬人が萬人に對する鬪爭である。而も人々の生活上の不和は第三の根本關係である生活難の爲に一層激成され、人間協同生活は不斷に脅威を蒙ることゝなる。故に若し人々が鬪爭を不斷に繰返すときは結局人間協同生活を乖離[2]せしめることは明白である。之は他面より見れば、社會的動物である人間は孤立無援の狀態に陷り少くとも自然的制約に反することになる。故に人々の生活上の不和を克服する爲に相反する意慾に對し第三の意志が權力となつて發動して人々關係に强制を課し、以て人間協同生活を常に形成確保せんとする。茲に權力關係の確立、政治的秩序の確立となる。之を權力社會といふ。而して國家は此の典型である。併乍人々關係に課する强制の度が過ぎるときは却つて人間協同生活の崩壞[3]を釀す虞があるから、强制と之に讓歩する意志の自由とが常に調和されねばならぬ。一般に强制と自由との不斷の調和的精神を以て形成確保される人間協同生活の方面をゴットルは之を權力社會[4](マフトシャフト)(政治)といふ。是れ人々の生

① Hobbes (1588—1679) bellum omnium contra omnes..
② Entstaltung.
③ Die Machtschaft ist Gestaltung im Geiste dauernden Einklang von Zwang und Freiheit.

活的不和を變じて人々の生活的平和を創造する人間協同生活確保の間斷なき努力である。

第三は人々(主體)の客體(地物)に對する根本關係である。ゴットルの所謂生活難[5]である。之は主體—客體—主體の三角關係である。先に述べた樣に人間自然の制約は地物を要求してをる。而して人々(主體)の客體(地物)に對する意慾はその意慾の實行を助ける客觀的能力[6]によつて始めて充足を可能とする。意慾が如何に無限に地物を追求しても、人間の客觀的能力は有限であるから、意慾は內容に於て又程度に於て自ら制限を受ける。故に客體に關して無限の意慾と有限の能力との間に不調和[7]の生ずることは當然である。ゴットルはこの不調和を生活難と云ひ、客體に對して主體の有する意慾が犧牲[8]を以て之を處理[9]せんとする要求[10]として現れるものを慾要[11]と稱し、客體が現實に主體に處理[12]されることを慾要の充足[13]と言ふ。この場合、慾要充足に對し正しき道を示すものは人間の技術的理性[14]であつて、所謂經濟法則が是である。こ

④ Lebensnot
⑤ objektive Können
⑥ Missverhältnis
⑦ Aufwand
⑧ Verfügen
⑨ Forderung
⑩ Bedarf
⑪ Verfügbar
⑫ Deckung
⑬ Technische Vernünft

の法則は技術的法則であつて、經濟的法則ではない。一般に人間協同生活が生活難に對し、慾要と充足との不斷の調和的精神を以て絶えず形成確立される方面をゴットルは之を經濟と稱してをる。[1]

（二）人間協同生活の形成確保

以上人間協同生活には三つの根本關係即ち人々の生活上の和合、人々の生活上の不和及び生活難のあることを述べた。そして人間協同生活は第一の根本關係に基いて和合社會の形成[2]となり、第二の根本關係に對して權力社會の形成[3]となり、第三の根本關係に對して經濟社會の形成[4]となる。

ゴットルは第一の和合の精神を以て形成する和合社會を das Spezifisch-Soziale といひ、其成員を Wirgruppe といひ、第二の強制と自由との不斷の調和的精神を以て形成する權力社會を das Politisch-Soziale といひ、その成員を Verbandsgruppe といひ、第三の慾要と充足との不斷の調和的精神を以て形成する經濟

① Wirtschaft ist Gestaltung des Zusammenleben im Geiste dauernden Einklangs von Bedarf und Deckung.
② Gestaltung zur Gemeinschaft.　③ Gestaltung zur Machtschaft.
④ Gestaltung zur Wirtschaft.

を das Ökonomisch-Soziale といひ、その成員を Versorgungsgruppe と名付け、この三者が人間協同生活の夫々部分形成[5]をなして人間協同生活全體が眞に確保される。そして社會的 das Soziale とは畢竟この三つの形成であつて、之以外にはあり得ないものである。

人間協同生活は之を社會統體[6]とすれば、人間協同生活には夫々之を部分的に形成する三つの社會統體があり、此の三種の社會統體は人間協同生活の三つの階層を成し、恰も次の圖の示すが如き觀を呈す。

經濟
政治
國民・家族

固より人間協同生活の確保には三種の社會統體が不分離に交錯的に或は三位一體的に形成してゐる。故に實際に於ては右の圖に示した如く、決して分離的に形成してゐない。唯社會科學上、人間協同生活が如何に形成確保されるか、換言すれば人間協同生活形成確保の精神如何によつて三種の社會統體に類別され得るに過ぎないものである。そして第一を狹義の社會

⑤ Teilgestaltung
⑥ Soziales Gebilde.

學、[1]第二を所謂國家學、[2]第三を所謂社會經濟學[3]の固有の問題[4]として分離して取扱ふことが出來る。而して是が社會科學の原理的三分類である。[5]

以上は人間協同生活の形成を精神的制約より出發して考察せる結論である。恩師アドルフ・レーベ教授[6]は自然的制約卽ち(一)生命の有限性(二)社會的動物(三)慾望を有することより發足して人間協同生活の秩序を考察して(一)血統的秩序(生物的秩序)[7](二)政治的秩序[8](三)經濟的秩序[9]に分類し、先に精神的制約より出發せるものと同一の分類に達してをる。[10] 兩者は結論に於てかく同一であるが、此の結論に立脚して經濟理論を建設する場合に、兩者は方法論的に根本的に異る經濟理論に導く可能性を有してをる。卽ち經濟學上前者は人生科學的出發點となり、後者は自然科學的出發點となる。前者は社會經濟統體理論の出發點となり、後者は市場經濟理論の出發點となるものである。此の問題は今茲で立入ることを控へて後述に讓ることにする。

① Soziologie ② Staatslehre ③ Sozialökonomik ④ Problematik
⑤ Gottl, Wirtschaft und Wissenschaft, 2. Bd. 1931, 9. Vom Grundprobleme der Lehre von der Wirtschaft.
⑥ Adolf Löwe. 生島廣治郎「世界經濟の基礎概念」國民經濟雜誌51卷1號 ⑦ Blutsordnung, Biologische Ordnung. ⑧ Politische Ordnung. ⑨ Wirtschaftsordnung. ⑩ ゾンバルトは此の根本的事實を(1)生物的事實(2)政治的事實(3)經濟的事實といふ。Sombart, Kapitalismus und Kapitalistischer Geist in ihre

(三) 和合社會と權力社會と經濟社會との優位論

上來によつて人間協同生活は三種の社會統體より形成されてゐることが明かとなつた。之に就いて重要な問題はこの三種の社會統體中、何れが根本的であるかの問題である。この問題は學問上可成古い問題であつて、從來之に對して三種の異る解答が與へられてをる。卽ち第一はゴビノー派、第二はランケ派、第三はマルクス派の解答である。

ゴビノー[11]は人種學に立脚し「人種不平等論」を著して人種を以て根本となす。世界には三種の根本的人種卽ち黑色、黃色、白色人種があり、之以外の人種は混血種である。而して從來一切の文化は白人種によつて創造され、世界歷史の一切の經過は人種の支配と人種の混合の相關々係より說明されるものであるといふ。故に彼に依れば人間協同生活は總て人種卽ち血統を以て根本原理となし、從つて血統關係に立脚する社會統體が根本であるといふことにな

Bedeutung für Volksgemeinschaft und Volkszersetzung; Volk und Reich der Deutschen, herausg. von Harms 1. Band S. 280.
⑪ Gobineau, Essai sur linégalité des humaines, Paris 1831/55. Paul Barth, Die Philosophie der Geschichte als Soziologie I; Die ethnologische Geschichtsauffassung. S. 558. f. O. Spann, Gesellschaftslehre, 1923. S. 51—16.

る。其後彼の學說を繼承する數多の學者が輩出して所謂ゴビノー學派なるものが現れるに至つた。

ゴビノーが血統關係を根本とせるに對し、ランケ[1]は權力關係、政治を根本であるといひ、この說を汲むネオランケ學派が現れてをる。更に國家を以て根本的なるものと力說せるローレンツ・フォン・シュタインは「公法の最高の指導原理、卽ち血統的及び身分的秩序に缺けてをる自由發展の第一基礎は社會の外にある國家の地位である。國家は經濟の外にあり、上にあるものである」と主張してをる。

然るにマルクス及びマルキストは唯物史觀の立場より經濟を以て人間協同生活の根本であるとなし、彼の經濟學批判の序文[3]に「人間は社會的生產に於て特定の必然的の其意志より獨立せる關係に入る。之は物質的生產力の特定發展階段に適應する生產關係である。この生產關係の總體が社會の經濟的構造であつて、この眞實の基礎の上に法律的及び政治的上層建築が建てら

① Leopold von Ranke (1795—1836), Eduard Fuerter, Geschichte der Neueren Historiographie, 1925, S. 472 ff.
② Lorenz von Stein, Gegenwart und Zukunft der Rechts-und Staatswissenschaften, 1876. S. 291. P. Barth, a. a. O. Die politische Auffassung der Geschichte, S. 613. f.　③ Marx, Zur Kritik der Politischen Ökonomie. Vorwort, herausg. von K. Kautsky.

れ、この基礎の上に特定の社會的意識形態が適應する。故に物質的生活の生產方法が社會的政治的及び精神的生活過程一般を制約する」といひ、そしてこれは一切の社會の歷史に通じて妥當するものであり、資本主義時代は勿論資本主義以前の時代に於ても亦さうであると主張する。[4]

以上三種の說は歷史學及び社會學上多年に亘る論點であつて、相互に相容れざる說である。マックス・シェラーは第一の說を人種主義[5]、第二を政治主義[6]、第三を經濟主義[7]と名付け、何れも自然主義[8]の誤謬に陷れるものであるといひ之等の對立を知識社會學の立場より文化發展の過程より考察して解決せんとした。彼は文化發展の過程[9]を三期に分け、第一期に於ては一切の血統的關係が出來事の自變數となり、政治的及び經濟的原因より生ずる出來事の領域を規定する第一原動力[10]であり、第二期は政治的權力要素、就中、國家が第一原動力となり、第三期は經濟が第一原動力となり、經濟的要素が眞實の出來事に對して決定的となるといふ。[11]

④ 河上肇博士著「唯物史觀研究」Paul Barth, a. a. O. Die ökonomische Geschichtsauffassung, S. 622 f.　Rudolf Stammler, Wirtschaft und Recht 1921. 參照。　⑤ Rassenativismus.
⑥ Politismus.　⑦ Ökonomismus.　⑧ Naturalismus.
⑨ Phasenordnung der Abläufe.　⑩ Wirkprimat.
⑪ Max Scheler, Soziologie des Wissens, Versuche zu Einer Soziologie des Wissens, 1924, S. 29—30.

（四）右の諸説に對する批評

想ふに右の三種の關係中、一切の時代を通じて何れが根本的なりやを決定せんとする説はシェラーのいへるが如く人間協同生活の自然主義的考察より生じてをる。併し之を人間協同生活形成の精神的考察からみれば、何れが根本的なりやを決定することは出來ない。故にシェラーの所説も亦當つてゐない。尤も歴史上時代によつてその何れかゞ意識的に多く現れることはあつても、人間協同生活形成上、三つの内何れが根本であるかを決定することは不可能であつて、その何れの重要性をも無視することは出來ない。今三種の形成中何れかを缺くときは如何。血統を無視することは人間の永久に生きることを前提とし、權力關係を無視することは人々間に鬪爭のなきことを前提としてプルードン[1]の無政府主義、クロポトキン[2]の相互扶助の世界となる。ホッブス[3]は人間の社會的動物であることを否定して社會は「萬人が萬人

① Proudhon. (1809—1865)
② Kropotkin, Mutual Aid.
③ Thomas Hobbes (1588—1679).

に對する鬪爭である」[4]といつたことはそれ自體謬りであるが、權力關係を輕視する説に對して傾聽すべき説である。特に生活難より人々の不和が一層激成される以上、之を制禦すべき政治が常に必要となることは明白である。

更に經濟を無用とすることは人間が地物と沒交渉となり霞を食つて仙人となるか、又は人間が地物より解放され、慾要に對する充足能力が無限に發達することを必要とする。英國の自然科學者ソヂー[5]の未來社會に豫言する如く、將來萬有を萬有に還元する方法が發達するときは、無限の意慾に對し無限の充足能力が伴ふから、人間の生活難は消滅し經濟は人間協同生活より消滅してしまふことは明かである。現に英國に於て最近科學の驚異と稱讃されてをる水素原子の分析の如きはこの方面の一進歩を示すものであり、この意味に於て自然科學の奬勵進歩は生活難克服の根本的政策といはねばならぬ。併然地球上の人間協同生活に生活難の存續する限り、地物に關し慾要と充足能力との不調和の存續する限り、兩者を絶えず調和せしむべき經濟は必要缺

④ Bellum omnium contra omnes.
⑤ Soddy.

くべからざるものである。

要するに以上三つの人間協同生活の形成は過去の歴史に於ても、亦現代の生活に照しても、その何れかの優位を認め又その何れかを無視することは人間協同生活の根本關係に背馳する所以である。

（五）和合社會と權力社會と經濟社會との三位一體的形成

右の如く人間協同生活は三つの根本關係に立脚して和合社會、權力社會及び經濟社會の形成によつて存續と確保を期することが出來る。故に人間協同生活の形成には三者が密接に相互に形成的に交錯し、完全なる人間協同生活に於ては三者が三位一體的に形成してをる。乍然常に必ずしも三つの社會統體が三位一體となることを豫期することは出來ない。周圍世界と殆んど沒交渉の家族經濟[1]に於ては大家族は血緣關係に基く和合社會であり、平和

① 例へば戰前の獨領東アフリカに於ける Wakindiga 族の自足自給家族經濟（Erich Obst）.

に家を齊める權力社會であり、同時に慾要充足の經濟社會であつて、この場合に三者は三位一體的の形成關係をなすことが極めて明瞭である。而して現代に於ては之は國民、國家、國民經濟の三位一體的形成に現れてをる。併し之と同時に國民及び主權的國家と、これを超越せる世界經濟とが、夫々社會統體の人的及び地積的基礎を異にして形成してをる。即ち世界經濟が世界國家、人類社會と三位一體的に形成してゐるのではない。

由來政治統體及び經濟統體形成の人的及び地積的基礎の嚴格に一致せざりしことは歴史上決して稀ではない。歐洲に於ては近世國家の建設と民族の歴史的條件と相俟つて國民經濟が形成し、十九世紀に於てその發達の絶頂に達して國民、國家、國民經濟の三位一體的形成が確立するに至つた。而して十九世紀の後半に於て資本主義の發展と與に諸國民經濟間の交通が織るが如く盛となり、各國民經濟はその周圍世界[2]と極めて密接に交錯的に形成してその周圍世界より孤立するときは國民經濟の解體を招くが如き情勢に進む

② Umwelt.

に至つた。是に周圍世界は國民經濟を內統體[1]とする世界經濟なる周統體[2]を或る範圍迄形成し、內周兩統體を通じて經濟の精神を實現し、以て生活難に處する人間協同生活確保の努力が現はれるに至つた。故に國民經濟は部分であり世界經濟は全體であるといふことも限られた範圍に於ていふことが出來る。併し世界經濟に對し世界國家及び人類社會の三位一體的形成は未だ實現してゐないで、國家聯合例へば國際聯盟と、限られた範圍の世界和合社會とが形成的關係で存してゐるに過ぎない。故に世界經濟が周統體であり、全體であるといふことは到底國民經濟の全體であり、又その內統體に對する周統體であることの比ではない。故に現代の世界經濟による生活難に對する人間協同生活の確保は國民經濟によるその確保に較べると遙かに薄弱であることは明かであり、是に世界經濟の特殊性が明白に認められることになる。

① Ingebilde.
② Umgebilde.

第二篇　世界經濟概念論

第一章　世界經濟に所謂世界の概念

（一）世界の字義

然らば世界經濟とは何ぞや。先に述べた如く經濟は人間協同生活の生活難に處する形成確保であり、卽ち慾要と充足との不斷の調和的精神を以てする人間協同生活の存續と確保である。而して之が同時に經濟の本質であつて古今東西を問はず、資本主義以前と以後を顧みず苟しくも經濟と稱されるる以上、具有しなければならぬ本質である。故に世界經濟も勿論さうでなければならぬ。併し玆に問題とすることは世界經濟に限つて如何なる特殊性を有するか、國民經濟に比し、財政に比し、家政に比し有すべき特殊性は何であるかである。固よりこの特殊性は根本的には生活形成卽ち經濟形成の特殊性

であらねばならぬ。この點に就いては先に多少言及したが、茲では先づ世界經濟に冠する世界に之を求めて、世界と經濟とを結付けて世界經濟と稱する意味を探求したい。

抑も世界經濟といふ文字は元來獨逸語のヴェルト・ウヰルトシャフトの譯語であつて、英語のウォールド・イコノミー[2]も亦この獨逸語より飜譯された文字である。故に我が國語の世界經濟及び英語のウォールド・イコノミーなる文字は何れも新語である。我が國では從來國際經濟なる文字が使用されてゐて、現在も尙使用されてをるが、この舊語に對し、世界經濟は確かに新語である。同樣に英語ではインターナショナル・イコノミックリレーションに對し新たにウォールド・イコノミーと稱してをる。[3] 而してWeltwirtschaft又はWorld Economyに所謂Welt, Worldは共に二語より成つてをる。これは英獨の姉妹語であるオランダ語の世界を意味するヴェールトWereldがWerとeldとより成る事實に徵して特に明かである。英語のWorldもアングロサクソン語の古き形ではWoruld, Worold Weoruldと綴つてをり、又獨語のWeltの古きドイツ語ではWëralt, Werelt となつてをる。而して英語のWeoruld中のWeor、獨語のWerelt中のWer、オランダ語のWereld中のWerは何れも人の意味であり、之に附加せるelt, alt, uld, old, eldは何れも世の意味である。故に英・獨・和の原義は人の世、世の中卽ち人の生涯の經驗を意味し、世界卽ち人生である。[4]

國語の世界は元々漢語より來りしものであり、その意義は世の中であつて英、獨、和語の原義と類似してをる。而して漢語の世界は梵語のloka dhatuの漢譯である。この文字は元來決して世界といふ意味ではなく、lokaは「見られる」といふことdhatuは「置く」といふことである。故內田銀藏博士によればこのローカ・ヂハッーを世界と漢譯したことは頗る意味のあることであつて、人の世といふ世界よりも更に原始的な意味を有してをり、卽ち我々の周圍にある事物を、主として視覺で存在を認めた所から世界と譯したものであるといはれてをる。[5]

① Weltwirtschaft.　② World Economy.

③ ドイツ語ではWeltwirtschaftの用語の外にInternationale Wirtschaftsbeziehungen又はZwischenstaatlicher Verkehrなる用語がある。英語でも同樣にInternational Economic Relation佛語でもÉconomie internationaleなる言葉がある。國語の國際經濟なる文字は之等の獨英佛の文字に相當する。

④ Leibnitz Deutsche Schriften, I. Bd. S. 38. herausg. von Dr. Walther Schmied-Kowarzik, 1916. Walter W. Skeat, Etymological Dictionary of the English Language, 1898; World. Hermann Paul, Deutsche Wörterbuch 1908; Welt. (Erst spät ist Welt zur Bezeichnung für die Gesamtheit des Existierenden geworden. -Weltall-) J. Vercoullie, Beknopt Etymologische Woordenbock der Nederlandsche Yaal, 1898.

⑤ 內田銀藏博士著「史學理論」261—808頁

(二) 世界の概念

要するに World,[1] Welt, Wereld 並に世界の文字は本來我々の周圍にある事物我々の經驗する事柄、我々の見聞し感知する出來事の總てを漠然と包括し、即ち世の中、人生、周圍世界、獨語の Weltall の意味である。而して之が普通に所謂世界である。

併し周圍世界は空間的及び時間的に無始無終と考へられる。先づ空間的に延長すれば人間の住居する大地、地球となる。之が地理學で所謂世界である。最初はその延長が現代知られてをる地球の一部合に限られてゐたが、地球に對する智識の進歩の結果之が次第に擴大した。交通の發達しない時代には世界は自國と近隣の諸國であつたが、其後遠隔交通の發達によつて世界が擴大した。故にアメリカ發見前の歐洲人には歐亞大陸とアフリカの一角のみが世界であつたに對し、アメリカ發見後は舊世界に對し新世界が加はり

① 英語では World の外に語源を異にした Cosmos, Universe なる言葉がある。

地球が圓いものと認められて全地球の周圍が世界[2]となるに至つた。此の意味に於て世界は非限定的であるが有限である。[3] 故に地理學上の世界も世の中、人生の意味と根本に於て關係があり、人間を離れての大地は結局無意味であつて、人間の協同生活をなす處の大地に相違はないが、地理學に於ては特に人間協同生活より引離した自然の地球に重點を置いてをる。

次に地理學上の世界の意味を一歩進めて、人間を除いた大地及び地上の自然現象、更に自然物としての天體を網羅して天地を包括する世界の概念が生ずる。即ち一方に於て地球を世界とし、他方に於て地球も一個の天體とし、他の天體も亦夫々の世界であるとして幾多の星を包括する太陽系が一個の世界となり、他の太陽系も亦世界となつて玆に無限の宇宙が世界となる。之は天文學上の世界である。天文學の世界より更に一歩進んで天地間の萬有といふ思想が生じ萬有全體を包括したものが世界となる。玆に世界は全體であるといふ哲學上の世界觀が生ずる。哲學上では世界を現象の世界と實在の

② Umkreis der Erden od. orbis terrarum, Leibnitz, a. a. O. S. 38. –
③ unbegrenzt aber endlich.

世界と對立せしめるから、世界は有限にして無限となる。哲學上の世界と相並んで宗教上では之を時間的に擴大して娑婆世界と極樂世界、三千大世界等として現在世界に對して未來世界及び過去世界を開展し、人々のこの世にある世界は勿論この世に生れ出づる以前の世界及び死しても永久に生きる世界がある。是に於て世界は終に空間的及び時間的に無始無終となり世界の概念は完了する。[1]

(三)　世界經濟に所謂世界の概念

然らば世界經濟と稱する場合の世界は何れの意味であるか。固より人生周圍世界の原義を脱し得ないが、地理學で所謂世界、而も非限定的にして有限の自然の大地と、この上に生活せる人間の協同生活である。地積的に非限定であるから、昔は地球の一部分、今は大部分が一個の經濟生活に形成的に關係付けられたものが茲に所謂世界である。故に世界經濟の世界は單に自然の大地のみを指すものではなく、從つて國民經濟と世界經濟との區別もかかる地球の表面積の全部と一部との差にあるのではない。通俗にはかかる單純な區別が唱へられるが、これは全く單純思想の所産である。經濟は人間協同生活の一面であつて、如何なる經濟の形成にも自然の大地を基礎としてをる。そして經濟統體の形成に關係付けられた大地を特にその生活地[2]といふ。尤も大地が經濟統體形成の唯一の基礎ではなく、ゴットルのいふ如く生活範圍[3]生活根源[4]及び生活遺産[5]も亦この基礎であるが少くとも大地の單位が一個の經濟統體の形成を促進することは明かである。此の意味に於てハルムスは世界經濟は地積經濟[6]で、國民經濟は部分地積[7]、世界經濟は總體地積經濟[8]であると言つてをる。要するに世界經濟に所謂世界はその經濟統體の生活地となれる地球であつて、茲に他の經濟と形成上異る特殊性がある。但し特殊性はこの點に限られてゐないことは勿論である。

世界經濟形成の根底である大地は最初地球の一部分であつたが、これが次

① Sartorius von Waltershausen, Die Weltwirtschaft, 1926, S. 9.
内田銀蔵博士、同著、261—308頁、田中耕太郎博士著「世界法の理論」278—282頁（世界の意義）

② Lebensraum.　③ Lebenskreis.　④ Lebensstamin.
⑤ Lebenserbe.　⑥ Raumwirtschaft.　⑦ Sonderraum.
⑧ Gesamtraum.

第に擴大して現代の如く渾圓球上の殆んど全面に及んだことは歴史の示す所である。而して經濟統體の生活地がかく次第に擴大したことは、經濟の本質である慾要充足の調和的精神より生じてをる。そして近世資本主義の發生と發展によつて、生活地は急速度を以て膨脹し、現今の如く全地球の大部分を經濟形成の基礎となすに至つた。故に現代に於ては人間協同生活は殆んど全地球を基礎とする世界經濟によつて生活難に處して存續と確保を期せんとしてをる。故に一名之を地球經濟といふ學者もある。[1]

從つて世界經濟に所謂世界にはその經濟の立脚する地球の表面の廣狹によつて歴史上自ら大小の別が生じてをる。その生活地が地球の表面の一部に局限せられた世界經濟を部分的世界經濟[2]といひ、現代の如く地球の全表面に亘るものを全體的世界經濟[3]といふ。前者は有史以前より古代及び中世及び近世初期の世界經濟である。當時經濟形成には現今の如く未だ地球の全面が知られず利用されなかつた。而も之を世界經濟と稱するに憚らない。

① 例へば Erich Obst (Zentralisation u. Dezentralisation der Weltwirtschaft) Leopold von Wiese (Kieler Vorträge Heft. 8.) は Erdwirtschaft といふ。

② Partielle Weltwirtschaft.　③ Universelle Weltwirtschaft.

又現代に於ても強國が地球上に經濟的世界帝國を組織し、例へば英國が植民地を糾合して大英帝國を形成せんとする場合には、前者の部分的世界經濟と異り全地球は既に知られてゐても特定の數ケ國を糾合した一種の部分的世界經濟である。

之に反し全體的世界經濟は近世以後次第に成長した世界經濟であつて、所謂大陸發見以來アメリカ、濠洲、アジア、アフリカの沿岸を白人が征服して次第に之等の內地に侵入し、更に十九世紀の末アフリカの探險及び日露戰役の結果、外延的のみならず內包的に渾圓球上の殆んど全面を世界經濟の形成に包括して現代的世界經濟が成立するに至つた。[4]

(四)　世界法に所謂世界の概念

世界經濟に所謂世界の概念に關聯して傾聽すべき說は田中耕太郎博士の「世界法の理論」に所謂世界の概念である。博士は之に就いて次の如く述べら

④ 白人の歐洲以外の經濟的侵略より世界經濟の成立に至りし推移は Culbertson によつて極めて詳細に明瞭に說明されてをる。生島廣治郎譯述、カルバートスン原著「國際經濟政策」第一章參照。

れてゐる。

世界的なる語は特定の地方、特定の民族又は國家、地球のある部分(亞細亞、歐羅巴、東洋、西洋の如き)に限定せられざる意味であつて、必ずしも事實上世界全體に亘りて存することを要する意味ではない。此の場合の世界の意味は場所的關係に於ける非限定的性質に存する。非限定的なるが故に將來勿論世界全部を包括するに至ることも考へらるるのであるが、現實に然らずとするも世界と呼ぶに一向差支がないのである。此のことは國際的 International なる文字が通俗的には必ずしも民族間、國家間の事柄のみに限らずして一般に超民族的、國家的事柄に用ひらるることと趣を同じうする。

此のことは世界法の概念に就いても同樣である。例へば假に主要なる各國の手形法規の內容が統一せられたとするならば、私は手形なる事項に關し世界法が存するものと考へて支障ないと思ふ。……要するに此の場合に於ても同じ內容の手形法を有する國の數には制限があり、其れは恐らくは容易に

現在又將來に於て存在する世界の國家全體を包括するに至らざるべく、加之一定の經濟狀態に達せざる、特に貨幣經濟の行はれざる未開の社會には手形の必要が存在しない故に、斯かる社會には手形法が行はるること、又は少くとも文明國に於けると同一內容の手形法が行はるゝことは考へ得られない所である。手形法が世界法たるは其れが世界全體に行はるることに存せずして、其が一國又は數國に限られずして、同一の經濟狀態にあり、取引關係に立つ各國の間に一樣に採用せられるを以て足れりとする。而して斯かる國々の範圍は非限定的であり、其れが世界全體に及ぶ可能性が存する意味に於て世界法と云ふのである。[1]

是に由ると世界は必ずしも地球の表面全體を意味せず、單に特定の一國又は數ケ國又は地球の一部分に限局せられない非限定的の地積である。一言でいへば非限定的地積[2]が世界である。故に博士は世界史、世界文學、世界宗教といふ場合の世界はこの意味であるといはれる。然らば世界經濟に所謂世

① 田中博士著「世界法の理論」第四章「世界法の世界社會的基礎」279—281頁
② raumlich unbegrenzt.

界も亦さうであるかといふに、この點には言及されてゐないが、私は此の場合にも世界は地積的非限定を意味するものであるといひ得るものと斷定したい。卽ち部分的世界經濟及び全體的世界經濟の場合の世界は勿論地積的非限定である。但し此の場合、地積なるものを經濟學上如何に取扱ふかゞ問題であつて、遊離方法による市場經濟學では地積は殆んど經濟學の問題とせずして之を經濟地理學に讓つてをる。　故にこの立場から觀れば、世界經濟は地積的非限定の市場經濟であるといへるのみ。　然るに、統體經濟學上より觀れば、地積は經濟統體形成の基礎であつて、之を無視して經濟を考へることを不可能とする。　卽ち世界經濟を一個の Einheit として認識する場合には、世界は單に地積の空間的延長が非限定であるといふだけでは不十分であつて、此の客觀的自然的地積が經濟統體の形成に取入れられ、人間協同生活の形成確保に形成的に關係付けられることを必要とする。　卽ち此の地積が經濟統體の生活地をなすことを必要とする。　而してこの生活地自體は地積的に限定されてゐないことは勿論であり、同時に地球の周圍といふ所に終つてをる。

（五）　世界國家に所謂世界の概念

世界經濟に所謂世界と殆んど同じ意義を有する世界に世界帝國又は世界國家の世界がある。　アレキサンダー大王の世界帝國、ローマの世界帝國、古代支那の治國平天下、又現代の國家學者の所謂世界國家に於ける世界、さては天下に至る迄、何れも政治統體の形成に關係付けられた渾圓球面である。　昔の所謂世界帝國は部分的世界國家であり、現代所謂世界國家は全體的世界國家である。　支那に所謂天下は卽ち世界の意義であつて、天の覆ふ所、地の戴する所、總て支那の天子が天命を受けて萬民の共主となつて支配する所である。この場合天下は當時支那に知られてゐた世界であつて、實力を以て支配の及ぶ範圍は勿論、然らざる範圍、卽ち邊疆も結局に於て實力の及ぶべきことを豫想して治國平天下の理想の下に之を包括した。　故に此の場合の地積も勿論

非限定的である。何れにしても支那古代の思想に於ては天下は卽ち世界であり、支那は卽ち世界帝國である。矢野仁一博士[1]の支那には元來國境の概念がないといふ支那無國境論は茲から出發してをる。かく支那が天下を支配する以上、支配されるものは之を萬民と稱される。故に萬民は世界帝國の民であつて、決して無國家の人類社會を指すものではない。

① 矢野仁一博士著「近代支那論」支那無國境論

第二章　世界經濟の概念に關する學說の分類

（一）總　說

世界經濟に所謂世界の概念は以上によつて明かとなつた。これによつて世界經濟の特殊性の一面が窺はれ、從つて世界と經濟とを結合して世界經濟と稱する意味が明かとなつた。從つて問題は世界經濟の概念に移る。

世界經濟の概念は夙に戰前より經濟學上大論爭のありし問題であつて、爾來現在にかけて異說紛々たる狀態であるが、之等の學說の考察は別に發表する世界經濟學說史論に讓り、茲では現代經濟學界に於ける代表的なものゝみを分類して考察することにする。

私は現代經濟學上代表的な世界經濟の概念に關する學說を分類して、廣義

の世界經濟說と、狹義の世界經濟說とし、後者を更に分類して（一）世界經濟總和說（二）世界經濟の市場經濟說（三）世界經濟の社會統體說とする。此の外歷史學派の所謂階段說の世界經濟概念があるが、階段說では世界經濟の發生に重點を置いて、その概念內容に深く立入つてゐないし、又現在殆んど重要性を有してゐないから玆では之を除外した。

（二）廣義の世界經濟概念

さて廣義の世界經濟說は部分的及び全體的世界經濟を包括した概念を主張し、之を代表するものはケルン大學敎授ブルノ・クスケ[1]である。彼は歷史學者であつて、經濟地積形成[2]の點より世界經濟を考察してをる。

所謂經濟地積とは大地の單位であつて、特定の等しき自然的及び人爲的諸力によつて成立せる地積單位[3]である。卽ち大陸の臨劃、面積、高さ、氣候の分布氣流の動き、地味、開墾、灌漑、人種及び民族、歷史的力及び傳統、移住方法、社會組織

① Bruno Kuske.
② Gestaltung des Wirtschaftsraumes.
③ Standorteinheit.

並に交通及び資本等の經濟形成の基礎的事實の相違によつて經濟地積に獨特の單位が成立する。約言すれば自然的及び文化的條件の相違によつて相互に對立せる經濟地積の單位をなしてをる。而して之等の經濟地積が相互に連絡し相互に影響を及すこと、そしてこの關係が著しく發達したものが世界經濟である。故に經濟地積間の關係が未だ全地球に及ばずして一個の大陸內又は二個の大陸間の關係に止つてゐても、その關係が高度に發達してをれば之を世界經濟と稱することが出來る。この意味に於て世界經濟は夙に古代にありしものである。否有史以前にありしものである。殊に最近二十ケ年間の考古學的及び有史以前の研究の結果、特に前印度及びエジプトの發掘物に徵し、紀元前三、四世紀に於て夙に地球上廣汎な地域に亘つて世界經濟が存してゐた。又古代に於ても經濟地積間の遠隔交通は極めて盛であつてこれが通說に所謂奢侈品交通に止らずして穀物を始め食料品の盛な交通であつた。中世も亦然りである。

かく歷史的觀點より考察すれば世界經濟の概念に全地球を取入れるか否かは問題でなく、これは全く經濟地積間の關係の程度[1]如何によつて定まり卽ち量の問題である。量の上よりいへば、現代に於ても世界經濟が地球の全面を連絡する狀態は五大陸間を通じて決して一樣でなく、歐洲大陸の他の大陸との關係は最も密であるが、他の大陸の交錯關係は到底前者の比ではない。これが各大陸間に於て一樣に平均することは將來の世界經濟の目標でならねばならぬ。

從つて古代及び中世の世界經濟と現代の世界經濟とは地理的見地より觀れば部分的[2]及び全體的世界經濟の區別はあつても、その經濟地積間の交錯關係より觀れば兩者の世界經濟に如何なる差違があるだらうか。この差違を世界經濟を實行すべき手段の增加に求める說がある、是に由れば世界經濟は資本主義以前になかつたといつて、資本集積の點より世界經濟の成立を說かんとする。かく資本集積の特定の程度を認め、之を世界經濟の始となす說

① Grad.
② Partielle und Universelle Weltwirtschgft.

は先づ資本とは何ぞや、次に集積は如何なる程度を必要とするかの問題に逢着する。併し後者の程度に就いては何等意見の一致が出來てゐない。古代に於ても地球の表面がたとひ現代の如く全面的でなくとも、廣汎に亘つて交錯關係を有してゐた以上、世界經濟成立の要素及び之等の要素を運用すべき特定の根本的方法が存してゐた譯である。唯この方法の補充又は進步のありしことは資本集積の進步によつて定められる。古代の商業及び交通と雖も資本に基いてをり、この資本の私有又は公有は此の場合の問題ではない。固より資本主義的方法の發達は世界經濟の發展に多大の影響を及し全地球を範圍とする全體的世界經濟の成立を促したことは事實であり、將來益〻之を促進することは確である。要するに世界經濟は經濟地積間の交錯關係であり、而して之は歷史的考證に俟つて始めて釋明される問題である。[3]

③ Bruno Kuske, Entstehung und Gestaltung des Wirtschaftsraumes, 1930. S. 7—9.

(三)　クスケの說に對する批評

かくてクスケは各經濟地積には固有の自然的及び文化的條件を有し、人間の慾望が原動力になつて右の條件の差違に基く生產分化がなされ、たとひ之が一大陸內又は二個の大陸に跨る場合でも、廣汎な地域に亘つて各地積單位間に盛な交錯關係を有するときは是を世界經濟と稱してをる。そしてかゝる世界經濟は夙に古代及び中世にありしことを精細なる歷史的事實によつて考證を遂げてをる。[1] 從つて資本集積の如何を世界經濟成立に問題としてゐない。故に彼の世界經濟概念は古今東西に通じた最廣義の概念である。彼は歷史的及び地理的觀點より經濟地積の形成を出發點としてをるが、この自然的及び文化的條件に基く經濟地積の形成は之を一步進むれば如何にして經濟統體の形成が可能であるかとの問題となる。所謂經濟地積間の關係がハルムスの所謂レーベンス・ウキヒチーゲン・ベランゲン[2]を有し且つ何等か

① Bruno Kuske, Die historischen Grundlagen der Weltwirtschaft, 1926. Kieler Vorträge, 17. Kuske, a. a. O.
② lebenswichtige Belangen.

の法的確保を有すれば古代に於ても世界經濟の成立せしことは之を認めるに決して吝かなるものではない。而してレーベンス・ウキヒチーゲン・ベランゲンを各經濟地積の生活上必要な關係と廣義に解し、同樣に法的確保を古代の交通を律したる習俗と解すれば、古代の經濟地積間の交錯關係が部分的世界經濟を形成せしものであるといふことは勿論可能である。これは單にクスケのみではなくシュパン[3]も之を異る立場から認めてをる。

併し現代人の世界經濟の研究上、特に興味を有する世界經濟の概念は古代及び中世の部分的世界經濟を包括した廣義の世界經濟ではなく、現代の全體的世界經濟の概念である。併し古今東西に通ずる世界經濟の概念は現代的世界經濟の原型を遠く古代に遡つて探求しその發展の蹟を辿つて、以て現代的世界經濟の由來を究める基礎概念として必要である。蓋し現代的世界經濟は十九世紀に於て突如として成立したものでないからである。加之これは現代、世界の諸國が動もすれば世界經濟より孤立せんとする自足自給の傾

③ Spann, Die individualistische und universalistische Begriff der Weltwirtschaft, Weltwirtschaftliches Archiv, 30. Band, Helt 2. S. 120— 21.

向從つて世界經濟の終末を語る者に對し多大の反省を促すことになるからである。

(四)　狹義の世界經濟概念

次に世界經濟を之より狹義に解して部分的世界經濟を除外すれば、全體的世界經濟卽ち現代的世界經濟[1]となる。此の場合には部分的世界經濟と異り經濟の基礎が渾圓球上の全面に及んでをり、その上に自然的及び文化的條件の相違と世界交通機關の完備とに基いて、生產分業及び世界市場が成立し、更に世界交通を律する法的制度が著しく發達してをる。加之資本集積の程度は極めて大であつて到底古代及び中世の世界經濟の比ではない。この意味に於て現代的世界經濟は資本主義の所產、特に高度資本主義の所產であるといはれる。而して現代人の關心の焦點となる世界經濟は正に此の種の世界經濟である。

① Moderne Weltwirtschaft.

然らば現代的世界經濟の概念を如何に決定すべきか。これに就いて現今學說が種々に岐れてをるが、要するに現實の世界經濟に對する經濟學の認識方法、從つて經濟理論の如何によつて定まる問題である。故に世界經濟の概念は特定の認識方法、理論的體系なくして、單に文字で以て云々することの出來ないことを特に高調して置きたい。今これによつて現代的世界經濟概念に關する學說を大別すると(一)世界經濟總和說(二)世界經濟の市場經濟說(三)世界經濟の社會統體說となすことが出來る。

第一の世界經濟總和說は極めて單純な世界經濟の概念を唱へ、地球上に於ける一切の經濟の總和を世界經濟と考へてをる。故にこの場合には地球上の各經濟が相互に如何なる關係を有するかは格別之を問題とせずして、專ら一切の經濟の總和を指してをる。故にこの種の世界經濟は世界の總經濟[2]といふに止つてをる。この說を代表するものはシューマッハ教授[3]を始め頗る多く、坊間に所謂世界經濟は多くはこの範疇を脫してゐない。例へば世界經

② Weltgesamtwirtschaft.
③ Hermann Schumacher, Weltwirtschaftliche Studien, 1911.

濟の動き、世界經濟事情、世界經濟年鑑、世界經濟圖表といふ場合の世界經濟は總て是である。即ち世界全體の生產、貿易、消費、人口、船舶等を總括的に概觀して世界經濟となし、結局一切の國の生產、貿易、消費、船舶等を例擧し比較し合計して世界經濟となす觀方である。故にかかる世界經濟には何等の理論的根據がなく單なる算術計算の思想に立脚してをる。世間に往々世界經濟に如何なる理論的根據ありやの疑問を口にする者は畢竟この種の世界經濟概念を前提としてゐるに過ぎないものである。

乍然この種の概念と雖ども全然無用に歸するものではなく、結局人類と地物との根本關係特に世界の富、所得を考察する基礎概念として役立つことになる。同樣に國民經濟の概念も亦此の方法から定めることが出來る。即ち一國內に於ける一切の經濟の總和を國民經濟と謂ふことが出來る。そしてかゝる國民經濟概念も亦無用ではなく、例へば一國の國民所得、國富統計を算出する場合に於けるその基礎概念となるものである。[1]

① Hermann Bente は國民經濟の概念を三種に大別し (1) Volksgesamtwirtschaft. (2) Volksgesellwirtschaft. (3) Volksgemeinwirtschaft となし、就中第一が玆に所謂國民經濟の概念に當る。Weltwirtschaftliches Archiv, 32. Band Heft I. S. 12.

先に述べた樣に世界經濟總和說は世界經濟を地球上の一切の經濟の總和と概念してをる。此の場合、一步を進めて一切の經濟の關係を考察してくれば、世界經濟の市場經濟說が生れてくる。世界經濟の市場經濟說とは市場經濟理論より世界經濟を市場經濟となす說である。世界經濟の市場經濟であることを說明するには先づ市場經濟の概念を明かにしなければならぬ。

第三章　市場經濟論

（一）市場經濟の概念

抑も市場經濟とは現代ドイツ經濟學界に所謂マルクト・ウヰルトシャフト[1]の譯語であつて、從來ドイツに所謂交通經濟[2]に對する新たな用語である。是は資本主義に固有の經濟であつて、數多の企業（生產及び分配の經濟單位）及び家政（消費經濟單位）が何等直接組織的連結なく、單に市場を通じて間接に相互に結合することを特色とする。(Colm)[3] 此の場合には企業はその生產手段例へば勞力、機械、原料等を夫々勞働市場、商品市場を通じて獲得し、又その生產物は商品市場を通じて消費者に提供される。

市場經濟は資本主義に固有の經濟であるから市場經濟に於て決定的役目

① Marktwirtschaft.　② Verkehrswirtschaft.
③ Gerhard Colm, Kapitalistische und Nichtkapitalistische Elemente in der heutigen deutschen Volkswirtschaft. Kapital und Kapitalismus, I. Bd. herausg. von Harms, 1931. S. 106.
④ 個人主義的經濟學では經濟の概念は經濟行爲より出發し、經濟行爲が Differenzieren したものが Integrieren して經濟單位をなすものと考察されるのが普通である。而して經濟行爲は人的に分化 Differenzieren して財の獲得 Beschaffung と財の分配 Verteilung となり、財の獲得は獲得者自己の慾望の充足の爲のみならず、他人の慾望充足の爲に行はれ、財の分配は財を慾するものに取らしめる行爲である。生島廣治郎「世界經濟の基礎概念」國民經濟雜誌 51 卷 1 號

をなすものは資本である。資本は特定の社會的職能を有し、營利卽ち財產の貨幣的增殖に使用されるものである。經濟に於ける財の職能は通常慾望の充足をなすにあるが、市場經濟に於ては財は慾望の充足よりも財產の增殖に使用される。そして資本は資本市場より企業に供給されるのが普通であり企業は調達された資本によつて勞力及び物財を生產に使用し、その生產及び販賣には常に資本增殖卽ち營利を目標としてをる。從つて慾望充足の爲にする財の獲得及び分配なる經濟行爲[4]は市場經濟に於て自ら變化し、財の獲得は市場に於ける供給、而も出來るだけ最高價格を要求する供給と變化し、財の分配は市場に於ける需要、而も出來るだけ最低價格を要求する需要となる。故に具體的慾望は直接問題とならない。乃ち財の獲得及び分配は市場に於ける需要及び供給の結合する交換となり、而も交換は不斷の續行である。そしてその目的が營利であるから交換は不斷の價格爭奪である。故に慾望充足の目的を有する財は市場經濟では商品となる。一般に需要と供給とが投

合する處が市場であるから、營利の目的でなされる不斷の交換經濟が市場經濟である。此の場合、交換は古典的市場經濟に於ては自由競爭に基く交換であつて、宗教的又は傳統的束縛を受けないものである。之を自由[1]市場經濟といふ。この點に於て資本主義以前の束縛[2]經濟とは異つてをる。

然らば市場經濟の主體は何であるか。その主體は何等かの計劃を有するか。市場經濟の主體として最重要なものは企業である。この經濟主體は財を慾望充足能力によつて評價せずして交換能力、即ち價格によつて評價する。企業は常に最大生產を目的とせずして最大利潤即ち貨幣的利益を目的とし企業の貨幣的利益の內より企業者、使用人、勞働者に夫々給料及び勞賃を支拂つて資本の增殖をなす。故に個人の所得は市場經濟の秩序に從つて分配されば個人が慾望を充足せんとすれば購買力を以て更に市場に臨み、而して市場はその購買力に應じて慾望の充足を遂げしめることになる。茲に企業と家政とが市場で間接に結合してをる。

① freie Marktwirtschaft.
② gebundene Wirtschaft.

次に市場經濟主體は如何なる計劃を有するやといふに、勿論一個の共通の計劃を有するものではなく、唯各企業が自己固有の計劃を建てるに過ぎない。即ち各主體が極めて周到なる注意を以て市場を觀測し、將來の市場の需要を豫測して生產をなしてをる。故にオッペンハイマー[3]は生產とは總て市場に齎すことであるといふ。市場經濟全體が此の如くその主體の市場豫測に基いて自由なる自動的秩序[4]で動いてをることが自由市場經濟の特色である。

(二)　市場經濟と資本主義との關係

先に述べた樣に市場經濟は資本主義固有の經濟である。たとひ現代資本主義の本質に關し異說紛糾してゐても、市場經濟が資本主義の經濟秩序である點に於ては何れも一致してをる。併し市場經濟と資本主義とは決して同一概念ではなく、市場經濟のみで資本主義が說明し盡されるものではない。資本主義には市場經濟の上に資本家及び企業者と勞働者とが社會的階級的

③ Franz Oppenheimer, Grundriss der theoretischen Ökonomik, I. Teil, Einführung in die theoretische Ökonomik, 1926. V. Abschnitt, Die Marktwirtschaft. S. 60. ff.
④ freie autonomische Wirtschaftsordnung.

に對立して市場經濟を社會學的意味に於ける特定の支配關係になすことを必要とする。之に反して市場經濟には、かゝる兩階級の對立を必要とせず、例へば勞働者及使用人が全資本を所有する產業組合をなす場合には、產業組合的市場經濟又は小ブルジュア的市場[1]經濟が存してをる。又勞働者が政治團體を通じて資本總體を支配する場合には社會主義的市場經濟[2]が存してをる。

一般に資本主義の定義程現今經濟學上異說の多きものは他に少いから近時ドイツに於ては此の言葉を經濟學の用語より除去すべきものであるといはれて來た。蓋し資本主義の本質が經濟學上のみならず、社會學的見地より說明を要するから、玆に難點、從つて大なる異說の生ずる原因がある。[3] 現にドイツの資本主義の代表的學者と目されてをるゾンバルトでさへ近世資本主義の發展に特定の精神的前提を必要とし、經濟制度としての資本主義の特色を特定の經濟的ゲジンヌング[4]に置いてをる。何れにしても資本主義の經濟秩序は市場經濟であることには異論のなき所であり、市場經濟が消滅すれば

① genossenschaftliche oder kleinbürgerliche Marktwirtschaft.
② sozialistische Marktwirtschaft.
③ Gehrhard Colm, a. a. O. S. 107.
④ Wirtschaftsgesinnung.

資本主義は消滅することになる。

(三)　自由市場經濟と統制的市場經濟

市場經濟は之を分けて自由市場經濟と統制的市場經濟となすことが出來る。自由市場經濟は資本主義の古典的形態であつて、古典學派の經濟學に於て始めてその理論的體系を整へるに至つた。併し之は抽象的理論的のもので未だ嘗て純粹の形態で實現したことはない。この場合には一切の企業が相互に單に市場闘爭[5]によつて連絡し、例へば買手は出來るだけ安價に原料品半製品、機械等を購入せんとして賣手と市場闘爭をなし、賣手に於ても互に販路擴張の爲に生產費の引下、能率の增進、廣告及び宣傳等の手段によつて市場闘爭をなしてをる。故にこの種の市場經濟を自由競爭制度又は自由資本主義[6]と稱してをる。古典學派はこの場合價格による自由なる自動的經濟秩序(メカニズム)の理論的體系を建設したのである。

⑤ Marktkampf.
⑥ Freier Kapitalismus.

統制的市場經濟[1]は若干の企業が組織的に團結する場合に存在する。或は一國の同種類の企業が結合して他の企業と輸贏を爭ひ(コンチェルン)或は自由競爭を除去し之によつて賣手又は買手に對して有利な市場機會[2]を獲得せんとする。(カルテル・トラスト)故にこの種の市場經濟を統制的資本主義[3]又は組織的資本主義といふ。之を一名獨占資本主義[4]ともいふが、この名稱は統制的經濟の本質に觸れてゐても、一切の統制が獨占的でないから狹義を表す缺點がある。

ヒルファデング[5]は自由資本主義より統制的資本主義(組織的資本主義)に至りし原因として二つの事情を擧げてをる。第一は工業發展より生じた固定資本の膨脹であり、第二は銀行資本と工業資本との組織的關係の成立である。

工業發展の結果、工業資本の內で物的資本が勞賃勞働に供せられる資本に比し金額上益〻增大し、物的資本の內でも機械、建物に投資する固定資本が、石炭石油等生產過程に常に直接使用する物的資本よりも益〻增大して來た。前者

① gebundene Marktwirtschaft.　② Marktchance.
③ gebundener Kapitalismus; organisierter Kapitalismus.
④ Monopolkapitalismus.
⑤ Rudolf Hilferding.

は後者と異り、資本の一回の廻轉過程で金額上再生產されないで多年に亘つて徐ろに再生產される資本である。而して固定資本の益〻增加することが、工業資本の競爭を決定的に左右し、工業の市場鬪爭に多大の變動が生じて來た。自由資本主義の場合には大資本家は小資本家を打倒するが、技術の進步の結果自由競爭が益〻企業の集中を增大し、從つてカピタリエンの大集中を促して市場鬪爭(競爭的鬪爭)は最早各種の資本的强さを有する資本家間の鬪爭でなくして、結合せるカピタリエン相互間の鬪爭となるに至つた。そして各工業に於ける資本の自由性は著しく減少し、カピタリエンは古典學派の敎へるが如き利潤率の少なき生產より利潤率の高く、競爭の少き生產に移動することが最早容易に出來なくなつてしまつた。何故なら既述の通り固定資本が膨脹して資本の移動をなすことが困難となつたからである。そして市場鬪爭は大なる固定資本を擁する工業に於ては、場合によれば數年に亘る不況を招くことになる。故に市場鬪爭の結果はたとひ强大な工業でも絕對に不安と

なつてしまふ。かゝる工業の發展よりして終に自由競爭を除去し、生產者の結成による市場支配、卽ちカルテル及びトラストの形成が自ら促進されるに至つたのである。

次に銀行資本[1]は先づ工業資本家相互間の固有の流通信用[2]を媒介する職能を受繼いだ。昔は爲替手形が今の銀行券の如く商品交換を媒介し、事實上貨幣の職能をなし數人の商工業者の署名を以て流通してゐた。然るに其後銀行資本は商工業の私的商品手形を自己の手形卽ち銀行券で代用せしめるようになつた。故に銀行は之によつて自己の信用を商工業者の信用に代用したことになる。尤も此の流通信用は未だ銀行と工業との關係を大體著しく變更せしめたものではなく、之は流通現象が貨幣で媒介される銀行流通信用の集中を容易ならしめたことを意味するにすぎない。然るに銀行は更に一歩を進めて、貨幣の吸收、卽ち工業の金庫又は其他の金庫にゐる遊資を盛に吸收して之を工業に對し資本として調達することを職能とする樣になつた。

① Bankkapital.　② Zirkulationskredit.

茲に從來銀行が媒介した流通信用から資本信用[3]に移り、この資本は流通上の需要以外に生產的資本家に生產的資本[4]として貸出され、之によつて生產が一層擴大し、資本集積過程[5]は更に迅速に進行するに至つた。

以上の二つの原因より企業集中が發展し自由競爭を排して市場獨占、市場支配に進展した。而してこの傾向は元々工業より起つたものであるが、銀行の利害關係によつて著しく助長された。卽ち銀行が流通信用より資本信用に移るに從つて益〻工業企業と提携する運命に陷つた。そして銀行が最も集中的の工業に主たる活動をなさんとするから、この種の工業の市場鬪爭は銀行にとつて重大な意義を有することになる。故に銀行としてはこの際危險分散の法則によつて各種の工業に參加することが得策となつた。その結果は銀行の工業支配である。一般に銀行のコンツロールの下に工業企業に工業資本として調達される貨幣資本を金融資本[6]といふ。故に金融資本とは銀行のコンツロールし工業に使用される資本である。そして從來の資本形態

③ Kapitalkredit.　④ Produktives Kapital.
⑤ Akkumulationsprozess.　⑥ Finanzkapital.

である商業資本、[1]工業資本[2]及び銀行資本が次第に金融資本と化し、金融資本の出現によつて資本主義は自由資本主義から組織的資本主義に移るに至つた。[3]以上が彼の說明である。此の說明の正しさや否やの吟味は玆では立入らない。

何れにしても市場經濟に統制の著しくなつたことは現代の經濟秩序の特色である。そして自由資本主義から統制的資本主義への發展過程を高度資本主義と總稱する學者もある。玆に注意すべきことは生產又は勞力に獨占的結合のあることが市場經濟の特色を沒却するものでないことである。何故なら市場は依然として存するからである。卽ち企業が商品市場、勞働市場及び資本市場に據つて存續し、之等の市場の價格關係によつて生產と分配が運用され、之等の市場に於て市場當事者が組織的に相對峙してをるものであるからである。

要之、市場經濟は資本主義の眼目であり、その特色は市場鬪爭である。而して市場鬪爭である事から、市場經濟、從つて資本主義に於ては經濟の地積が急速度で膨脹し、その經濟の秩序が地積的に無制限であることから現今の如く全地球を範圍とする市場經濟が發生するに至つた。[4] 田中耕太郎博士が世界は地積的に「非限定」といはれたが、市場經濟の秩序は特に地積的に非限定であつて、此の意味に於て「世界」經濟は市場經濟である。マルクスはこの間の消息を次の如く說明してをる。「大工業は世界市場を產み出した。之はアメリカ發見によつて促進された。」[5]「外國貿易の擴大は資本制生產方法の幼少期に於ては之が基礎となるものであるが、資本制生產方法が發達するに從つて其內部的必然性によつて不斷に擴大されつゝある市場を求める慾求に基いて資本制生產方法それ自體の產物となつてくる。」[6] かく世界を範圍とする市場經濟を世界經濟とすればこの意味に於て現代的世界經濟は資本主義の所產であるといはねばならぬ。

① Handelskapital　② Industrielles Kapital.
③ Hilferding, das Finanzkapital. 1927. Ders, Die Eigengesetzlichkeit der kapitalistischen Entwicklung: Kapital und Kapitalismus, I. Bd. herausg. von Harms. 1931.

④ 生島廣治郎「世界經濟の基礎概念」國民經濟雜誌51卷1號57頁。「市場經濟的世界經濟概念に關する一學說」同誌52卷4號參照。
⑤ Karl Marx, Kommunistische Manifest.
⑥ Karl Marx, Kapital, III, I. 14. Kapital. V. S. 218.

第四章　世界經濟の市場經濟概念

(一)　總　說

さて世界經濟を市場經濟とすれば、世界經濟は世界市場を通じて各國の企業と家政とが間接的に相互に結合せる市場經濟である。故に世界經濟を各國又は各國民經濟(に屬する)又は地球上の各個經濟の交通關係の總體であるとなす定義は一般に市場經濟說である。

ハルムスは世界經濟を市場經濟として概念した場合は、地球上の各個經濟が交換經濟的に相互に結合せるものであると述べてをる。アドルフ・ウェーバー[1]は市場經濟學の見地より國民經濟の概念を定義して「國民經濟は規則的交換によつて相互に結合し相互依存せる交錯であつて、此處には正しき秩序を考慮する何等の統一的意志がなく、經濟の秩序は國民經濟それ自身によつて自動的に創られてをる。從つて國民經濟は各個經濟の單なる總和ではない」といつてをるが、之は國民經濟の市場經濟概念であつて、世界經濟を市場經濟と稱する場合にも之と同樣の概念がいひ得られる。彼の資本主義を解剖してそれ自體發展する生產方法となせるマルクスも亦市場經濟學者であるから、彼は世界經濟を世界市場と概念し、地球上に擴大せる生產關係の體系と考へてをる。[2] 同樣にブハリンは世界經濟を「世界的規模に於ける生產關係、從つて交換關係」と定義してをる。[3] 而して世界經濟が市場經濟である以上、アドルフ・ウェーバーのいふが如く、經濟の秩序を律すべき何等の統一的意志がないから、世界經濟はこの場合、作田博士の所謂自然經濟である。

① Adolf Weber. Allgemeine Volkswirtschaftslehre, 1928. S. 1.

(二)　世界經濟の自由市場經濟概念

先に述べた樣に市場經濟は自由市場經濟と統制市場經濟との二種に大別

② 生島廣治郎「市場經濟的世界概念に關する一學說」國民經濟雜誌 52卷4號

③ Bukharin, Imperialism and World Economy. p. 26.

されるから、世界經濟も亦二種の立場より別個に考察しなければならぬ。

世界經濟を自由市場經濟とすれば、之はシュパンの所謂個人主義的世界經濟であつて「國家及び國民の非經濟的なものによつて少しも阻止されない各個經濟者の自由國際交通」[1]である。アドルフ・ウェーバーは之を自由世界經濟[2]と稱し、古典學派は之を世界經濟といはずして自由貿易[3]と名付けてゐる。

固より自由市場經濟は未だ嘗て眞實の形態に於て完全に實現したことはなく、從つて自由市場經濟の世界經濟も亦さうであるが、歴史上、自由市場經濟の世界經濟が比較的現實に近く發生し存してゐたのは十九世紀の半頃より戰前に至る高度資本主義時代[4]である。ワーゲマン[5]はこの時代の特色を（一）自由營利經濟、即ち自由競爭と私經濟的營利の追求とが生産及び消費を支配し而も之が比較的完成の域に達したこと（二）國家及び法制が交通の自由を保證し、人間及び資本の自由が擴大し、特に職業選擇が自由となりしこと（三）歐洲の人口の增加及び資本の集積が國際分業を促進し、之が國民經濟の內部

① Spann, a. a. O.
② freie Weltwirtschaft, Adolf Weber, a. a. O. S. 15.
③ free trade, libre échange, Freihandel.
④ Hochkapitalismus.

に深く喰入つて單に奢侈品の需要の充足に止らなかつたことであるといふ。即ち一方に於て政治的及び技術的に交通を阻止せる障碍が除かれ、他方に於て大規模の國際分業が發達し商品及び資本の大移動が各國民經濟を結合せしめて超國民經濟的組織の發生を促したのである。

今此の間の消息を説明すると次の如くになる。

アメリカの獨立及びフランス革命によつてマーカンチリズムの桎梏からの解放は十九世紀の半頃に達成された。即ち英國に於ては一九四〇年頃よりレセ・フェヤー[6]の原則が確立し、歐洲大陸に於ては一八六〇年の終に國家的警察的束縛の遺物が掃蕩された。國民經濟內に於て束縛の最も永く殘存してゐたのは農業であつて、農業に於ては土地所有權及び經營の選擇及び實行に關する自由が十九世紀を通じて歐洲の大部分に實現された。封建的農業制度はフランス其他の西部歐洲に於ては大革命と與に、中歐では之より遙かに遲れて十九世紀の中頃に撤廢された。ロシヤではこの點に關して十九世

⑤ Ernst Wagemann, Struktur und Rhythmus der Weltwirtschaft, 1931, 22. Kapital, S. 232—233.
⑥ Laissez Faire.

紀の五・六十年の法制が多少緩和されたが、根本的改造はなされなかつた。

工業に於ては農業よりも早く解放が實現され、中世より傳來のツンフト制度は夙に十八世紀に或種の自由工業制度に移り、一般に十九世紀の七十年代の始には全歐洲を通じ工業政策上舊時代傳來の束縛が消滅してゐた。更に商業及び交通に於ける自由の發達は商業及び交通に對するマーカンチリズム[1]の國家的干渉制限を撤廢することであるが、十九世紀の始、貿易を關稅其他の制限から解放せんとする運動が始まり、先づ英國に於て廣汎に亘る自由貿易が四十年代のピール[2]の改革、更に五十年代のグラッドストーン[3]によつて成功して保護主義は根本的に打破された。此の英國の自由貿易は一八六〇―六七年間に於て更に大陸に普及し、最惠國條款が新通商條約の基となつた。そして輸出入禁止及び通過稅の撤廢、關稅の可及的引下が決行された。米國では十九世紀の最初の四半期に於て絕えず關稅が引上げられたが、一八三三―六〇年間に於て漸次關稅が引下げられ一八五〇―八〇年間の米國外國貿

① Merkantilismus.　② Sir Robert Peel. (1788—1850)
③ William Ewart Gladstone. (1809—1898)

易は全然自由主義に立脚するに至つた。

故に十九世紀の世界には約一八七五年迄自由貿易が全盛であつた。そして七十年代よりネオマーカンチリズム[4]が擡頭し、米國は一八七五年より新たに關稅の引上を行ひ、一八九〇年のマッキンリー法案[5]によつて極端なる保護關稅に移り、ロシアも八十年代より等しく保護關稅主義に移つた。故に一般に一八七一―九〇年間を以て固有の自由貿易時代といふことが出來る。換言すれば世界經濟は自由市場經濟であつた。何故なら當時價格及び量の動きは主として市場に於ける需要及び供給の法則に左右されてゐたからである。

尤も保護政策就中、關稅政策及び社會政策は十九世紀の八・九十年以來益〻經濟に干渉して來たことは事實であるが、價格には間接に影響を及してゐたに過ぎぬ。この頃公經濟が益〻擴大し、特にこの現象はドイツに顯著となり鐵道其他の交通機關が國營となり、ドイツの經濟學者アドルフ・ワグナー[6]が財政學

④ Neomerkantilismus.　⑤ MacKinley Bill.
⑥ Adolf Wagner.

上、國家經費膨脹の法則を叫んだのは、この間の消息を物語つてをる。乍併當時と雖ども國家の力は未だ明かに自由市場經濟を干渉的に左右する程度には進まなかつた。同時にカルテル、勞働組合、產業組合も漸次發達して來たがその活動は未だ自由市場經濟を著しく束縛する程度には至らなかつた。故に十九世紀の下半期より戰前迄の歐洲經濟の特色は自由市場經濟であつたと稱することが出來る。[1]

自由市場經濟は先に述べた樣に自由なる自動的經濟秩序を以て特色とする。從つて經濟のメカニズムに國家及び國民の何等の干渉束縛のなきことであらねばならぬ。併し現實には國家あり國民がある以上、この意味に於ける絕對的自由市場經濟の出現を望むことは不可能である。故に問題は自由市場經濟に對する國家又は國民の干渉の程度如何である。この點は自由貿易にも同樣である。

① Ernst Wagemann, a. a. O. S. 233—236. 生島廣治郎譯述、カルバートスン原著「國際經濟政策」第一章參照

② Eugen Böhler, Der Klassische Begriff der Weltwirtschaft, Weltwirtschaftliches Archiv, 32. Bd. Heft I.

(三)　古典學派の世界經濟概念

先に述べた樣に古典學派に於ては自由市場經濟の世界經濟を特に自由貿易と銘名してゐて、之が古典學派の世界經濟概念である。故にベーラー教授[2]が古典學派はハルムスと等しく既に現代的世界經濟概念を構成してをるといつたことは正當である。この自由貿易には二種の概念があつて、一は絕對的自由貿易で、他は相對的自由貿易である。前者は國際交通一般に對する國家又は國民の干渉束縛の絕對的になき自由世界經濟であり、後者は特定の交通、特に生產要素の移動には多少の干渉束縛があつても、商品交通には干渉の及ばない世界經濟である。ダッドリー・ノースが[3]「世界は貿易に關しては一國家又は一國民である。此處では國家は個人である」といひ、之より百年後リカードが文明世界の Universal Society of Nations と稱したものは前者である。[4]即ちリカードの所謂絕對的自由貿易は諸國間の交通に何等の國家的干渉がなく

③ Dudley North, Discourses upon Trade.

④ Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, Foreign Trade (Gonner) p. 114.
堀經夫博士譯「リカード經濟原論」138 頁

從つて「完全なる貿易の自由制度の下では各國はその資本及び勞働を最も有利なものに向ける」[1]から、商品、資本及び勞働の國際的自由交通が行はれる。乍然現實には當時貧弱ながらにも國家がある。又風俗、慣習と傳統に生きる國民がある。之が爲にたゞひ國際間に商品の自由交通は可能であつても、資本及び勞働は高き利潤と勞賃を追つて自由に國際間に移動するものでない事實を確認して、リカードは絶對的の外に相對的自由貿易を考案するに至つた。[2] 故に相對的自由貿易とは資本及び勞働の國際交通を束縛せる自由國際商品交通である。

其後ミル、[3]ケアンズ、[4]バステーブル、[5]マーシャル[6]の所謂自由貿易の概念は總て相對的の自由貿易である。[7] ケアンズは國際間に生産要素、就中資本及び勞働の移動を阻止すべき原因を(一)地理的隔(二)政治制度の相違(三)言語、宗教社會的慣習の相違とし、特に現代に於ては政治的及び社會的原因が自然的原因よりも遙かに有力であると述べてをる。[8] かく生産要素の國際的移動は容易でないから、各國は夫々自國の資本及び勞働をその自然的社會的事情に最も適する生産に使用して國際分業[9]をなし、之によつて自由に貿易を行はしめるときは各國の生産が增加し人類の享樂數が增加するものである。是古典學派の自由貿易の理論である。故に此の自由貿易論に依れば、世界經濟は生産要素の移動難を度外すれば、たしかに自由市場經濟である。そして古典學派はこの世界經濟の均衡理論として所謂 Theory of International Trade[10] を案出した。所謂國際商業理論は特定の貨幣理論を前提として國際支拂殘高の均衡金移動及び比較生産費の法則より構成されてをる。之が古典學派の世界經濟理論であつて、一八〇三年ソーントン[11]より發生して現代英國のケンブリッヂ學派及び米國のハーバート學派に至るものを包括する。而してこの理論は國際間の資本及び勞働の移動が國内に比し困難であることを前提として建設された世界市場經濟の理論である。而してこの前提は現代各國の資本輸出政策及び移出入民政策の現狀に照せば今尙明かに妥當するものである。

① Ricards, Principles of Political Economy and Taxation, Foriegn Trade (Gonner) p. 114. 堀經夫博士譯「リカード經濟原論」138頁　② Ricardo, Principles of Political Economy, p. 114. 生島廣治郎「古典學派の世界經濟概念」國民經濟雜誌52卷1號14頁
③ John Stuart Mill.　④ J. E. Cairnes.　⑤ Bastable.
⑥ Alfred Marshall.　⑦ 生島廣治郎、同上參照

⑧ Cairnes, Some Leading Principles of Political Economy, p. 361.
⑨ Territorial Division of Labour. 此の用語は Torrens が始めて使用した。
⑩ 此の英語を現代の用語で表現すれば國際經濟理論である。現に Taussig の名著 Theory of International Trade を Palyi は Theorie der Internationale Wirtschaftsbeziehungen と獨譯してをる。　⑪ Thornton.

此の理論は國內自由市場經濟の前提と異にして建設されたものであるからベーラー教授は古典學派の世界經濟の理論は國內經濟の理論と質的に異る別個の法則[1]であつて又應用理論であるといふ。[2] 之に對してワイグマン教授[3]は兩者は質的に異るものではないと反駁する。唯問題は應用理論とは何ぞやである。要之古典學派の自由貿易は自由市場經濟一般と等しく經濟學上の理論的體系的概念であつて、その理論は世界經濟のメカニズムの說明を眼目とする。故に現實に自由貿易(相對的)の存するや否とは別個の問題であるといへる。

加之リカード時代の貿易は現代の世界貿易に比すれば極めて微々たるものであつて、彼が比較生產費法則の說明の際に、ポルトガル、イギリス間の貿易に麻、葡萄酒を引用してゐる如く、之は全く當時の貿易品の極めて貧弱なりしを物語るものであつて、當時の貿易國、品種及び數量を今より顧みれば實に今昔の感に堪えぬであらう。當時國際貿易とはいへ、國民經濟は十九世紀の末

① Heteronomie.
② Eugen Böhler, Der klassische Begriff der Weltwirtschaft, Weltwirtschaftliches Archiv. 32. Bd. Heft. I.
③ H. Weigmann, Kritischer Beitrag zur Theorie des Internationalen Handels, 1926, S. 4 f.

の如く完成の域に達せず、從つて國家的利益よりも地方的利益が第一であつたことは後年マーシャル[4]の說明せる通りである。故に貿易の相手國の事をスミスは Every Society or Neighbourhood. リカードは Country ミルは Distant Place と稱し、リカードは國際貿易のことを異國貿易 Foreign Trade といひ、ジョン・スチュアート・ミルに於て始めて國際貿易 International Trade なる言葉が使用された有樣である。

故にリカード自身は自由貿易の理論を唱へたものゝ、實際に於ては世界自由貿易(相對的の)に基いて眞に國際分業が成立してをるものとは思つてゐなかつた。當時リカードのみならず國際分業を始めて唱へたトレンスに於ても、國內の需要の大部分を國內で充足せしめんとする思想が力强く殘つてゐた。故にリカードは穀物の輸入促進を高調しながら僅か穀物の八分の一の輸入を認めてゐたのである。故にリカードは一方に於て自由貿易理論を唱へながら眞に國際的に分化された世界經濟の存在を信じなかつたものと斷

④ Marshall, Money, Credit and Commerce, chap. I. p. 1—7.

定しなければならぬ。

（四）ウニフェルザール・イコノミー及び萬民經濟の概念

ドイツの經濟學上の用語にウニフェルザール・イコノミー[2]の言葉がある。この用語の意味は往々誤解されてゐるが、此は自由貿易と全然同義である。[3]從つて絶對的と相對的との兩概念に分類され得るものである。故に單に國境が消滅して世界の人類が社會連帶の觀念に基いて世界社會を組織し人類が自由に相互に交換する經濟を意味するものではない。たとひ國家又は國民があつても、國際間の交通に何等の干渉束縛を加へざる場合には、之はウニフェルザール・イコノミーである。但しこの場合國家は貿易に關しては有名無實であり、個人から見れば國家や國民の立場を無視したものといへる。

作田博士は世界經濟の概念を説明されるに當り、先づ國際交通經濟と對立

① 古典學派の世界經濟概念に就いては生島廣治郎「古典學派の世界經濟概念」國民經濟雜誌52卷1號、「國際商品交通の原理」同誌50卷6號、「鎖國經濟及び世界經濟思想の發展」（下）外交時報63卷4號149—151頁參照

する概念として萬民交通經濟なる概念を高調される。博士に依れば國際的と萬民的との區別は「一は領分國家によつて成立する國民間の關係、他は國家の統制によつて束縛されない方面に於て國籍と國境とを越えて行爲する個人間の關係である」として先づ萬民的と國際的とを區別し、次に「世界經濟の成立過程は先づ國民經濟の對外交通から出發する。此の對外交通が總ての國民經濟を包括し且つ交通關係其物に系統及び秩序が備はるときはそこに國際交通經濟が生ずる。此の交通關係が略、形態を成すに至れば更に國際交通を基礎として各個經濟が國境を越えて互に對他交通を始む。此の交通は國民の立場に卽しない個人的のものであり、それが發展して一定の系統及び秩序を備へるに至ればそこに萬民交通經濟が發生する。」而して「之等の二つは獨立の系統及び秩序を備へる別々の交通經濟ではなく一つの交通經濟の二つの階層となり、二者が重積して一つの系統及び秩序に到達するときこゝに世界經濟を成立せしめる。」「國際交通經濟は統一主義及び交換經濟により、萬

② Universalökonomie, Harms, a. a. O. S. 3.
③ Kotschnig, Weltwirtschaft und Universalökonomie, Weltw. Archiv, 22. Bd., 1925.

民交通經濟は自由主義及び資本經濟によりて成立するが、而も二者は別々の交通經濟ではなく、これらが重り合つて一つの世界交通經濟を構成する」又「國家又は政府の行動は凡て國際交通の中に入り、國家の明示又は暗示の禁制に反して密かに或る貨物を輸入し、貨幣を外國銀行に預入れ、紙幣の投機を試みるが如きは萬民交通である。」結局兩者の區別は「目的と見方」の如何にある。而して萬民交通經濟に於て總體性の萬民總體經濟(萬民經濟)が存立する。こゝでは單一體たる各個經濟が世界に亙つて交通經濟を結び、其結合の組織體及び運營力に當るものが、萬民總體經濟(萬民經濟)である。同樣に國際交通經濟に於ても總體性の國際總體經濟(國際經濟)が成立し、之は國際交通關係に於て各の國民經濟に對向し、同時に總ての國民經濟を包容する總體性のものとして獨自の組織及び運營力を有してをる。故に萬民經濟及び國際經濟は夫夫萬民交通と國際交通に於て總體性の組織及び運營力を有し、更に二つの組織及び運營力が現實には一個の總體經濟たる世界經濟を構成してをる。要するに世界經濟は世界交通に於て國際經濟と萬民經濟との二階層によつて構成される一個の總體經濟である。この總體性は現實的存在たることは勿論のことであり、單なる交通關係ではなくしてその中に一定の組織を具へ運營を爲す所の行動體系である。[1]

右は作田莊一博士の世界經濟の概念である。此の場合、先づ博士の所謂自然經濟である萬民總體交通經濟がウニフェルザール・イコノミー又は自由市場經濟の世界經濟又はシュパンの所謂個人主義的世界經濟と如何に相違してゐるかを考察することは頗る興味ある問題である。

ウニフェルザール・イコノミーの場合には國家が國民の「對外又は對他」交通に何等の干渉のなき自由交通が存してをり、之が自由萬民交通經濟をなしてをる。從つて國家は交通に關しては有名無實であり、個人は國家又は國民の立場に卽せずして交通することが出來る。但しウニフェルザール・イコノミーの絕對的又は相對的の如何によつて自由交通に限界がゐることは勿論で

① 作田莊一博士著「自然經濟と意志經濟」第三章世界經濟の自然性參照

ある。故に國家の明示又は默示の禁制を犯してなす交通と何等相違はない。唯國家が故意に權力を行使しないことと、權力を行使せんとしても事實上及ばざることゝは相違してをるが、個人が國家より自由に交通することに於ては同一である。而して萬民交通は國家の統制に束縛されない方面に於て國籍と國境を越えてなす個人間の交通であり、萬民交通經濟は之が一定の秩序と系統を備へたものであり、更に萬民總體經濟は總體性に於て組織及び運營力を備へたものである。而も萬民經濟は自然性である。故に之等の點を考えれば萬民經濟はウニフェルザール・イコノミーであり、自由交通經濟であり自由市場經濟であり、シュバンの所謂個人主義的世界經濟である。シュバンによれば個人主義的經濟概念は商品を備へた各個經濟者(個人)の市場に於ける集成、卽ち交換であつて、自然經濟の交換及び貨幣經濟の賣買は交通なる普遍概念に包括されるから、個人主義的考察ではその表現の如何を問はず結局に於て經濟は唯各個經濟者の交通のみである。故に世界經濟は各個經濟者の自由なインターナチョナルの交通であると述べられてをる。

故に作田博士の所謂自然經濟である萬民經濟は或は博士の說を曲解するかも知れないが、之をウニフェルザール・イコノミー又は自由市場經濟の世界經濟又は個人主義的世界經濟であると考へざるを得ない。萬民經濟をかく解釋すれば、之と博士の所謂國際經濟とが二つの階層をなして、一個の世界總體經濟に統一されることが論理上如何に可能となるかの問題が殘つてをる。

第五章　自由市場經濟及び統制的市場經濟の世界經濟の限界

（一）　自由市場經濟の世界經濟の限界

以上は自由市場經濟としての世界經濟の概念である。先に述べた樣に自由市場經濟の概念は飽く迄も理論的體系的概念であつて、之を現實の經濟生活に求めるならば自由市場經濟に自ら限界が劃される。而してこの限界を劃するものは各國の經濟政策、社會政策、財政、傳統的中小農工經濟、カルテル、トラスト、勞働組合、各國の警察、國民心理等である。故に世界經濟が自由市場經濟であるといふには、之等の經濟政策やカルテル、トラスト等があつても、その市場經濟のメカニズムを左右する程度の比較的微力であることを必要とする。この場合、之を自由市場經濟と稱するに妨げない。自由貿易の場合に於ても亦然り。若し國家の經濟政策が擴大し保護關稅、輸出入管理、禁止、更に爲替管理、金[1]の死藏政策が行はれ又カルテル、トラスト、特に國際カルテル及びコンチェル等が發達すれば自由市場經濟のメカニズムの限界はそれだけ限局され、その程度の如何によつては世界經濟は自由市場經濟といはれなくなる。但し此の場合でも市場經濟固有のメカニズムは決して滅亡したものと一概にいふことは出來ぬ。

かくの如く自由市場經濟としての世界經濟は一方に於て國家の政策、他方に於てカルテル及びコンチェルン等によつて制限されてをる。アドルフ・ウエーバーは自由市場經濟が現代の如く國家の政策によつて直接束縛されてをる所から、之を國家的束縛の世界經濟[2]と稱して自由世界經濟に對立せしめ之を現代の世界經濟の特色となしてをる。蓋し國家の經濟政策が世界市場交通に及ぼすものとしては、國際商品交通には關稅、輸出入禁止、制限（管理）、國際

① 附錄「歐洲貿易の三重障壁」參照。
② Die staatlich gebundene Weltwirtschaft, (Adolf Weber, a. a, O. S. 12.)

資本交通には資本輸出の制限及び禁止、爲替管理、特に國際金交通には金の死藏、輸出禁止及び制限、國際移民交通には移出入民の禁止及び制限、船舶交通に
は自國船主義が採られてゐて、之等の各種の政策的手段が更に相互に影響し
てその干渉力が自由市場經濟のメカニズムに及ぼす影響は相當强くなつて
をる。而して古典學派の世界經濟理論はこの内、國際資本及び勞働交通の或
る程度迄阻止されることを前提として建設されたものであつて、現代ではそ
の阻止には特に各國の經濟政策の與つて力あることは明白である。故に此
の點からいへば古典學派の理論の前提は正に現代の世界經濟の現狀に卽し
たものといへる。併し現代世界市場交通の大部分を占めてをる商品交通は
關稅、輸入禁止及び制限並に爲替管理の三重障壁によつて妨げられてをり、[1]之
に金の死藏及び輸出禁止政策が加つて古典學派の理論の妥當性はそれだけ
縮少されねばならぬ。併し之は市場經濟のメカニズムが消滅したといふの
ではなく、メカニズムの作用が限局されてをるといふのである。之に就いて

① 附錄「歐洲貿易の三重障壁」地圖參照。

古典學派の理論の妥當性がどの程度迄及ぶかは附錄に揭げた「獨逸賠償金支
拂理論の考察」に於て詳細に論じてをいたから參照されんことを望む。

次に自由市場經濟の世界經濟がカルテル、トラスト、コンチェルン等によつ
て直接束縛される場合には之を統制市場經濟の世界經濟といふことが出來
る。論者或は之を組織的又は獨占資本主義の世界經濟とも稱し、現代の世界
經濟の特色は正に是であると主張する。前者の國家的束縛の世界經濟の場
合は、國家の經濟政策によつて自由市場經濟が直接束縛されるに對し、後者の
場合はカルテル、トラスト等によつて自由市場經濟が直接束縛されてをる。
固よりカルテルにしても國家がカルテル立法を制定し、又は國際カルテルに
參加することを認める爲に成立し得るものであるから、カルテルの束縛的活
動は國家の經濟政策と密接に關係してをる。唯兩者の場合の區別は自由市
場經濟が直接何れによつて束縛されるかの觀點より見たるものである。

(二)　世界市場交通は統制的なりや

然らば現代の世界經濟は之を統制的市場經濟といふことが出來るか。茲に問題となることは世界市場交通の何割が統制的であるかといふ事である。此の割合は世界交通の實際に照さなければ解答の出來ぬ問題であり、而も決して正確にはいひ得ない問題である。

今之を世界經濟の事實に徴して考察しよう。先づ現代計劃經濟[1]を實行してゐる國はロシアである。ロシアの世界貿易參加の割合は僅々一・四%(一九二九年)であるから、之と世界經濟が市場經濟であるや否やとは殆んど關係がない。同樣に資本集積の小なる諸國、ワーゲマン[2]の所謂新資本主義國及び半資本主義國もこの點に關しては殆んど問題とならぬ。唯問題となるのは資本集積の發達せるワーゲマン[2]の所謂高度資本主義國である。而して高度資本主義國では農業は大部分無統制であるが、統制は主として工業に行はれてゐる。そして之が或は國營企業或は國內又は國際カルテル、コンチェルン、トラスト或は產業組合を通じてなされてゐる。ワーゲンフヰール[3]の計算によると、國際カルテルの數は一九三一年には三百二十に達し、その內譯をみると工業及び大商業に屬するものとして(一)鑛山業に十二、(二)鐵鋼業に五十(三)金屬工業に十、(四)窯業に二十五、(五)製紙及び製材業に十五、(六)化學工業に五十一、(七)纖維工業に二十七、(八)食料品工業に十一、(九)其他に三十で合計二百三十一となり、之に交通業の八十、保險業の十が加つて總計三百二十と通算されてゐる。そして國際カルテルの參加國をみると、ドイツの右に對する六、七割の參加を筆頭として英、墺、チェッコ、佛、白、ポーランド、日本、米國の順序である。又國內カルテルの數は國によつて著しく異なり、例へばドイツの千八百乃至二千四百から、イギリスの百七十、チェッコの百二十、オーストリヤの百、其他の諸國は大抵百以下の數であるが、之[3]等全部で少くとも四千には達してゐる。故に國內及び世界市場に於て、統制的要素の增加せしことは蔽ふ

① 計劃經濟 Planwirtschaft とは嚴格にいへば社會主義計劃經濟を指す。

② Ernst Wagemann, Struktur und Rhythmus der Weltwirtschaft, S. 36 f.

③ Wagenführ. Statistik der Kartelle, Allgemeines Statistisches Archiv, 22. Bd. 2. Heft, 1932.

可らざる事實であつて、之が確かに現代資本主義の特色をなしてをる。同時にかかる統制的企業と相並んで自由企業が存してをることは勿論であるが問題は國内市場及び世界市場交通の大部分が統制企業によるや自由企業によるやである。この割合は國内市場交通と世界市場交通とによつて異るものであつて、茲では後者の場合が直接問題である。

世界市場交通の主要部分(四分の三乃至三分の二)を占めるものは外國貿易である。而して貿易と國民所得との割合を見るに、國民所得の輸出額に對する割合は一九二九年にはドイツで一六%、イギリスで一八%、米國で六%である。[3] そして農産物、原料品及び工業品の貿易はヴァロリゼーションや國際カルテルの如き統制のあるに不拘、ワーゲマンの研究によると主として之等からの統制を受けざる自由交通である。[2] 國内交通に於てもコルム教授[3]の計算では統制的企業の最も發達せるドイツに於て一切の價格の約二〇―二五%が高度資本主義的束縛を受けてをるといふ。

① Wagemann, Resistance of Various Economic Structures to Crises, Europe, United States of America, No. 6. by International Chamber of Commerce, 1931, p. 23.
② Wagemann, a. a. O, VIII. The Quantitative Proportions of restricted and free enterprise.
③ G. Colm. a. a. O. S. 108.
④ Rudolf Hilferding. Finanz Kapital.
⑤ Nachimson, Vvedenie v izucenie mirovogo Chozjajstva. 1928.

何れにしても世界市場交通の大部分がワーゲマンのいふ如く自由企業によつてなされ、無統制市場交通であることは世界經濟研究上注目に値する事實である。固より世界市場交通に統制的要素が次第に擴大せしことは事實であるが、之を以て直ちに世界經濟の大部分が統制的市場經濟となつたものと速斷することは早計に失してをる。世界經濟を統制的市場經濟と概念して、之に固有のメカニズムを見出さんとするのは特定のマルキシズムの世界經濟理論であつて、或は之を帝國主義の理論とも稱してをる。ドイツのヒルファデングの金融資本主義の理論[4]及びロシアのナヒムソンの獨占資本主義の理論がこの種の世界經濟の理論である。ナヒムソンは「世界經濟學總論」[5]の序論に世界經濟學は獨占資本主義の理論であつて、獨占資本主義時代の國際經濟關係を研究することを任務とする。故にこの點に於て國民經濟學と原理的に異るものであるといふ。併し世界市場經濟全體の内で統制市場經濟の限界が依然として著しく限局されてゐる世界經濟の現狀に於ては、この種

の理論の適用の範圍は甚だ狹隘になるといはねばならぬ。

それ若し一切の國が萬一、計劃經濟を廣汎に亘つて實行するときは、國民經濟は勿論世界經濟は最早市場經濟でなくなつてしまふ。[1] 何故なら計劃經濟[2]は嚴格にいへば社會主義計劃經濟であつて、例へばソヴィエットロシアの如く國家が生產の種類及分量を定め、且つその生產物を國家の制定せる規則によつて國民、卽ち勞働者に配當せしめるから、市場を通じて生產者と消費者とに財の獲得及び分配を行はしめないからである。故に計劃經濟と統制市場經濟[3]とは根本的に異るものである。此の場合、計劃經濟國間の財の交換其他は如何にして行はれるかに就いては、未だ實例のなき爲に如何とも言明の限りではないが、未開社會の蕃族間の物々交換を合理的に大規模に實行することも考へられないことはない。そしてその理論としては古典學派特にリカードの比較生產費法則の如きものが適用されることになる。

① 但し市場經濟の消滅は卽ち世界經濟の消滅を意味するものと早斷することは出來ない。
② Planwirtschaft.　③ Gebundene Marktwirtschaft.

第六章　世界經濟の市場經濟說に對する批判

（一）　市場經濟理論に對する批判

以上は總て世界經濟の市場經濟的考察である。經濟を市場經濟と概念する以上は、經濟を人間協同生活より遊離して、經濟のメカニズム卽ち機能のみを認識することになる。從つて經濟は國家、社會、人生と分離し之等との根本關係が不明となつて、經濟の本質及び形成が說明されなくなることは明かである。シュバンは之を個人主義經濟理論、ゴットルは之をライスツングス理論と稱し、[3] 之に對して兩氏は夫〻具體的普遍主義理論及び統體經濟理論を提唱[4][5]してをる。故に市場經濟理論、從つて世界經濟の市場經濟說に對する批判は少くとも之をシュバンに聽かなければならぬ。

③ Leistungstheorie.　④ Universalismus.
⑤ Gebildetheorie. (Lebenstheorie)

抑も經濟の個人主義的考察とはシュパンに從へば經濟は各個經濟者[1]の相互集成[2]で經濟者は商品量を有する個人(需要供給理論)であり、此の場合、商品量は之に加へられた勞働時間(リカード・マルクス)であつても、價値評價(限界利用學派)であつても玆では問題とならぬ。唯、重要なことは各個人が第一義であり、各個人の集成が第二義であることである。後者の意味の集成は常に市場の集成であつて、卽ち交換である。故に個人主義的經濟理論の體系に於ては根本概念は交換である。交換に於て價値及び價格形成が生ずるから、價値論及び價格論がその根本概念となる。そして一切の經濟現象が交換に還元され、從つて一切の經濟現象が價値及び價格の形成の方式によつて理論的に考察されることを個人主義理論の特色とする。スミス、リカード、セニヨール、ミル、メンガー、ゼェボンス、ワルラス、クラーク、パレート、バローネ、カッセル[3]の經濟學は總て個人主義理論[4]である。

而して自然經濟的に所謂交換並に貨幣經濟的に所謂賣買は交通なる普遍

① Einzelwirtschafter.　② Aufeinandertreffen.
③ Smith, Ricardo, Senior, J. St. Mill, Menger, Jevons, Walras, Clark, Pareto, Barone, Cassel.
④ Individualistische Theorie.

概念で包括されるから、結局各個經濟者の交通[5]が所謂國民經濟學(市場經濟學)の對象となり、一切の經濟現象は總て經濟を營む個人の交通に還元されてしまふ。卽ち生產は要素[6]の購買と要素の結合せるもの(生產物)の販賣であり、勞賃の形成は勞働の賣買であり、資本利潤の形成は資本の賣買であり、所得の形成は生產要因[7]の賣買であり、而して貨幣は間接交換—交換能力ある商品を認め—であることは說明を要しない。

何れにしても個人主義理論は一切の經濟現象を各個經濟者間の交通と考察する。而して經濟學史上かかる個人主義的自由學派から常に遠ざかつてゐたのはドイツの歷史學派である。蓋し個人主義理論には生ける經濟[8]がないからである。個人主義理論に於ては生產は交換に還元されて經濟上固有の意味に於ける生產はなくなり、又國家的經濟政策[9]に屢〻述べる所の固有の意味に於ける集團的經濟現象[10]、例へば貿易及び支拂殘高も存しない。何故ならば之を私的殘高の合計と解するからである。同樣に總ての時代の歷史的經濟

⑤ Verkehr.　⑥ Elemente.　⑦ Produktionsfaktoren.
⑧ Lebendige Wirtschaft.　⑨ Die staatliche Wirtschaftspolitik.
⑩ Kollektive Wirtschaftserscheinungen.

政策の出發點である國民經濟もなければ、固有の意味に於ける經濟政策も存しない。レセフェアーは自由主義の政黨的要求ではなく、純理論的に分解した立場からの主張である。故に實際的經濟政策は悉く不可能である。而して各個經濟者の市場に於ける集成の本質は、自動的機械的[1]即ち自然法則的方法の價格形成であるから、之に對する一切の干涉、例へば價格に課する租稅社會政策で强制される高き勞賃、貧易尻の順調を期する手段は常に效果を生せず、實行の出來ぬものと看做すことが右の集成の本質である。[2]

(二)　世界經濟の市場經濟說に對する批判

然らば交通の概念から如何にして國民經濟及び世界經濟の概念に到達するか。交通の本質からいへば、國民經濟なるものはなく、唯、純然たる交通經濟があるのみである。蓋し各經濟の交換、即ち交通による集成が經濟現象の本質である以上、經濟交通の障碍は認められるが、この障碍を超越する他の經濟

① autonomische mechanische.
② Spann. Fundament der Volkswirtschaftslehre, 4. Auflage. 1929, Anhang. S. 352 ff.　Ders, Tote und Lebendige Wissenschaft, 3. Auflage. 1929, S. 4 ff.

現象は存しないことになるからである。故に國家的國民經濟[3]、組織的國民經濟[4]は各個經濟者の交換關係で織りなす純交通現象網の障碍となる。そしてこの交通網は根本的に國境、國家、國民、言語に少しも束縛されざるものである。要するに交通網は非國家的、非國民的のものであり、經濟者相互の經濟的結合に過ぎないものである。若し自由競爭、自由貿易及び一切の經濟的自由が存すれば、此處には純然たる交通、即ち交通經濟が存するのみで、國民經濟の存在は認められることは出來ない。此の場合、交通經濟にして少しも國境によつて阻止されないときは、この意味に於て是が世界經濟、即ち自由國際的交通經濟である。故にこの交通が例へば關稅、航海條例、禁止、社會政策其他何等かの自由競爭の制限によつて妨げられるときは、之等は經濟の障碍限定となる。從つて國民經濟が眞に成立することは、結局經濟者が他の國境內の經濟者と自由經濟交通で集成することを妨止する意味に外ならぬ。

要するに個人主義的經濟概念に於ては經濟者相互の交通が國家及び國民

③ Die staatliche Volkswirtschaft.
④ Die organisierte Volkswirtschaft.

即ち非經濟的なものによつて阻止されないこと、約言すれば自由國際交通經濟に於て世界經濟が存在することになる。[1] これ畢竟、個人主義的自由主義的理論が故意に世界經濟を語らざる理由であり、此の概念が其後漸くその理論に編入された理由である。但し世界經濟なる言葉は國際交通經濟と同樣多年使用されてゐた。自由主義の純然たる即ち自由交通經濟は國民及び國家に束縛される國民經濟を否定し、經濟の本質はかゝる條件から自由なものであり、從つて先に述べた意味の世界經濟と斷定したものである。そして上來のことは現今でも自由貿易論を主張する者が無意識に犯してをる所である。[2]

(三)　市場經濟理論の職能

以上はシュパンの個人主義的經濟概念、即ち市場經濟概念に對する批判であり、從つて世界經濟の市場經濟説に對する批判である。之によつて市場經濟概念構成の立場が極めて明瞭となると同時にその認識の能力が明かに指

① Freier Internationaler Verkehrswirtschaft.
② Spann, Der individualistische und universalistische Begriff der Weltwirtschaft, Weltwirtschaft. Archiv, Bd. 30, Heft 2.

摘されてをる。然らば市場經濟理論は世界經濟の研究上全然意味を失ふものであるか。

先に述べた樣に經濟は人間協同生活の部分的形成であつて、生活難に對する社會統體の形成確保である。而して現代の經濟生活は價格形成[3](ゴットルの所謂經濟的デメンション)[4]の形成を通じて形成確保されてをる。換言すれば市場經濟を通じて慾要と充足の調和的精神が實現されてをる。[5] この結果價格形成の點のみに着眼して之を社會生活より遊離的に取扱つて市場經濟即ち經濟と斷定することは一概に非難すべきことではない。併し市場經濟の理論は遊離的、量的、機械的方法によつて經濟のメカニズム即ち機能[6]を説明し得るが、經濟の本質である人間協同生活の形成確保の説明は不可能である。故に假に一國が廣汎に亘つて計劃經濟を實行して市場經濟が消滅したとなれば、之と同時に經濟が人間協同生活より消滅するかの如く誤解せしめることとなる。市場經濟が消滅しても經濟は生活難の存續する限り、人間協同生

③ Preisgestaltung.　④ Wirtschaftliche Dimension.
⑤ Gottl, Bedarf u. Deckung. S. 18.
⑥ Funktion.

活には依然として必要であり、從つて之を對象とする經濟學は飽く迄も存續することは勿論である。

想ふに經濟學の理論、從つて概念は方法論的に[1]二つに分けることが出來る。一は社會統體たる經濟の形成[2]を精神科學的方法によつて認識の對象とし、他は社會統體たる經濟の內部的構造[3]を解剖して自然科學的方法によつてその機能[4]を認識の對象とする。第一はゴットルやシュバンの理論であつて、ゴットルは經濟を人間協同生活の特殊な形成となし、慾要と充足との不斷の調和的精神を以て生活が如何に形成されるかを人生科學的方法[5]から系統的問題[6]とする。是、彼の生活理論又は統體理論である。故にゴットルの生活理論は[7]經濟の本質、[8]形態、[9]制度、[10]機能を統一的理論體系より說明せんとするものである。シュバンは經濟を社會の部分全體として、全體が如何に部分を包擁[11]し、部分が如何に全體を顯現[12]するかを認識せんとして具體的普遍主義[13]の全體理論を建設し、之によつて經濟の本質、形態、機能に亘つて統一的理論體系から說明せん

① Methodologish.　② Gestaltung.　③ Innere Gefüge.
④ Funktionen.　⑤ Schicksalswissenschaft.　⑥ Problematik.
⑦ Lebenstheoire, Gebildetheorie.　⑧ Wesen.　⑨ Formen
⑩ Verfassung　⑪ Eingliederung.　⑫ Ausgliederung.
⑬ Universalismus, Ganzheitslehre.

としてをる。故にシュバンは「古き諺に總てのカネは金なりといへるが如く總ての經濟は社會なり」と高調してをる。

第二の理論は經濟の社會統體の內部的構造を解剖し、その部分が如何に相互に機能するかを機械的自然科學的方法によつて認識する。而して市場經濟學の理論は正に是であつて、シュムペーター[14]は此の代表者である。此の場合、經濟を人間協同生活卽ち社會より遊離して一定量の商品を有する經濟人の交換關係(需要供給關係)が如何に機能するか、換言すれば價格のメカニズムによつて交通關係が如何に機能するかを說明せんとしてをる。[15] 之は古典學派の經濟學に於て始めて純理論的體系を整へるに至つたことは先に述べた通りである。故に此の種の理論は經濟の社會統體(生活)としての形成を全然問題としないから、ゴットルは之を Leistungstheorie と名付け、誤とはいはぬが幼稚な理論[16]となし、シュバンは之を個人主義理論と評してをる。市場經濟理論はかく遊離的抽象的理論であるから、此の場合、經濟による人間協同生活を說

⑭ J. Schumpeter は Wirtschaftssystem を經濟的量の機能關係卽ち Interdependenz と概念してをる。　⑮ 故に解剖學及び生理學に當るが、形態學 morphologie ではない。形態學は前者に包括されてをる。　⑯ naive Lehre (reifere Lehre に對す)

明するにはフォン・ウキーゼのいふが如く經濟社會學[1]の力を藉らねばならぬことになる。要するに第一の理論は經濟の本質、形態、機能を生活の內に見出さんとし、第二の理論は生活より遊離した機能のみを認識せんとする。而して兩者は夫〻世界經濟の認識に別個の意義と職能を有するものである。

ハルムスは以上二種の經濟理論に就いて前者を社會經濟統體理論[2]、後者を社會經濟聚合理論[3](市場經濟理論)といふ。彼は先づ統體[4]を參差雜多の關係の總和として、社會經濟統體理論は gestaltete Einheit[5]とし聚合[6]を參差雜多の關係の總和として、社會經濟聚合理論は經濟關係の總和として認識する。卽ち前者は統體それ自體を認識の對象とし、統體の構造的形成を全體と部分との關係に就いて、全體のイデー及び目的定立の照應の下に認識する。故に經濟は社會と切り離されざる關係を有し社會、國家、國家聯合、國法及び國際法と根本的關係を有する點に就いて考察される。然るに後者は市場經濟理論で市場經濟的交換關係それ自體を認識の

① Wirtschaftssoziologie. ② Sozialwirtschaftsgebildetheorie. ③ Sozialwirtschaftsgefügetheorie. ④ Gebilde: Zur Einheit gestaltete Mannigfaltigkeit. ⑤ Gefüge: Inbegriff der Mannigfaltigkeit. ⑥ Isolierende Methode. ⑦ Gesetz der abnehmender Abstraktion.

對象とし遊離方法[8]による機械的量的理論であつて、之を具體的存在に適用するには抽象化遞減[7]の法則に從ふことになる。[9]

フォン・ウキーゼは[10]ハルムスの右の社會經濟理論の二分論を批評して「世界經濟學のみならず、社會經濟學一般の方法論上の大進步である。蓋し之によつて兩考察方法が完全に對等の地位を保證されたことになり、社會經濟學者として私はハルムスの範疇に欣然として從ふ」と言つてゐる。サリーンはハルムスの所謂諸關係の統體と聚合との分類は決して嚴格な論理的對立ではなく、何故なら之は統體と聚合との純典型的なものに就いて見れば當つてをるが、兩者の混合形態のものが屢〻あつて fliessend である。故に統體と聚合との對立は上位及び下位の秩序關係より出發せるものであると評してをる。[11]若此しの場合に統體と聚合との兩概念が同一の方法で構想され、例へばウキーゼの社會學の如く構成されたものとすればサリーンの說は無條件に正當である。併しハルムスは兩概念構成の方法が異つてをることを言明してをる。

⑧ Harms. Vom Wirtschaftskrieg zur Weltwirtschaftskonferenz, 1927, S. 247. ⑨ von Wiese. Allgemeine Soziologie. Bd. II, S. 40. ⑩ Edgar Salin, Geschichte der Volkswirtschaftslehre, 1929, S. 54–55. (Über-und Unter-bzw. Ein-Ordnungsverhältnis.)

特に聚合理論は市場經濟理論であつて量的機械的方法であるといつてをる。故に自然科學的方法によつて構想された、經濟關係の聚合が精神科學的方法によつて構想された經濟關係の統體に移り行く[1]といふことは如何にして考へられるであらうか。市場經濟が統體經濟になることは如何にして可能であらうか。之は恰も自然科學的方法による自然經濟が精神科學的方法の意志經濟に移り行くといふのと同一の論法である。固より統體自體には聚合を契機として包藏してをるが、此の場合の聚合は統體に止揚されてをる。此の意味に於て統體と聚合とは上位及び下位の秩序關係であるには相違ないが、併し單なるfliessendではない。而して之は經濟學認識論上極めて重要な問題である。

要するに市場經濟理論と經濟統體理論とは各〻その認識能力を異にし從つて職能を異にし、前者は交通關係の機能のみを專ら認識し說明し、後者は交通の機能關係に止らずして經濟の形態、制度を說明して以て生活の形成といふ

① fliessend.

本質を明かにせんとする。故に世界經濟の概念も市場經濟說に止らずして更に社會統體として之を考察しなければならぬ。是、世界經濟の社會統體說の存する所以である。而して世界經濟を社會統體として考察するには先づ社會統體の何たるやを明かにしなければならぬ。

第七章　社會統體の概念

(一)　總　說

一般に社會統體[1]とは既述の如く人間協同生活を統體と概念したものであつて、シュバンは統體といふより寧ろ部分全體といふ表現を多く使用してをる。而して經濟が人間協同生活の部分形成である以上、經濟は國家、民族、家族と同樣に社會統體である。經濟の社會統體は特に經濟統體[2]といつて他の社會統體と區別する。そして經濟統體は經濟學上の概念であつて社會學上の概念ではない。社會學上に於ても、例へばフォン・ウィーゼは社會統體又は社會學的統體[3]を高調するが、之は經濟學上の概念ではなく、社會學上の概念であ

① Soziales Gebilde.　② Wirtschaftsgebilde.
③ Soziologisches Gebilde.　④ Harms. Der Begriff der Welt wirtschaft, Weltwirtschaft. Archiv. a. a. O.
⑤ 社會學者の岩井龍海氏は之を「構成物」と譯し、國家學者の堀眞琴及び黑田覺兩氏は之を「諸形態」と譯されてゐるが、之では一向 Einheit といふ意味が表れない。故に私は茲では Gebilde を統體と

抑も統體卽ち Gebilde[5] の文字は種々の意味を有してゐる。ハルムスは世界經濟の概念を究明するに當つて、このゲビルデの概念の詳細な考證を遂げ從來未だ嘗て之に對する定義のなきものに對し、彼は Zur Einheit gestaltete Mannigfaltigkeit として學界を驚かしめた。之によるとこの文字は Kebilde, Gebilithe と綴られた古いドイツ語であつて、最初は文藝美術上の言葉に使用されたが其の後社會學に之が採入れられ、更に經濟學に採用せられるようになつた。文藝上ゲビルデの意味は例へばシラーの鐘[6]の文句に「天來の乙女の姿(Gebilde)暫しとゞめん」に所謂ゲビルデは姿、卽ち心像である。文藝美術上では一般に心像、繪畫 Bild 摸寫 Abbild 原型 Urbild 形象、幻想、夢等の意味に用ひられ、特にゲーテ[7]が屢〻此の文字を用ひてゐた。

社會學上の文獻に於ては最初ゲビルデの文字は出來るだけ回避されてゐた。蓋しコント[8]やスペンサー[9]の社會學は社會有機體論であつて、當時社會學の文獻にはゲビルデと言ふ文字は生物學的と社會的との類似が表現されな

邦譯する。或は之を統一體と稱しても差支はないが、之を略して統體とした。我が國の獨和辭典には Gebilde の Einheit たる意味の譯語を揭げてない爲に、社會科學研究者をして此の文字の意味を誤譯せしめることの多きは頗る遺憾である。　⑥ Wie ein Gebild aus Himmelshoh'n,……sieht er die Jungfrau vor sich stehen —Schillers Glock.　⑦ Goethe.　⑧ Comte.　⑨ Spencer.

いものとして一般に斥けられてゐた。而してゲビルデの文字が社會學に採入れられたのは其の後、有機體的又は生物學的社會學に對する反感を回避する意圖から生じたものである。

抑も社會統體の用語が社會學の著書に於て始めて現れたのは一八七五―七八年のシェフレーの[1]「社會の建設及び生活」である。彼は同書の第一卷の序文に「生物學から類推する危險(非學問的比喩)を避け得たものと信ずる。社會統體[2]及び社會過程[3]を表すに有機體及び有機體的の文字を極力避けた」と記してをる。彼は自然的有[4]機體と社會的 Körper とを對立せしめて、社會現象の一般的形態を偶〻 Sociales Gebilde と稱し、同時に自然的有機體も亦統體なる一般的概念で包括した。從つて彼は生物學的なものより少しも脱却したのではなく、單に信用を失墜した有機體の概念を避けんとしたに過ぎなかつた。故に彼の所謂統體は有機的及び無機的の Einheit といふ極めて一般的概念であつて、統體の本質には格別深く立入らなかつた。彼の統體概念が自然科學的意味に捉はれてゐたのは自然科學的色彩の濃厚なロッツェ[5]の影響である。

(二)　メンガー及びグンプロウヰッツの說

社會統體の文字を可成有意義に使用した學者にオーストリヤ學派のカール・メンガー[6]がある。彼は有機的統體と無機的統體とを區別したのである。同書の第三篇第一章「社會現象と自然的有機體との類似及びその限界及び社會的研究の方法論的觀點」の題目の下に「自然的有機體と社會生活上の數多の統體との間には、其原因及び機能に就いて或る類似がある。自然的有機體に於ては各組織(オルガン)の參差雜多の部分があり、之等は極めて微細で殆んど見ることの出來ぬ複雜を呈してをる。そして之等の微細な部分が總て有機體なる全體の維持、發育に盡してゐる。社會現象に就いても之と同樣な考察をすることが出來、自然的有機體と社會統體との間にはその本質及び機能に就いて或る類似を有してをる」といつて、自然的有機體から社會統體[7]又は有機

① Albert Schäffle, Bau und Leben des socialen Körpers. 1875—78.
② Social Gebilde.　③ Social Prozess.
④ Natürlicher Organismus.　⑤ Lotze, Mikrokosmos, Ideen zur Naturgeschichte und Geschichte der Menschheit, Versuch einer Anthropologie, 1856.　⑥ Carl Menger, Untersuchungen über die Methode der Socialwissenschaften und Politischen Ökonomie insbesondere, Leipzig, 1883.
⑦ Sociales Gebilde, organisches Gebilde.

的統體の概念を導き出してをる。

併し彼は自然的有機體と社會統體との類似には一定の限界のあることを社會科學の方法論を建てる爲に主張してをる。卽ち社會現象を二種に分け從つて社會統體を二種に分類し、一は自然的過程の所產で有機體と比較し得るものであり、他は自然的過程でなく社會の目的を意識して形成されたものである。後者は特定の目的に對し幾多の手段を貢獻せしめる人間の評價[1]の所產であつて、有機體でなく機械體[2]である。前者の社會統體は社會的結合の人間個々の行爲によつて非意志的に成立する Einheit で例へば言語、法律、國家市場、競爭、貨幣である。有機體と機械體とは何れも全體に對し部分の合目的性を有し、部分の性質が全體の正常の機能を左右することには變りはないが有機體は人間評價の所產でなく自然的過程の所產であり、そのオルガンの各部分は正常の機能及び本質に於てヨリ高き全體との結合關係とその他の部分の正常の本質とによつて左右されるが、機械體はさうではない。茲に有機

① Berechnung.　② Mechanismus.

的統體[3]と無機的統體[4]との區別がある。而もかかる機械體及び類似の社會的結合も之を社會統體と稱することが出來又共同意志[5]が統體の建設及び維持に現れてゐるカルテルやツンフトも機械的統體である。

右の如く彼が社會統體に二種の區別を建てたのは歷史學派を攻擊する爲で、社會現象に對する社會科學の自然科學的方法の正當であることを主張せんとするにあつた。要するに彼のゲビルデは自然科學的方面より來たもので、純然たる社會學的認識上のものではない。又彼はゲビルデの概念及び由來には少しも言及してゐない。

グンプロウヰッツ[6]も亦統體の概念に多少觸れてをる。彼はコント、スペンサー、シェフレー、リニエンフェルド[7]等の影響を受けて社會現象の一般的表現を社會的有機體[8]又は社會的組織[9]とし、特殊の目的に Verband, Gruppe 等を使ひ時々之を統體と稱してをる。併し系統的に統體概念を社會單位へ應用したのではなかつた。彼の社會學中處々に國家、階級、グルッペ等が社會統體と稱

③ organisches Gebilde.　④ anorganisches Gebilde.
⑤ Gemeinwille.　⑥ L. Gumplowicz, Grundriss der Sociologie, 1885.
⑦ Linienfeld.
⑧ Socialer Organismus.　⑨ Sociale Organisation.

されてをる。彼は自然科學を研究してゐたから之より類推して社會學上に社會統體を用ひたものと想像することが出來る。

(三)　ラツェンホーファー及びマイヤーの說

社會統體の究明に多大の貢献のあつたのはラツェンホーファーである。彼は一八九三年三卷よりなる著書政治の本質と目的[1]を發表した。同書には社會統體[2]の原理的研究は見出されないが、參差雜多の要素の結合の固有性及び程度を考察して社會統體の基準を示してをる。例へば彼は「社會統體の內面的確立は鬪爭によつて增加し、その結合は社會的脅威の消滅によつて弛緩する」と記してをる。[3]之はダーヴヰニズムの影響を受けたものであつて、社會統體にして社會の自己保存の爲の鬪爭、卽ち妨害によつて左右されるものは關係によつて左右されるものよりも一層大なる存續性を有してをる。然るに關係[4]は平和的結合であつて、全體の確保よりも社會統體の相對的自由並に

① G. Ratzenhofer. Wesen und Zweck der Politik, 1893.
② Gesellschaftsgebilde.　③ Ratzenhofer, a. a. O. I. Bd. S. 9.
④ Beziehung.

個人の團結の促進に貢献する。故に關係より生ずる社會統體は可變的であるが、妨害及び實力行爲より生ずる社會統體は比較的存續性を有してをる。[5]故にラツェンホーファーは參差雜多の特定の結合關係を社會統體として考察してゐたといへる。故にリニエンフェルドやシェフレーの如く直接生物學的用語や方法によつて社會學的研究を企てたのではない。尤も他の方面では自然科學的に感染してゐる點もある。

彼は社會的結合關係及びその構造的秩序の理論を考究するに際し、社會的範域の諸現象の階段を論理的に(一)社會原子[6](二)社會元素[7](三)社會的個體[8](四)社會統體[9]に分類してをる。そして文化的範域に示した分類から、統體には一定の社會的職能が內在してゐるものとして、社會現象に固有の或る形成上の質を重視してをる。要するに特定の觀點よりみたBeziehungszusammenhängeを統體と稱してをる。そして同著書にはかかる形式的の社會的分類の外に實質的に諸種の統體が分類されてをる。

⑤ Ratzenhofer, a. a. O. II. Bd. S. 13.
⑥ Gesellschaftsatom.　⑦ Gesellschaftselemente.
⑧ Gesellschaftsindividualität.　⑨ Gesellschaftsgebilde.

ラッツェンホーファーの所謂本來の社會統體[1]は二個[2]の群(社會的元素)間の從屬關係より生ずるものであり、主たる社會統體は群から國家に至る迄の文化範域に及んでをる。Nation は社會統體であり、貴族は最も顯著な社會統體である。又政治的社會統體、例へば國家、縣と人民的社會統體例へば組合、國民、會社等との區別もなしてをる。

ラッツェンホーファーは其後一九〇七年發表の社會學[3]に於て社會統體を系統的に分類してをる。即ち(一)血統的統體[4]家族、人種、等族、貴族)(二)權力的統體[5]國家)(三)觀念的統體[6](四)文明的統體となしてをる。

統體の概念を稍〻明かにしたのはミュンヘン大學教授ゲオルグ・フォン・マイヤー[7]である。彼は社會化[8]の見地より個人間の各種の形式的關係の可能性及び人間集團の特殊の結合方法を考察し、統體概念研究の最初のドイツ經濟學及び統計學者の一人である。彼によれば社會化[9]の過程によつて社會的 Kreise が生じ、之にはグルッペ[10]と統體とがある。而して統體はその要素の結合のより鞏固な Gefüge であり、グルッペは社會化のより粗雜なものである。[11] 而して社會的クライゼの基礎は所與の空間的及び時間的限界內に於ける多數の個人であつて、多數の個人は茲では個人の集合以上のマッセ[12]であつて、同一のマッセが各種の社會統體卽ち粗雜な利益團體[13]より鞏固な Gefüge の集團的人格[14]特に國家に至るものの資料的基礎をなしてゐる。[15]

後年マイヤーは更に社會統體を研究して社會的グルッペと社會統體との區別を固持し、社會統體とは形式的に組織され、特に認められた公の規範によつて確立された社會的結合であると定義した。[16] 併し廣汎な社會的事實が何故統體なる一語で蔽はれるかの理由は說明されてゐない。

(四)　テニエス、アイスラー、ジンメル、ウェーバー及びケルゼンの諸說

キール大學のテニエス教授の名著である社會學[17]はドイツ社會學界に多大

① ursprüngliche Gesellschaftsgebilde.　② Horden.
③ Ratzenhofer, Soziologie, Positive Lehre von den Menschlichen Wechselbeziehungen, 1907.　④ Sozialgebilde der Blutes.
⑤ Sozialgebide der Gewalt.　⑥ Sozialgebilde der Ideen.
⑦ Georg von Mayr, Statistik und Gesellschaftslehre, I. Bd. 1895.
⑧ Vergesellschaftung.　⑨ Gruppe.

⑩ Georg von Mayr. a. a. O. S. I, Bd. S. 2.　⑪ Masse.
⑫ Interesse Gruppe.　⑬ Kollektivpersonlichkeit.
⑭ George von Mayr. a. a. O. I. S. 9.
⑮ Georg von Mayr, Begriff und Gliederung des Staatswissenschaften, Festgabe für Albert Schäffle, 2. Auflage, 1910, S. 7. Tönnies, Gemeinschaft und Gesellschaft, 1887.

の貢献をなしたが統體の概念には一向觸れてゐない。由來ドイツ初期の社會學は社會的構造、社會的結合の諸要素の關係及び結合を社會統體として考察しなゝで Assoziation, Aggregate, Organismus, sozialer Körper, Institution 等の立場から夫〻各様に考察してをる。尤もテニエスは時々統體の言葉を使用してをるが、之は自然科學的用言を社會的分野に用ひたものである。即ち統體を自然現象から類推して何等か獨立的のもの或はヨリ大なる全體の部分として考察してゐるが系統的の考察ではない。[1]

彼は其後別著「社會の本質」に於て統體なる言葉を盛に使用してをる。彼は先づ（一）Soziale Verhältnisse（二）Soziale Willen（三）Soziale Verbindung を區別し、第三の社會的結合に統體の表現を使つてをる。[2] そして更に（イ）生物的心理的總體及びグルッペ（ロ）眞實的社會全體即ち社會體[3]とを區別してをる。[4] そして生物的たると社會的たるとを問はず、人間個人の多數より成る一切の Einheit の上位概念を統體と稱してをる。故に例へば家族は生物的現象であり又社會

① Tönnies, a. a. O. 4 u. 5. Auflage. 1922. S. 170.
② Tönnies, Das Wesen der Soziologie, Jahrbuch der Gehe-Stiftung zu Dresden. XIII. Dresden, 1907, S. 193.
③ biologische und höchstens psychologische Gesamtheit.

的現象であるが之は統體である。故に自然的及び社會的與に統體の屬性であつて統體は此兩種の現象に等しく妥當する最も普遍的概念である。[5] 一般に彼の社會學には統體に特別重要性を置いてゐない。

ルドルフ・アイスラー[7]は特定の社會現象、即ち言語、宗教、學問、藝術、習俗、法律、經濟と Verbände 即ち家族、婚姻、群、部族、身分、政黨、國家とを區別する爲に前者を統體と稱してをる。併し彼の特殊社會學及び一般社會學に於ても何故に統體と他の概念、例へば Gesellschaft, Aggregat, Einheit, Organismus, Gruppe とを區別するかに就いて言及してゐない。彼によれば統體は最も一般的なる社會協働の所產であつて、社會的 Verbände は然らずして全體であり、職能と行動の點より見たる制度である。そして社會統體は心的要素の直接の所產である。「社會統體の存續と確保及び一切の破壞的過程に對抗して生ける存在をなし得る性質は一切の社會的なものの組織的基礎である。」[8] 此の意味に於て言語は社會統體であるのみならず自然統體である。併し社會統體に就いて社會的所產

④ wirkliche soziale Ganze, soziale Körper.
⑤ Ebenda, S. 68.　⑥ Ebenda, S. 73.
⑦ Rudolf Eisler, Soziologie, Leipzig 1903.
⑧ Ebenda S. 7.

と社會的 Verbände との區別が說明された以外に、統體の社會學的職能に就いては何等說明が施されてゐない。

ジンメル[1]の社會學を見るに統體は方法的にも體系的にも何等重要な地位を占めてゐない。彼は統體の文字を頗りに使用してをるが概念を說明してゐない。例へば國家統體(六三頁)、單純統體としての孤立的個人(七六頁)、社會統體(八一頁)、第二次的統體(三八九頁)、超個人的統體(八八頁)、上、中、下統體(六一九頁、七二二頁)、結晶的精神の客觀的統體(七二九頁)、特殊統體(二〇頁)といつてをる。唯彼は特殊の統體、卽ちグルッペに特定の見地より定義を與へ「總體の可分的部分が一個の Einheit に集結せるもの」であるといふ。[2] そして幾何學的單純統體に就いて述べてをる。又ジンメルは生物學の對象、卽ち有機體及びオルガンに就いて述べる場合に特殊統體または統體といつてをる。故にジンメルには統體に就いての形式的及び定義的說明が殘つてをるが、彼は特定の社會現象を社會學上の統體と考察してゐるから、社會統體と他の認識の分野に屬する

① Georg Simmel, Soziologie. Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung. 1908.
② Ebenda, S. 67.

統體との區別が明かになり、社會統體現象の認識的特殊性が明白にされてをる。

マックス・ウェーバーは生前發表した著書に於ては統體の本質並に概念に何等言及してゐない。彼の遺稿「經濟と社會」[3]に於ても統體の根本的說明を斷念してゐる。彼の了解社會學[4]は人間行爲の意味的關係を認識の對象とするものであるが、彼は此の立場から社會統體として概念せるものゝあることは明かである。「社會學による人間行爲の了解的說明上……之等統體、例へば國家、組合、株式會社は、各個人の特殊の行爲の經過及び結合關係[5]である。何故なら之だけで意義深く方向附けられた行爲の明白な主體であるからである。」[6]と述べられてをる。

ウェーンの社會學及び國家學者ハンス・ケルゼン[7]は國家概念の究明に當り社會統體の固有の存在的性質を明かにせんとした。此の場合、統體に就いて昔有機體論者とその批判的反對論者間に論爭された同じ問題が再び繰返さ

③ Max Weber, Wirtschaft und Gesellschaft (Gruudriss der Sozialökonomik, 3. Abt.) 1922.　④ Verstehende Soziologie.
⑤ Abläufe und Zusammenhänge.　⑥ Ebenda. S. 6.　⑦ Hans Kelsen, Der soziologische und der juristische Staatsbegriff, 1922.

れてをる。即ち社會的 Verbände 又は Einheit は之が統體又は有機體と名付けられると否とを問はず、自然的現實的存在であるとすれば之は實在的[1]であるが具體的本質でなきや否や、或は純然たる觀念的[2]でありやといふ問題である。茲では此の問題に立入ることを避けて彼の社會統體の研究に與へた功績を述べるに止めたい。

彼によれば社會統體といふ場合には、心的要素の相互作用の一般的方面から社會的特定の傾向が社會統體に昇格し社會統體が心的要素の相互作用から生ずるものであると一般に言はれてゐるが、この際、社會統體の概念を社會學に移入するには、必ず心理學より飛躍しなければならぬことを指摘して「吾人の意識に社會的本質、コレクチヴァ[3]として存する表象を多少とも把握せんとする場合に、一切の心理學と兩立しない社會統體の特質に於いて、心理學的社會學に固有な心理學よりの飛躍が表れてをる。[4]」と述べ、從つて社會心理學的の社會學に反對してをる。彼によれば此の種の社會學は心的諸要素の相互作用が恰も波の氷結するが如く凝結して超個人的の社會統體をなし、統體は之を構成する各要素に上位せる全體であるとなすが、上位全體は單に言葉でいはれてゐるに過ぎないもので、心理的なものは結局個人的であつて、超個人的なものは超心理的でなければならぬと評してをる。故に社會心理學的方法から社會統體の概念は明瞭とならぬものであることになる。併し彼に於ては社會統體の概念に對する體系的說明は充分出來てゐない。

① reale.　② ideele.　③ Kollektiva.　④ Kelsen, a. a. O. § 6. Die sozialen Gebilde, S. 33. f. 黑田覺氏「多元的國家論とウイン法學」（二）法學論叢 25 卷 3 號

（五）ウキーゼの說

社會學者で專ら社會統體の究明に努めた學者はケルン大學のレオポルト・フォン・ウキーゼである。彼の一般社會學[5]は二卷より成り、第一卷は社會過程及び狹義の關係學[6]で、第二卷は統體學[7]である。彼の社會學は後に述べんとする世界經濟社會學の基礎となるから、茲では多少詳細に說明して置きたい。彼によると人々間の關係より生ずる基礎的社會現象は社會過程であつて、社

⑤ Leopold von Wiese, Allgemeine Soziologie. 2 Bände. 1924–29. Wörterbuch der Volkswirtschaft, herausg. von L. Elster, 4. Aufl. Wiese; Soziale Gebilde.
⑥ Beziehungslehre.　⑦ Gebildelehre.

會過程[1]は人々を相互に結合又は分離するかによつて結合過程と分離過程[2]とに分れる。而して社會學は關係を此の結合及び分離の社會過程の程度より考察することを任務とする。そして之が關係學固有の任務である。而して社會過程より社會關係[3]が發生し、之は結合又は分離された存在の狀態であり一時的の狀態である。社會過程はこの狀態より進んで社會統體に結晶する社會統體は社會統體學の對象である。

彼の社會學の方法は社會現象の質的差を量的差に還元して社會關係を量的機械的に考察するにある。故に人々の關係は形而上學的の事象ではなく二つ又は二つ以上の量の相互連絡[4]であつて、之によつて各量は夫〻獨立してゐるが、夫〻變化して個々に Teilweise Übereinstimmung, Gemeinschaft が發生する。之が更に量の結合[5]となれば關係は最も强くなる。但し茲に所謂關係は單に論理的のものではなくして社會關係である。故に關係に現れる量は人間である場合もあれば或は人々間の關係より生ずる Kollektivgebilde であることもある。

① Soziale Prozesse ② Verbindene od. lösende Soziale Przoesse.
③ Soziale Beziehung. ④ Verbindung. ⑤ Vereinigung.

一般に人間の行爲[6]によるかかる關係を社會過程といふ。關係は量間の盛な運動に基いてをり、對象である量はこの場合分子であつて更に原子より成る。今、分子間に力の流、卽ち社會過程が始まると關係が生ずる。此の場合、幾多の分子は全然潰滅せずして原子を遊離し、力の流は分離された原子を他の分子に移し、後者はその古き原子と新原子とを混合して變化し成長する。是に於て諸處に分子のルンペンが發生し統體が發生する。同時に原子を分離された分子は弱くなるから結局力の流に抗し得ずして他の分子卽ち統體に結合す。故に原子の離合集散の過程、卽ち社會過程によつて或は大なる或は小なる統體が生じてこの過程は不斷にして停止する所がない。故に行爲による關係、卽ち社會過程は人々間を分離と結合に導き、之によつて個人の性質を變更せしめる。卽ち個人と他人とに數多の連結が生じ、混合によつて新なる性質が生ずる。故に人々が如何に他人に影響するか、人々は如何に結合するか一個の Einheit たる Kollektiva は如何に個人に反作用をなすか、之に如何なる程

⑥ Handeln.

度があるかゝ社會關係學の問題である。[1] 乍併、人々間の生活は社會過程の寄せては返す磯の波の如く單なる結合的又は分離的事象のみではなく、人間は社會生活を大なる形成に就いて考へることに慣れてをる。茲に社會統體が問題となる。

然らば統體とは何であるか。彼によれば統體の概念は關係の概念と同樣に人々間に固有のものではなく、最も普遍的な思惟の範疇であるから之を定義することは不可能である。何故なら之以上普遍的なものはあり得ないからである。從つて統體の概念は之と對立せるものから判斷しなければならぬ。而して社會統體と對立せるものは社會過程である。後者の場合は單に分離的又は結合的事象に止つて何等の形成なく流れ去るに過ぎないが社會統體は比較的形成された實體的のもの、卽ち社會過程の凝塊[2]である。但し社會過程と同樣に社會的屬性を有すべきことは勿論である。社會統體を實體的と說明することは誤解を招くだらうが、社會過程と對立せしめて說明する

① Wiese, a. a. O. I. S. 3—5, 9.　② Ballungen.

爲に餘儀なくいつたことである。卽ち社會過程の頻數、混合、强化、特に反復の點からして社會統體の本質を說明せんとして實體的といふに過ぎぬ。故に關係學に於ては「多數の相互[3]に結合せる關係が Einheit と認められるとき」に之を社會統體といふ。[4] 故に社會統體は人々間の特定の Distanzierungen の存續的狀態が何等かの形成をなしたるものである。尤も社會統體はウキーゼに於ては單に表象の世界に存するものであつて、意味を以て知覺され得る人間の集合そのものではなく、人々間に存する或る關係の抽象的所產である。[5]

關係學上の社會統體は社會關係以外の要素を包含してゐない。例へば敎會、國家、經濟、階級、藝術、科學の如きは右の意味の社會統體以上のもので、特定の精神的所產であるが、社會學上では單に之を結合又は分離過程の凝結として考察するに過ぎぬ。故に社會統體學に於ては如何なる種類の社會過程が統體に重要であるかゝ問題である。[6]

次に社會統體の分類は關係學的方法によつてなされる。先づ人々の隔の[7]

③ Miteinander verbunden.　④ Wiese, a. a. O. Teil II. S. 18.
⑤ Wiese, a. a. O. Teil I. S. 8.　⑥ Ebenda, I, S. 18—19.
⑦ Distanzverhältnis.

如何によつて、卽ち量的差別によつて社會統體の體系が組織される。尤も人々の隔といつても最大より最小に至る迄各種の段階があり、之等によつて一々統體の分類が出來るものではない。故に茲では統體に於ける個人間の隔を問題とするのではなく、個々人と統體との隔を問題とする。之によると社會統體は（一）マッセ[1]（二）グルッペ[2]（三）アブストラクテ・コレクチヴァ[3]に分類される。マッセは最少の力を有する薄弱なる統體[4]であつて、此の場合、個人のマッセに對する關係が直接マッセの行爲を左右する樣に社會過程が動いてをる。故にマッセは人々の希望に近い性質を有してをる。第二段のグルッペは個人に對し行爲を命ずる組織を有してをる。從つて人々のグルッペに對する關係からいへばマッセよりも隔が大である。第三のアブストラクテ・コレクチヴァは個人より比較的獨立せる超個人的の統體である。之はイデオロギーに立脚し經驗的個人より最も隔のある統體であるから、個人の生死と無關係に存續し得るものである。右の內マッセは存續期間が短く、從つて

① Masse.　② Gruppe.　③ Abstrakte Kollektiva.
④ lockere Gebilde.

容易に他の關係複合體に移り行くが、グルッペは之より長期的存在を有し、アブストラクテ・コレクチヴァは永遠に近き存在である。又抽象の程度、卽ち經驗的個人からの隔からいへばアブストラクテ・コレクチヴァは超個人的で最大の抽象化[5]であり、マッセは最少の抽象化である。

社會統體はこの外、種々の標準から夫々に二分類される。（一）loses Beziehungsgebilde : organisiertes Gebilde（二）Vorübergehendes Gebilde : verhältnismässig dauerndes Gebilde（三）natürliches Gebilde : künstliches Gebilde（四）normiertes Gebilde : Wahlgebilde（五）positiv-u. nagativ bezeichnetes Gebilde となる。茲では Das lose Beziehungsgebilde と organisiertes Gebilde に就いて述べる。前者は人々間又は人々のグルッペ間に於ける關係の交錯であつて、鞏固な秩序を有しない。之は單に關係の網に過ぎない。卽ちハルムスの所謂ゲフーゲ[6]である。此は或はマッセであることもあれば、或はマッセとグルッペとの中間の形態のものであることもある。然るに後者は統體の目的に相當する職能が其の成員（個人又は個人のグルッペ）

⑤ Wiese, a. a. O. Teil II. S. 20—22.　⑥ Gefüge.

に分擔された統體である。[1]

上來によつて考へるとウヰーゼの社會學は量的方法に基くと稱されてゐたが、同時に社會統體論に於ては形式的範疇をも含んでゐるものであると評さねばならぬ。

既述の所は要するに主として社會學より考察せる社會統體の概念であつて、シェフレー、メンガー、グンプロウヰッツ、ラッツェンホーファー、マイヤー、テニエス、アイスラー、ジンメル、ウェーバー、ゲルゼン、さてはウヰーゼの諸說を掲げて說明したものである。而して之等の諸說の內で最も系統的に社會統體概念を說明せるものはウヰーゼであることは自ら納得されよう。然らばウヰーゼの社會統體說から如何に世界經濟を說明するかは別の章に讓り、次に經濟學上より考察せる社會統體概念の說明に移る。

① Wiese, a. a. O. Teil II. S. 49 f.　ウヰーゼの社會統體に關する詳細は Wiese, Ebenda, Teil II, Kapitel I. II. Teil I, Kapitel I. 岩井龍海氏「ウヰーゼ關係學」精神科學1卷1號、波多野鼎氏「ウヰーゼ關係學綱要」社會科學1卷5號。

第八章　シュパンの社會統體概念

(一)　總說

ウヰーン大學の社會學者及び經濟學者オットマール・シュパン[2]は社會學のみならず經濟學に於て統體概念を根本とせる代表的學者である。彼は統體といふ代りにこれを屢、部分全體[3]と稱してをるが、部分全體も統體も彼に於ては同一概念である。而して彼は統體の用語を自然科學的用語から採入れたことは明かである。彼はロマンチーク學派に立脚し個人主義的方法を排して具體的普遍主義[4]の方法によつて社會、國家、經濟學を建設した。具體的普遍主義の方法は特定の哲學の方法である全體と部分との關係、目的と手段との關係を社會、國家、經濟に就いて認識せんとする方法であつて、社會、國家、經濟は

② Othmar Spann.　③ Ganze, Ganzheit.
④ Universalismus.

何れも全體として考察されてをる。之はアダム・ミュラー[1]の思想を發展せしめたものであるといつてをる。

彼は先ず範疇論[2]に於て社會現象の階段を次の如く分類してをる。（一）總全體[3]、例へば社會、人間の有機體（二）部分全體[4]、即ち最上位統體、例へば國家、國民經濟、神經系統（三）中間全體[5]、即ち下位統體、例へば大臣、工場、心藏（四）部分[6]、即ち基本統體又は基本部分、例へば國民、經濟者、神經細胞となしてをる。茲では彼の社會及び國家論を措いて、經濟論の考察に限定して全體、即ち社會統體としての彼の經濟概念を考察する。而して經濟學上の概念としての統體は「國民經濟學の基礎」[7]に於て系統的に詳細に說明されてをる。

（二）經濟の概念

右の範疇論の示す如く社會は總全體で經濟は部分全體である。社會の一切の部分全體は唯一の例外を除き自己目的を有してをる。宗教、藝術、倫理、科學等は總て固有の自己目的を有してをる。然るに經濟は自己目的を有してゐない唯一の例外であつて、即ち經濟は社會の手段の體系、全體である。茲に所謂手段は形式的手段で目的に關係せしめる觀點[8]より見たる手段である。故に機械的手段ではない。手段が目的に關係し妥當する以上手段は目的の爲に手段の體系をなしてをる。此の場合に各手段は別々に目的に關係せずして部分全體を形成して目的に妥當する。而してこの手段の全體、即ち手段の體系が經濟である。此の意味に於て經濟は全體（部分全體）であり、各手段は部分である。[9]

一般に一切の部分が部分であり得るのは全體の部分[10]であるからであつて從つて全體性の概念[11]が此の場合に重要である。個人、財、機械、原料、土地等の部分が經濟なる全體の部分であることによつて、之等は始めて經濟事實、經濟現象となる。即ち之等の各部分が全體に包攝[12]されて始めて經濟現象となる。而して部分が全體に包攝されるには常に各部分が全體の爲に何等かの貢獻[13]

① Adam Müller Elemente der Staatskunst.　② Spann, Kategorienlehre, 1924, S. 124.　③ Das Gesamtganze.
④ Die Teilganzen od. Gebilde höchster Ordnung.
⑤ Die Zwischenganzen od. Gebilde niederer Ordnung.
⑥ Die Glieder, od. Grundgebilde od. Grundglieder.

⑦ Othmar Spann, Fundament der Volkswirtschaftslehre 4. Auflage. 1929.　⑧ Zweckbezogenheit.　⑨ Wirtschaft ist ein System (Inbegriff) von Mitteln für Ziele, Ebenda, S. 25, Tote und Lebendige Wissenschaft, 3 Auflage, S. 18.
⑩ Glieder.　⑪ Gliedhaftigkeit.　⑫ das Enthaltensein im Ganzen, Teilnahme am Ganzen.　⑬ Leistung.

をなすことを要するから、貢献が經濟の根本現象である。同時に部分が全體に包攝されるには全體が部分を形成[1]しなければならぬ。この場合、各部分が如何なる固有の性質を有するかは問題ではない。併し全體それ自體は決して現れるものでないことは夙にアリストテレス並にウバニシャットの哲學によつて明かであるから、全體自體を把へることは出來ないが、全體は部分を形成し、部分に普遍性[2]を以て現れ得る能力を附與する。換言すれば全體の内に於て各部分に夫、貢献をなさしめる能力を與へてをる。この根本現象を普遍體系[3]と稱す。而して普遍體系を與へる媒介、即ちこの爲に使用される各貢献及び財を上位資本[4]といふ。例へば建築法は一切の建築に普遍體系を與へ之が一切の建築體系を形成する。市場法、市場慣習、商法、手形法、經濟道德は市場に於ける一切の經濟行爲に普遍體系を與へて經濟行爲を形成し、包攝して各部分に全體性を與へることになる。そして之等建築法、市場法、商法、關税、通商條約、一切の統濟政策的手段、貨幣制度、經濟道德等は上位資本である。併し

① Gestalten　② Gemeinsamkeit.　③ Gemeinsamkeitsreife.
④ Kapital höherer Ordnung.　⑤ Spann, Tote und Lebendige Wissenschaft, 3. Auflage, S. 15 ff, Ders, Fundament der Volkswirtschaftslehre, I. Buch, 1. Abschnitt. Ders, Individualistische u. universalistische Volkswirtschaftslehre, Nationalwirtschaft, I.

之は法規であるが爲に上位資本であるのではなく、部分に對し普遍體系を與へる所の經濟的手段である。故に法規も此の場合、經濟の部分であつて、而も最重要な部分である。故に上位資本が法律、習俗の形態で一切の交通を全體性を有する部分に形成し、之に普遍體系を與へて始めて交通が可能となる。從つて上位資本なくして如何なる交通も可能とはならない。[15]

一般に普遍體系は經濟に於ける一切の部分全體の先位[16]をなし論理的基礎となるものである。即ち普遍體系は先驅體系[7]、例へば發明及發明の改良の先位であり、先驅體系は實行體系[8]、例へば市場、銀行の先位であり、實行體系の内で市場體系[9]は生産體系[10]の先位であり、市場體系の内で貨幣市場體系は商品市場體系の先位である。而して普遍體系は此等一切の經濟の部分全體の先位である。[17]

要するに人間の一切の行爲及び物が經濟現象として認識されるには此等の部分が全體に對する貢献によつて全體に包攝され、之には全體が上位資本

⑥ Vorrang.　⑦ Vorreife.
⑧ Hervorbringungsreife.　⑨ Marktreife.　⑩ Werkreife.
⑪ Spann, Fundament der Volkswirtschaftslehre, 4. Auflage, 1929, I. Buch IV. Abschnitt. Ders, Tote un Lebendige Wissenschaft, Die Ausgliederungsordnung der Wirtschaft und ihre Vorrangverhältnisse. S. 81 ff.

の媒介によつて之等部分に普遍體系を與へ、全體性を有する部分に形成することを必要とする。是に於て經濟の部分である手段が經濟なる全體に形成され、各手段が夫々固有の方法で全體に貢献し手段の體系卽ち貢献(ライスヅング)の體系(全體)としての經濟が成立する。

シュパンは手段の貢献を四種に分け(一)直接貢献(二)資本貢献(三)消極的資本貢献(四)上位資本貢献となしてをる。直接資本貢献とは手段の直接目的達成の爲になす貢献、例へば財の使用及び消費であり、資本貢献とは間接貢献であつて自ら直接目的に貢献しないが、間接に而も積極的に目的に貢献するもので、例へば機械の製造である。消極的資本貢献は間接に消極的に生産に貢献するもので、例へば保險、堤防である。而して上位資本貢献[1]は一切の手段を全體に形成する貢献であり、經濟成立の不可缺の條件である。

上位資本貢献は第一の直接貢献、第二の資本貢献並に第三の消極的資本貢献の基礎又は一般條件をなす貢献である。卽ち此の種の貢献は先の三種の

① Kapitalleistung höherer Ordnung.

貢献を積極的に干渉的に助長するから資本貢献と同一の貢献をなすものである。故に前者を第一位資本貢献とすれば後者を第二位資本貢献[2]といふ。又後者は固有の資本の根本的補助手段であるから之を上位資本貢献といふ。卽ち上位資本の貢献は一切の經濟の原動力に干渉し一切を組織する貢献をなしてをる。而してシュパンは上位資本の貢献を三種に分け(一)分業(二)經營の指導機關の職能(三)國家、公共團體、經濟聯結の組織的職能となしてをる。一般に上位資本は一切の人間の經濟的協働に不可缺の基本手段であつて、上位資本なくして如何なる經濟も成立することが不可能である。故に一切の道具の道具であり、一切の行爲の補助である。之は總ての者が總ての者に貢献する基本手段である。而して第三種の上位資本の主體は國家、公共團體で上位資本に對する利子は租稅である。國家の貢献が上位資本であるのは法概念に基くものではなく、國家の貢献は此の場合、經濟手段である。總てのものが總てのものに貢献せしめる經濟手段であり、一切を形成組織するこ

② Kapitalleistung Zweiter Ordnung.

とを助長する貢献をなしてをる。そして上位資本のこの組織的貢献が普遍體系である。[1]

(三)　統體の概念及び分類

シュパンは以上の各手段又は貢献が部分として相互に補充しつつ一個のオルガンなる部分全體をなすときに之を統體と稱してをる。故に統體は貢献又は行爲の部分全體である。[2]統體なる文字は「國民經濟學の基礎」に於て屢〻使用されてをるが、之と同一概念である部分全體は「死せる學問及び生ける學問」に於て盛に使用されてをる。一般に一切の部分、卽ち貢献は統體に於てのみ考へられ、統體を離れては意義を有しないことは旣述によつて明かである。[3]而して統體は夫〻貢献により又は貢献を荷ふ要素、卽ち行爲及び財によつて獨特の構造を有してをる。シュパンは之を統體の構造[4]といふ。統體の構造はその貢献の內容及び種類によつて識別されるのではなく、形式[5]によつて分類

① Spann, Fundament der Volkswirtschaftslehre, 4. Auflage, 1929. I. Buch, III. Abschnitt, § 10. Die Ausgliederung, S. 95—109.
② Ebenda, S. 116.　③ Ebenda. S. 118.　④ Gefüge od, Struktur, Ebenda, S. 118.　⑤ Gestalt, formaler Aufbau.

される。而して一切の部分が相互に調子よく合はしてゐるか否かゞ統體構造の形式的法則[6]である。シュパンは之を統體の諧和[7]と云ふ。一切の構成部分の諧和は統體の構造及び統體の總建設を決定する。諧和は、一切の貢献が同一目的に役立つこと及び統體の部分が相互に補充をなして意味と實在を得ることによつて成立する。故に諧和は各手段の妥當的Gliederungである。要するに諧和は統體の一般的建設法則[8]であつて、之は機械に於ける均衡に相當する。統體が統體として成立するや否やは一にこの諧和の法則によるものである。[9]

シュパンによれば統體は生命を有してゐる。統體の生命は統體に組織された貢献のAblaufである。貢献のアブラウフは總て反復をなしてをる。貢献の反復の生ずる理由は常に新たに目的に妥當せんとするにある。そして之によつて經濟が常に生成する。故に經濟は周期的に反復される經濟である。之をクライスラウフ[10]といひ、之が統體の生命であり、經濟の生命法則[11]であ

⑥ Das formalle Gesetz des Gefüges. ⑦ Entsprechung. ⑧ das allgemeine Baugesetz des Gebildes od. die Kategorie des Gefüges der Leistung. ⑨ Spann, Fundament, Die Gestaltenlehre der Leistung, S. 115—121. ⑩ Kreislauf. ⑪ Lebensgesetz.

り、經濟的事象の範疇である。[1]

シュパンは統體を各個の經濟又は多數の經濟の協働によつて成立するや否やによつて二種に大別し、前者を單根統體[2]といひ、後者を多根統體[3]又は交通經濟統體と稱してをる。前者は假想的なロビンソンの經濟及び封鎖家族經濟並に自己經濟の私經濟に成立せる統體である。後者は多數の經濟單位の協力卽ち交通經濟の形成する統體で、交換はその典型である。要するに一切の手段が各個の經濟より發生する單根統體に組織されるか、又は數多の經濟交通より發生する多根統體に組織されるかが、經濟の形態學的根本事實である。

單根統體には同一の最終目的に對して一切の行爲及び財が貢献の組織をなしてゐる。卽ち等しき且つ比較的獨立の目的を中心とする一切の行爲及び財の貢献の體系である。故に極端な例はロビンソンの經濟及び封鎖的自己經濟であるが、事實單根統體がかく絕對的に獨立せる統體となることはなく、比較的獨立せる[4]統體である。但し同一の目的に役立つ貢献の統體である。[5]

先に述べたるが如く單根統體は同一の目的に對して各貢献の組織せる體系である。而して統體は更に一個の總統體に結合して總統體の部分統體をなしてゐる。卽ち二個又は二個以上の統體が相互に補充しつつ協働するとき一個の新なる上位全體の部分全體となる。茲に統體の階段、卽ち上位統體[6]及び下位統體が成立する。上位統體、卽ち多根統體は單根統體と本質的に異るものである。而して交通經濟統體を促す根本形式は交換である。交換、卽ち物々交換及び賣買は商品を授受する兩行爲が單に偶然に並行するのではなく、各行爲は相互性[7]に基き、互に外部の行爲を前提としてをる。故に兩行爲が相互に交錯[8]して交換の部分をなしてをる。交換に於ける各個經濟が分業的に相互に營まれてゐることは、交換の本質たる相互性に基くものであつて相互性は偶發的の物々交換の場合でも常に存してをる。要するに交換は上位統體の形式であり、各交換行爲はその部分である。

① Spann, a. a. O. S. 123—126.
② Die einwurzelige Gebilde, od. monogenetische Gebilde.
③ Die vielwurzelige od., polygenetische od., kongregale od., verkehrswirtschaftliche Gebilde.
④ verhältnismässig geschlossene
⑤ Spann, a. a. O. S. 116—118.
⑥ Gebilde höherer Ordnung.
⑦ Gegenseitigkeit.
⑧ Ineinander.

もとより上位統體は主體より見れば單根統體と同樣に統一的に成立せる貢献の體系ではなく、二個の單根統體が形式的に組織[1]せるものである。併し客觀的に見れば特定の組織的秩序[2]に則つて成立せる貢献の階段建設[3]であつて、之が世界經濟より國民經濟、ツンフト、經營、經營成員、家政、家族の成員の段階をなしてをる。そして各個經濟者はGliederbauの參加者であるに過ぎない。

然らば上位統體の一般的建設法則は如何。單根統體に於ては同一の目的の達成の爲に各貢献が必然的に相互に補充して諸和が成立してをるが、上位統體に於ては各行爲はかかる共通の目的[4]の爲に結合してゐるものではない。何故なら統體に於て固有の目的を有してゐないからである。故に例へば世界市場の來訪者は世界經濟の爲に交換してゐるのではない。併し後者の場合でも、各行爲は豫め調子を合されてゐて諸和がある。之は多根統體の事實上の建設計劃から生じたもので、之を上位諸和[5]と稱することが出來る。而して手段卽ち貢献の相互的交換は上位統體の建設を示し、各個經濟の內部的建

① Ausgliederung.
② Ausgliederungsordnung.
③ Stufenbau.
④ Gemeinsames Zeil.
⑤ Entsprechung höherer Ordnung.

造と生活力の條件である。故に上位統體は各個經濟にし優位を占め、後者は前者の下位全體又は部分[6]となる。故に上位統體は機械的に單純統體より組合されてゐるのではなく、ausgliedern してをる。要するに交通經濟の統體には嚴格なる統一性を有しないことは明かである。唯、二個の單根的目的が特定の目的に、全體の部分として組織されausgliedertされてをる所にEinheitがある。單根統體はその內部的目的に對して各の貢献に統一性[7]を有してゐるが多根統體は間接的方法で內部的相互性によつて統一性を有してをる。この相互性が統一點であり、二個の目的を下位オルガンとして包攝する全體である。故に上位統體は直接的でなく間接的Einheitであり、上位的間接的秩序を有するから單純統體に先位を占めてをる。[8]

かくの如く貢献の交換によつて上位統體が建設されるときは之に參加する單根統體の內部的改造を必然的に發生せしめ、之をその部分及びオルガンとなさんとするに至るものである。上位統體が單根統體、卽ち各個經濟を部

⑥ Glied.
⑦ Einheitsbezug.
⑧ Spann. Fundament, S. 127—131.

分として包攝すれば、後者はその內容及び建設計劃を變更しなければならぬ。故に貢献の交換は單根統體に形式附與的條件[1]となり、之に上位の組織的補助が加はつてくる。要するに上位全體は下位全體の條件である。[2]

先に述べた樣に上位統體に於ては單根統體の場合の如く、行爲及び財は自己固有の貢献を爲すことが出來ず、之は其行爲の志す目的がないことから生じてをる。何れの交換者も自己の目的を有して之に(主觀的に)貢献せんとするが、交換それ自體の爲に貢献せんとしないものである。併し各人の行爲は貢献の交換によつて他の經濟に影響を與へることは確であつて、此の影響を侵害的貢献[3]と稱することが出來る。而して之が上位統體に於ける貢献である。かくして上位統體は更に最上位統體の國民及び世界經濟に進むものである。然らば上位統體自體の貢献、換言すれば上位貢献[4]は如何。今、甲が乙より乙が甲より何等かの物を買つたとする。此の場合、貢献の交換によつて相互に貢献してゐるのであつて此處に發生する多根統體は何人にも貢献してゐない。故にそれ自體何等の使命を有してゐない。換言すれば多根統體はそれ自體何等の志す貢献を有しないで、唯所定の Gliedhaftigkeit なるものを經濟の階段建設に有してゐるのである。而して上位貢献は正に此のグリード・ハフチヒ・カイトに存してをる。故に貢献を分類して(一)單根統體に於ける部分の貢献と(二)その貢献がその統體を通じて對立せる統體に對する貢献即ち侵害的貢献と(三)上位全體一般の領域內の貢献、即ち多根統體自體の貢献、上位貢献と識別することが出來る。

今、上位貢献の例を示すと、國民經濟は世界經濟の部分として、ツンフトは國民經濟の部分として、經營は產業部門の部分としての貢献をなしてをる。更に取引所をみるに之は上位貢献をなしてをる。何故ならそれは大市場であり、國民經濟の價格の統一者であるからである。併し如何なる商人と雖ども取引所に行くのは國民經濟の爲に統一的價格を造らんと志して行くのではゐない。故に人は此の上位貢献を一切の取引の意志せざる結果であると稱

① Formgebende Bedingung.
② Spann, a. a. O. S. 132.
③ übergreifende Leistung.
④ Leistungen höherer Ordnung.

する。如何にもこの點に就いてはその通りであるが、茲に看過され得ない他の點は、此の商人は自己の行爲の前提を經濟のGliederbauより得てをるといふことである。故に右の統一的價格といふ結果は決して偶然の結果ではなく之は上位全體より生じたものである。要するに上位貢献は固有の結合をなすことで、即ち統體をその上位の統體に、そして終に國民及び世界經濟に總括する所の結合である。而して上位貢献のかかる階段建設的な總括的Gliederung を上位諧和[1]と稱する。茲に經濟の總全體の包攝的[2]秩序が確立するに至るものである。[3]

(四) 社會經濟の統一的契機

抑も社會經濟が論理的に統體として成立するにはシュパンは四つの統一的契機[4]を擧げてをる。(一)自由經濟交通 (二)共通の上位資本 (三)共通目的 (四)統制經濟又は共産主義である。而して之等の四つの契機の内少くとも

① Entsprechung höherer Ordnung.
② Ausgliederungsordnung des Gesamtganzen.
③ Spann, Fundament S. 133—34.
④ Einheitsmomente.

三つを兼ね備へたものは國民經濟である。

第一に自由經濟交通の契機を考察するに、先に交通經濟統體に就いて述べた樣に交通經濟は無秩序な交換行爲の集合ではなく、全體の現象形態である。即ち各個經濟の相互的補充的結合として經濟統體を形成してをる。但し之には上位資本を前提としなければならぬ。交通經濟統體には自由競爭が前提であり、自由競爭は比較的統一的價格の形成及び之に立脚せる分業を通じて交通經濟の統一的原動力[5]をなしてをる。之によつて交通經濟は始めて社會經濟[6]となる。そして交通經濟的結合の地理的範圍は運賃及び其他の商業的費用と商品價格との關係によつて定まることになる。故に各種生産物及び商業の交通網は種々樣々に分れ、各種生産物に就いて交通經濟は各樣の交通範圍を形成してをる。但し交通經濟は決して有機體の如き組織ではなく既述の如く特殊の方法によつて一切の經濟が結合して一個の經濟統體をなせるものである。而し世界交通は正に交通經濟統體であつて、國民經濟は交

⑤ Vereinheitlichende Kraft.
⑥ Gesellschaftliche Wirtschaft, Soziale Wirtschaft.

通經濟の概念には存する餘地を有してゐない。要するに交通經濟統體は社會經濟的全體であり、この統一を促進せしめるものは自由競爭である。[1]

第二は上位資本が社會經濟に統一を與へる理由は上位資本に就いて既に述べた所である。自由競爭に基く交通經濟は必ず上位資本を前提としなければならぬ。上位資本は全國民一般の共通の手段であり、一切の國民は上位資本の各手段を使用することが出來る。國家、公共團體の提供する固有の經濟手段は國家、公共團體の成員に限つて使用され、然らざる者にはその利用は許されない。上位資本が普遍體系を以て國家の成員の一切の交通經濟的行爲を固有の統體に組織して經濟的に自由に交通する交通經濟單位を獨立せしめてをる。即ち法律、關稅、市場法、經濟政策、通商條約等は總て一切の經濟手段を固有の普遍體系に組織し、夫、固有の上位資本が國民經濟又は世界經濟、地方經濟を夫、交通經濟より獨立して形成せしめてをる。一般に上位資本は綜合機關であり、國家、公共團體は國民經濟の組織的機關である。國家の組織的

① Spann, a. a. O., S. 158—162.

貢獻なくして國民經濟の成立は不可能である。即ち上位資本によつて交通經濟が更に國民經濟の形態に具體化するものである。

是に於て交通經濟統體は上位資本に立脚して動くことになる。國民經濟の比較的統一的價格形成が自由競爭に基くといふことは何等論理的第一現象ではなく、上位資本があつて始めて國民經濟の比較的統一的價格が成立し之が經濟の Gliederbau 特に國家的分業を規定する。そしてその上に國民經濟を通商條約と關稅とによつて對外的に保護し保持することになる。固より自由貿易論のいふ如く關稅によつて始めて國民經濟固有の有機體が成立するのではなく、國民經濟固有の上位資本が他の國民經濟の經濟手段より特立せしめる程度に應じて、國民經濟が確定するに至るものである。故に國民經濟が眞の國民經濟である以上は必然的に固有の價格を形成し得るものである。戰前に於て各國民經濟に幾多の價格平準の相違があつたことは、純然たる交通理論のみで說明することは不可能である。之は全く上位資本の効果

である。故に從來歴史及び事實の示す國民經濟の統體を上位資本の組織力を無視して説明せんとしたことは大なる誤である。國民經濟が夫〻異る個別性を以て確立することは、全くその上位資本が國民經濟成立の產婆役をなすからである。但し上位資本を國家其物と解することは誤である。國家は政治的法的概念であつて、上位資本はかかる意味の國家ではない。上位資本は國家の國民經濟に於ける經濟形態であり經濟手段である。[1]

第三の共通目的、卽ち目的結合[2]の契機を考察するに、之は目的のEinheitによる手段の體系のEinheitである。交通經濟が上位資本によつて國民經濟統體となる以外に、國民經濟はその成員の共通目的、卽ち社會及び生活の精神的共通性によつて統體の精神的基礎が與へられてをる。共通の目的を有する經濟をシュパンはVölkische Wirtschaftといふ。一般に經濟の成員が共通の目的を有することは交通經濟的結合の不可缺の前提である。共通の目的は國民經濟の個性と統體を一層鞏固ならしめる。これは共通の歴史と共通の民族

① Spann, Fundament, S. 156—158, 160—162.
② Zielverbundenheit, Gemeinsamkeit, Die Einheit des Systems der Mittel durch die Einheit der Ziele.

文化並に生活より發展したるものであつて、之に基いて個人の目的の等しいことが交通經濟に夫〻固有の區劃を識別せしめ、獨立の經濟を確立せしめる。之を假想の例にとると、月世界の人間が數多地球に天降つて來たとする。この人間が地球上の人間と全然異る固有の目的を有するときは之等の人間は地球上で完全に封鎖的經濟を構成することになる。何故なら地球上の人間はと彼等とは目的が全然異り相互にその產物を欲しないから交換又は賣買は始より成立し得ないものである。此の假想的の例は地球上の人間の經濟單位間にもその儘當嵌めることが出來る。例へば煙草を生產するものが物々交換をしようとするときは、喫煙者とのみ交換しなければならぬ。非喫煙者との交換は絶望である。卽ち兩交換の當事者間に共通の目的があることが交通經濟の前提である。之は物々交換のみならず貨幣を媒介とする場合でも同じ理である。要するに經濟行爲の目的の等しい程度に應じて、一切の交通經濟が目的上結合せる經濟となる。

一般に交通經濟は共通の目的と分業に立脚して成立してをる。國民經濟及び世界經濟内の交通經濟は何れも共通の目的によつて成立してをる。故に共通の目的を有する商品に就いて交通經濟が成立する。例へば世界交通經濟は鐵、金屬、皮革、穀物、砂糖、其他の食料品、植民地産物、化學製品等の世界經濟に共通の目的を有する基本商品に就いて成立する。之に反し製造品は世界經濟的に共通の目的を有すること前者の如くでないから、前者と異る交通經濟を劃してをる。一般に交通經濟の内容は國民經濟、否地方經濟に於て豐富であり、世界經濟に於て貧弱である。之は共通の目的が夫、國有の交通經濟を劃するからである。[1]

最後に總體的組織及び計劃經濟[2]を考察するに、之は上位資本と共通目的とが統一的指揮の下に作用する交通經濟者の結合である。此の場合、一切の經濟者の上位全體は單純なる經營統體[3]をなしてをる。故にその成員、各個經濟者は比較的の有機體ではなく、絶對的の有機體の成員である。即ちこの有機

① Spann, Tote und Lebendige Wissenschaft, S. 368–71, Ders, Fundament S. 162—165.　② Gesamtorganisation u. Planwirtschaft, Gesamtwirtschaft od. Gemeinwirtschaft.
③ Betriebseinheit.

體は總經營[4]となり、各個經濟者は經營部分[5]となり、交通經濟單位が經營單位に化してをる。併し、廣汎に亘る完全な共通目的を實現することは事實上不可能であり、之は共産主義のユトピアを曝露するに過ぎない。彼の封鎖的家族經濟、カルテル、産業組合、一切の經濟聯結はその成員を統一的に指揮する限り狹き範圍に於て各個經濟を有機體の成員となしてをる。即ち上位階段の指揮者を有する單根統體である。此の場合總ての經濟者に共通の目的があり之によつて總ての行爲及び財が一個の統一的計劃に貢献をなしてをる。[6]

要之、上來の四つの經濟形態の内で、第一及び四(交通經濟及び共産主義)はユトピアであり、目的の共通性と上位資本による Völkische の經濟は歴史的に如實に現れてをるものである。

以上によつてシュパンの具體的普遍主義の方法による統體としての經濟概念が明かになつた。之によつて經濟が社會經濟であること、換言すれば社會統體であらねばならぬことは明かであつて、社會統體を離れて經濟は成立

④ Gesamtbetrieb.　⑤ Teilbetrieb.
⑥ Spann, Fundament, S. 165—166, Ders, Tote und Lebendige Wissenschaft. S. 371—378.

しないものである。故にシュパンに於ては此の統體概念が經濟概念の基礎となつてをる。シュパンの社會經濟統體に對する批判並に社會經濟統體としての世界經濟の概念は後に讓り、更にゴットルの社會統體に關する學說の考察に移つて行きたい。

第九章　ゴットル及びハルムスの社會統體概念

(一)　ゴットルの統體概念

伯林大學の理論經濟學者ゴットル・オット・リニエンフェルド教授[1]は經濟學上社會統體の研究に深甚の貢獻をなし、恐らく彼の研究は斯界の最も深淵なるものといふことが出來る。彼の著作 Wirtschaft als Leben, Bedarf und Deckung, Wirtschaft und Wissenschaft の內で、最後のものが最も系統的に彼の立場より社會統體を說明してをる。彼に於ては從來の社會統體研究者の如く、工場、大學の如き經驗的對象がその對象的存在によつて自然の具體的統體と類似するや否やは問題ではない。彼は人生界[2]のものを自然界のものと同樣に機械的に

① Fr. von Gottl-ottlinienfeld.　② Schicksalswelt.

考察して之を統體と爲すことには全然反對し、兩者は根本的に異るものと考へて、人生界の如實の生活[1]の特殊な構造と形成に着想して統體を考察してゐる。

彼によれば人生界に於ける生活的[2]とは內部より活動して存續と確保に努める能動的Einheit[3]である。そして之が一般生活的なものの根本思想であり人生科學[4]の對象である。即ち社會的考察の對象は人間の意慾[5]より生ずる體驗的事象(行爲)[6]であつて、この體驗的事象の反覆[7]を歷史家の如く單に河川に於ける水の流れ去るものと考察しないで、河川を形成するもの、深甚の意味ある全體[8]即ち生活を形成[9]するものと考察する。故に之は機械的考察でもなく、又粗雜な形而上學的考察でもなく、ディルタイ[10]の哲學に近き統體的思惟[11]の方法である。

即ち人生界にて於は體驗的事象は特定のグリーデルング[12]に於て反復し、グリーデルングが反復を保證して狀態的統體[13]が形成される。而して生活の形成とは深甚の意味ある全體[14]への形態創造であり、そして統體とは統體內部より働いて自ら常に統體を確保せんとする能動的Einheitで常に自らその周圍世界に順應するものである。統體が能動的Einheitであつて存續性を有することは生活的なもの一般の根本思想である。故に統體の形成は右の意味に於ける反復する事象が存續と確保に秩序付けられることであり[15]事象の存續[16]とEinheitの確保[17]とが統體形成の根本である。而して形成は不斷の統體の努力であり、形成的努力が停止するときは統體は滅亡するに至るものである。要するに統體とは吾人を圍繞する體驗的生活のEinheitであつて、生活創造の秩序であり、存續と確保の秩序であり、目的的努力の意味に於ける能動であり Einheit の創造である。[18]

(二)　社會統體と經濟統體

人間協同生活を統體として考察した場合に之を社會統體といふ。家族、國

① Lebenswirklichkeit.　② Das Lebende　③ Wirkende Einheit von innerlich erarbeiteten Bestand.　④ Schicksalswissenschaft.（彼は文化科學の名稱を排して人生科學と謂ふ。）
⑤ Wollen.　⑥ erlebtes Geschehen.　⑦ Wiederkehr
⑧ sinnvolle Ganze.　⑨ Gestaltung zu Lehen.

⑩ Wilhelm Dilthey. Die Geistige Welt, Einleitung in die Philosophie des Lebens, Diltheys Gesammelte Schriften, V. Bd. 1924. 勝部謙造教授譯 ディルタイ著「哲學の本質」　⑪ Das Denken im Gebilde.　⑫ Gliederung.　⑬ Zustandgebilde.
⑭ Formgebung zu einem sinnvollen Ganzen.
⑮ Zusammenordnung erlebtes Geschehen zu Dauer und Bestand.
⑯ Dauer.　⑰ Einheit von Bestand.

家、民族、經濟は何れも社會統體である。固より社會統體は不斷の形成であつて決して固定せるものではなく、常に體驗的事象を存續と確保に秩序付けてをる。

先に述べた樣に人間協同生活はその形成の精神の異るによつて（一）和合社會（二）權力社會（三）經濟社會と大別されるが、茲では社會統體として經濟のみを問題とする。ゴットルはシュバンと等しく社會經濟學に統體概念を根本とし經濟を社會統體と考察する典型的學者である。併しゴットルの學說はシュバン及びシュバンの所謂個人主義經濟理論と異り、經濟にレーベンを認識し、經濟をライスヅングとなす學說を誤りとはいはぬが幼稚な說と嘲笑してをる。加之彼はシュバンの如く過度にロマンチークの形而上學に走らず、ディルタイの哲學の如く人間生活の體驗に重點を置いて彼の恩師カール・クニース[1]の經濟學を發展せしめたものであると自ら稱してをる。

さて社會統體の內で慾要と充足との不斷の調和的精神を以て形成確立するものは之を經濟統體[2]と稱す。家政、財政、國民經濟、世界經濟が之に屬す。卽ち經濟統體は生活難に對し人間協同生活の存續と確保とを保證せんとする。此の外に、社會統體として現代經濟生活上重要なる目的統體[3]として企業がある。企業は慾要充足の精神、卽ち經濟の概念を實現するものではなくして營利を目標としてをる。故に經濟統體ではなく之を營利統體[4]といふ。企業は營利の繼續的獲得への形成である。然し企業の確立方法と經濟の確立方法とは根本的に一致してをる。何故なら現代企業は慾要と充足との關係に依存して經濟の爲の統體であり、例へば國民經濟の建設に貢獻する目的統體である。[18]

經濟統體には經濟者[6]がある。經濟者は統體に必要な慾要を處理する統體內の地位[7]であつて、經濟を建設し指導する。換言すれば經濟の建設及び指導に關し統體の形成確保を目的とする統體になされる一切の Dienst の統一される地位である。經濟者は統體の代表的主體[8]であつて實際には各個人によ

⑱ Gebilde ist Einheit des erlebtes Lebens um uns; eine Zusammenordnung, erlebtes Geschehen zu Dauer und Bestand, im Sinne von in sich ruhenden, von Einheiten innerlich erarbeitetem Bestand. Gottl, Wirtschaft als Leben, 1925: vom Wirtschaftsleben und seiner Theorie: Haushaltungen und Unternehmen als Formen zur Erkenntnis des Alltäglichen. Ders, Wirtschaft und Wissenschaft, II. Bd., 1931, Gestaltung zum Gebilde.

① Karl Knies.

② Wirtschaftsgebilde. ③ Zweckgebilde. ④ Erwerbsgebilde.

⑤ Gottl, Wirtschaft und Wissenschaft, 2. Bd., Vom Grundproblem der Lehre von der Wirtschaft. Ders, Bedarf und Deckung, I. von Bedarf. II. Vordeckung und Eindeckung des Bedarfes. ⑥ Wirtschafter. ⑦ Stelle. ⑧ Subjekt.

つてこの地位が充實されてをる。之は一人であると數人であると、又職能の分擔されてゐると否とは問題とならぬ。故に經濟者は經濟行爲なる形成的行爲をなす。[1] 家政の場合には之を家政者[2]といひ、財政の場合には財政者[3]といひ、國民經濟の場合には國民經濟者[4]といふ。而して營利統體、卽ち企業の場合にこの地位に相等する者を企業者といふ。

經濟者は先づ如何に經濟を合理的に指導するかを考へる。之を經濟的考慮[5]と稱す。卽ち慾要に對し如何にして之を充足するかの問題を考慮する。故に彼は先づ慾要(統體內の一切の意慾)を個々に見渡してその充足が可能なりやを考へ、次に充足の價値ありと認める慾要を考へてその充足をなす。[6]

然らば經濟者はその形成的行爲、卽ち慾要充足の基礎を何に求めることが出來るか。彼は第一に統體の過去より第二に統體の周圍世界[7]より慾要を充足すべき根據を求めねばならぬ。

經濟者は先づ現在に立脚して活動し將來に向つて建設を進めてゐるが、之と同時にその活動の根據として統體の過去より現在に彼を援助すべき幾多のものが殘されて、經濟者に客體[8]として對立してをる。次に經濟者は周圍世界に面して之も亦經濟者に客體として對立してをる。何れにしても經濟者は統體の過去及び周圍より慾要充足の二大根據を獲得する。茲に經濟者が地位を占める主體と、此の地位から働きかけられる客體とが對立し、主觀と客觀との對立となる。[9]

(三)　經濟統體の周圍世界(生活範圍と生活地)

さて周圍世界は二つに分けることが出來る。一は共同世界[10]で他は外界[11]である。後者は更に二つに分れて大地(地積)世界[12]と精神世界[13]となる。共同世界は人間協同生活の事實であつて、經濟者が形成的に活動する統體外に擴大してをる。卽ち一個の統體がその周圍に幾多の統體と生活上の近隣關係を成してをるが、之が共同世界である。同時に共同世界も亦、統體の周圍に絶へず

① die gestaltende Tat als Wirtschaften (Ebenda I. S. 60)
② Haushalter.　③ Staatswirt.　④ Volkswirt.　⑤ Wirtschaftliche Erwägung.　⑥ Gottl, Bedarf und Deckung S. 4, Ders, Wirtschaft und Wissenschaft, I. Bd. S. 203 ff.　⑦ Umwelt.

⑧ Objekt　⑨ Gottl, Dedarf und Deckung. III. Viererlei Grundlagen der Deckung des Bedarfs.　⑩ Mitwelt.
⑪ Aussenwelt.　⑫ Raumwelt.　⑬ Geistige Welt.

特定の方法で秩序よく形成してをる。[1] 共同世界が統體の周圍に包圍的に形成する統體を周統體[2]といひ、之に形成的に包まれた統體を內統體[3]と稱し、前者と後者とは常に形成的關係をなしてゐる。故に經濟の形成にも上下二つの階段がある。即ち一方に於ては內統體、即ち家政、財政、企業が內面より活動して統體として夫々形成し、他方に於て之等の幾多の統體の協力が調和して一段高き統體即ち周統體を形成する。周統體も勿論一個の統體であるから、その內面より活動して形成確立してをる。地方經濟、國民經濟、世界經濟がこれである。國民經濟は地方經濟を、世界經濟は國民經濟を內統體とする周統體である。一般に共同世界は協同生活に參加する一切の統體に共通のものである。そして經濟學上よりいへば各統體が共同世界の參加者であつて、各個人ではなく、個人は統體を通じて始めて共同世界の參加者となる。[4]

統體が共同世界を形成的に關係付けるときは之を生活範圍[5]といふ。生活範圍は慾要充足に役立つ幾多のものを經濟者即ち統體に提供する。例へば

① 故に共同世界は單に經濟者の地位から受働的な客體ではない。此の點に於て大地世界と全然異つてゐる。
② Umgebilde.　③ Ingebilde.　④ Gottl, Wirtschaft u. Wissenschaft, I. Bd. S. 230—234.　⑤ Lebenskreis.

國民經濟に對してはその生活範圍は外國貿易を可能ならしめ、資本の輸出入移出入民を可能ならしめる。家政に對してはその生活範圍は交換による物資の調達、金錢の貸借を可能ならしめる。一般に生活範圍はその統體に對し慾要充足の最終的可能性を提供して慾要充足の基礎となる。而して生活範圍は非地積的である。[6]

故に周圍世界より共同世界を除去した殘りを體驗的事象の形成より切離して考察すれば外界自然、即ち大地世界(地積世界)[7]となる。統體は元來體驗的事象の統一體であるから、その本質上非地積的[8]である。然し社會統體は斷片的[9]に地積的のものに入り込んでをる。之は統體の附屬物又は經濟者の個人的身體、其他の物體が斷片的に大地に喰入つてをるからである。統體に形成的に關係付けられた大地を生活地[10]といひ、實際上地球の周圍と一致す。

生活地は人間協同生活の基礎で、地上及び地中より慾要充足の最終的可能性を提供する。地中より例へば鑛床が之を提供し、地上よりは(一)統體の在

⑥ Gottl, Bedarf und Deckung, S. 71—73, Ders, Wirtschaft u. Wissenschaft, IV. Vom Lebenskreis.　⑦ Raumwelt.
⑧ unraumlich,　⑨ splitterhaft.　⑩ Lebensraum.

地[1]（二）栽培及び飼育地[2]（三）採取地[3]を提供する。故に生活地は例へば在地として、統體に形成的に關係づけられた一切の體驗的事象の基礎をなす。內統體は特定の所在地（住所）を有し、周統體は幾多の內統體を包括するから地球の表面の大なる部分を取得する。而して國家の生活地、卽ち領土は國民經濟形成の地積的基礎となつて國民經濟の在地となる。故に此の場合は地積的統一が經濟的統一の形成を促進してゐることは明かである。更に世界經濟の在地は全地球の表面である。[4]

以上は統體がその慾要充足の最終的可能性を周圍世界より提供されることを述べた。卽ち慾要充足の基礎は第一が生活範圍、第二が生活地である。

（四）經濟統體の過去（生活根源と生活遺產）

更に慾要充足の基礎は過去に求めることが出來る。卽ち慾要に對する一切の充足の最終的可能性は（一）Gruppe（二）Welt der Werke に求められる。

① Standraum.　② Zuchtraum.　③ Fundraum.
④ Gottl: Bedarf und Deckung, S. 72. V. Vom Lebensraum: Ders, Wirtschaft und Wissenschaft. I. Bd. S. 234—241.

先づ過去は統體の重要な附屬である Gruppe に存してをる。所謂グルッペとは統體の人的結合であつて統體の重要な附屬[5]として之に結付いてをる。統體はグルッペによつて常に鞏固となり常に存續と確保が保證される。故にグルッペは特に統體に甚深の意味を有してをる。蓋し人間生活はグルッペを通して統體に入り込み、グルッペが個人又はその一團の生死消長に對して常に人間を補充してその養育的方法によつて統體の存續を保證するからである。若し統體に於てグルッペの人間補充力がなければ、統體は早晩滅亡してしまふ。故に經濟統體は Gemeinung 又は Gesellung より自己の附屬者としてグルッペを繼承して不斷に形成確保されてをる。故にグルッペは經濟統體の本質的な附屬者となる。企業に於ても企業者がその協働者を集めるからグルッペは勿論重要な附屬者である。

かくグルッペが統體の爲に不斷に人間を補充し又は追加することは、統體より之を見れば、絕へず過去より統體の人的基礎を受けることである。一般

⑤ Attribute.

にグルッペは統體に對し、先づ人間の勞働に對する慾要を充足せしめることを助けてをる。同時に生活範圍も亦慾要充足の基礎となるから統體はその外部より種々の方法で勞働を取入れてをる。故に統體內のグルッペは畢竟統體の爲の人間生活の根源であつて、之が絶へず人間の勞働を提供して慾要充足の最終的可能性を提供してをる。故にグルッペの養育的人的結合は之を統體の生活根源[1]といふ。生活根源は生活範圍と對立し、前者は後者に對し所謂「我等」と稱する意識を有する團體である。家政の生活根源は家族であり國民經濟の生活根源は國民である。[2]

斯の如く過去は生活根源を通じて慾要充足上貴重なる準備を提供するがこの外に幾多の過去の各種の傳統的、技術的、法的、文化的遺産を以て充足の基礎を提供してをる。即ち過去は人間の行爲を以てなされた過去の一切の業績を以て慾要充足を助けてゐる。之を業績の世界[3]と稱す。之は總て過去の遺産[4]であつて之が現在に齎す貢献は蓋し大なるものがある。

① Lebensstamm.
② Gottl, Bedarf und Deckung, S. 73, VI. Vom Lebensstamm des Gebildes,
③ Welt der Werke.
④ Erbe.

一般に業績の世界は人間協同生活の共有物であるが、之が特定の統體に形成的に關係付けられたとき、換言すれば業績の幾分かを統體が享受するときは之を統體の生活遺産[5]と稱す。生活遺産は生活根源と同樣に過去が統體に齎せる慾要充足の基礎である。生活遺産は二つに分れ Erbgut と Rüstgut となる。前者は更に事物的遺産と精神的遺産とに分れる。事物的遺産は經濟生活の單位であつて、之は更に二つに分れて技術的計算單位と經濟的計算單位(貨幣單位)となる。次に精神的遺産の重要なるものは技術と法律とである。更に Rüstgut は Erbvorräte と Erbanlagen とより成る。[6]

(五)　經濟統體の基礎と營利統體の基礎

以上、生活範圍、生活地、生活根源、生活遺産は統體の慾要充足の四大基礎であつて、何れも經濟の形成に際し最終的能力を助長する。而して經濟者は常に實際上の意慾と最終的能力とを、換言すれば慾要の動機とその充足の基礎と

⑤ Lebenserbe.
⑥ Gottl, Bedarf und Deckung, VII. Vom Lebenserbe des Gebildes.

を形成的に調和する任務をなし之によつて始めて慾要と充足との調和が成立する。而して經濟者が右の四つの充足の基礎から充足の最終的可能性を提供される以上、經濟者も亦統體に形成的に關係付けられることになる。茲に經濟統體が成立する。

一般に何れの經濟統體も四つの基礎に立脚してをる。家政、財政及びその周統體たる國民經濟皆然り。たゞ周統體たる世界經濟は生活範圍を缺く唯一の例外的經濟統體である。又內統體は自己の四つの基礎に立脚するのみならず、間接にはその周統體の立脚する四つの基礎にも立脚してをる。例へば家政は自己の四つの基礎によつてその固有の慾要充足の可能性を受けるのみならず、間接には國民經濟の基礎からも充足の可能性を助けられてをる。

最後に問題となることは企業の基礎である。企業は經濟でなく、營利が目的であるから、企業的方法による營利の基礎が問題となる。この基礎たるや營利の最終的可能性を提供するものであらぬばならぬが、この可能性は企業の周統體に求めることが出來る。之は企業がその商品又は生產物を以て經濟統體の充足せんとする慾要を刺戟するからである。故に企業の場合に於ても經濟統體と同樣に（一）過去（二）周圍世界が企業に形成約に關係付けられて經濟統體と同樣の四つの基礎が營利統體の基礎をなしてをる。[1]

上來述べた所に於て經濟統體と營利統體との區別を高調したが、實際に於ては兩者の中間の形態のものが澤山ある。唯茲では經濟形成の純粹の形態のみを取扱ひ混合形態[2]に言及しないが、混合形態の統體の基礎も前二者と何等異る所はない。

要するにゴットルの統體理論又は生活理論によつて經濟は經濟統體なる社會統體であること、隨つて如何なる經濟と雖ども、いやしくも經濟と稱する以上は常に經濟統體即ち生活としての經濟[3]であることが先づ明かとなり、次に經濟統體形成の基礎は生活範圍、生活地、生活根源及び生活遺產であり、而して經濟者は之等の基礎によつて統體の慾要充足を不斷に行つて、茲に經濟の

① Gottl, Bedarf und Deckung, S. 80—82.
② Mischformen.　③ Wirtschaft als Leben.

精神が實現され、生活難に對し人間協同生活が不斷に確保される。之は內統體のみならず、其周統體に就いても同じことであり、而も內周兩統體の協力によつて經濟の精神が實現されることとなる。企業は經濟統體ではないが、現代の經濟生活に重要な目的統體であつて、例へば周統體の國民經濟を建設すべき目的に貢獻する統體である。故に企業は周統體に Lebenswichtige Belang を有してゐる。何れにしてもゴットルによつて經濟統體の系統的概念は極めて明確となつたものといはねばならぬ。

（六八）ハルムスの社會經濟統體概念

更に經濟學に社會統體の概念を根本とせる經濟學者にハルムス教授がある。彼はキールの世界經濟誌[1]に於て社會統體概念に關する廣汎なる學說史的研究を發表し、之が現在の處ドイツの社會學及び經濟學界に於ける此の方面に關する唯一の文獻となつてをる。而してハルムスは之等數多の諸學說

① Harms, Der Begriff der Weltwirtschaft, Weltwirtschaftliches Archiv. 23. Bd. Heft 2.

の考察の結果、之等の何れにも滿足せず、彼は先づ從來統體なる文字が屢、學問上使用されてゐても、多くはその概念規定をなさず、從つて系統的な考察のなされなかつたことを指摘し、次に近年經濟學及び社會學上統體の研究はウキーゼ及びゴットルを中心として長足の進步を呈し、その概念規定は最も傾聽すべきものであると稱してをる。

彼は統體と Gefüge とを區別して統體に對し決定的な概念を與へ Zur Einheit gestaltete Mannigfaltigkeit der Beziehungen と定義し、ゲフーゲは Inbegriff der Mannigfaltigkeit (der Beziehungen) として前者より區別してをる。[2] 彼の統體の定義は當時學界に多大のセンセーションを與へたことは記憶に新たな所である。而して此の兩概念を社會經濟の根本思想として社會經濟理論を社會經濟統體理論[3]と社會經濟聚合理論[4]とに分けたことは先に述べた所である。

彼は社會經濟學が統體概念を拋棄して之を社會學その他に委付することが彼の社會統體の學說史的研究の結果、果して正當なりや否やを問題として

② Harms, Strukturwandlungen der deutschen Volkswirtschaft, Weltwirtschaftliches Archiv. 24. Bd. Heft 20, Vom Wirtschaftskrieg zur Weltwirtschaftskonferenz. S. 246.

③ Gebildetheorie.　④ Gefügetheorie.

をる。彼によれば社會學的思考を社會經濟學に移入することの危險であるといふ論旨、例へば伯林大學のヘルクナー[1]が「古典學派の方法及び體系を社會學的方法で代用せんとする努力が現れてをるが之は他人の畑け荒しである」との說を正當とし且つ社會學自體にとつても社會經濟學に侵入して何等得る所がなく、社會學と社會經濟學とは別個の學問であることを高調し、兩者は相互作用的受授の關係にあるもので、結局、兩者の統一を恐らく社會哲學に求むべきものであるといふ。

かくの如くハルムスは理論社會經濟學に社會學の方法の取入には反對である。併し彼によれば統體概念は決して特に社會學固有の概念ではない。テニエスとマックスウェーバーを除けば社會學の特定の傾向が勝手に之を獨占してゐるのであつて、之が特に正しいといふことは出來ない。故に社會經濟學が事實上正しく統體概念を取入れさへすれば社會經濟學の用語として之を使用することは少しも差支のあることではない。社會經濟の新たな

① Herkner.

發展は統體概念を社會經濟學に取入れることを正當とするのみならず之を必要としてをる。既に常識的用語として統體なる言葉が經濟的活動に關係する人々關係を表現してゐる以上、社會經濟學に於ても此の用語を逸することを許さないものである。[2]

從つてハルムスは統體概念を社會學より移入したといふことを決して意識してゐない。彼によれば、之は社會經濟固有の關係を深く考察することから生じた結果であり、この固有の關係は社會學の體系成立以前に於て、徹頭徹尾社會經濟學的認識の對象であつた。尤も之は統體概念自體が經濟學的又は社會學的方法の何れかによつて定められねばならぬといふのではなく、社會經濟學上重要な概念であると主張するのである。之以外に或は社會學、或は經濟哲學が統體概念を如何に利用しようと、それは夫々の學問の自由であると述べてをる。

右の如くハルムスが統體の概念、從つて社會統體概念の究明に努力した理

② Harms. Der Begriff der Weltwirtschaft. S. 157—159.